

1.psd

(
空
白

3.psd

4.psd

5.psd

Track.1 Piannoman

「んにちは」

ドアを開けて入ると、馴染みの女が座っていた。

彼女は突然の来訪にも動じず、作業していた手を止めて俺に笑いかけてきた。

「あら、久しぶり。んにちは」

俺の適当な挨拶にも彼女は眞面目に答えてくれる。

「しかし。

悪いが俺は今すぐにでも帰りたい気分だ。ここにはあまり長居したくない。別に、彼女とは今まで二人で会っているし、お互に気心が知れている仲だ。とはいっても別に恋人とか特別な関係ということもない。ただの友人の知り合い、友人の友人という程度だろうか。友人といつても彼女の方が遙かに年上なのだが。

俺が黙つて考え方をしていると、目の前から視線を感じた。

「なんだよ」

「いや、ここに君が来るのは本当に久しぶりだと思つてね。何か飲む？ コーヒーかコーラか」

どうやら先生もぎこちない雰囲気を感じたのか、当たり障りのない会話を切り出してきた。俺もどこか居たまれなくなり、自ら冷蔵庫の中を物色し始める。

「あ、そつちは子供たちだからダメよ」

まるで手を叩かれたかのように一蹴された。

くそつ、俺だつてスポーツドリンクが飲みたかった。けど子供たちのつて言われたら仕方ないか。

「……じやあコーヒーで」

今更だが、ここは幼稚園だ。そして俺が【先生】と呼んでいる彼女は幼稚園の先生。居住スペースと併設しているらしい。ちなみに運営はそこそこ上々のようだ。この辺はマンションが多いのに幼稚園は少ないから、そのおかげだろう。運のいいこつた。

「それで？ 今日は何の用かしら？ 用も無しに来るわけないわよね。君はここがあまり好きではないみたいだし。第一、あの事件以来ここには絶対来ないって言つてたと思うんだけど？」

「何回か、用事がある時は来ている。偶々そつちが忙しくて俺と会えなかつただけだろ」「あら、そつだつたの？ でも、まあ。君はここが嫌いだと思つていたから……勘違いで良かつたわ」

そういうつて先生は俺に優しく微笑みかけてくれた。

全く。そんな顔をされると何も言えないじゃないか。

「俺は……普通に生きたかったんだ。それなのに、ここは全然普通じゃない」

「え？ 何でよ。ここは至つて普通の幼稚園よ。そして私はこここの園長先生」

当然のことのように胸を張つて答えるが、この女は本当に普通ではない。

そう、彼女は人間ではない。

「魔法使い」。そういう類のものだ。周りからは恐れられて「魔女」とか言われて、避けられているが俺にはあまり理解できない。高校時代に結構世話になり、彼女のおかげで卒業もできたという恩もあるが、それ以前に「ただの物好きな園長先生」。それが彼女の印象だからだ。それにしても魔法使ひって……使っているのは魔法と言うよりも超能力みたいなものなのだから、いつそのこと【超能力者】って名乗ればいいのに。

相変わらず、先生は俺の方を見てニヤついている。勘弁してくれ。

「今日は葵の頼みごとで来ただけだから、厄介事には巻き込まないでくれよ。全く。あいつ……面倒なことばかり俺に押しつけやがつて」

「面倒なら、面倒ですつて本人にそう言い返せばいいのに」

「葵のやつ……今テスト期間だから」

普段は授業にすら出てないくせに、テスト期間にだけこつそりと顔を出す奴だ。いや、もしかしたら俺が気付いていないだけで出席もちやんとしているのかもしれない。「あなたは？」一緒に学校なんだからテスト期間も同じじゃないの？」

「ああ、俺はもう終わった。だからこうやって来ているんだ」

俺はあいつと違つて、前々から準備していたのでテストも特に問題はなかつた。そう、今日はやつとテストが終わり、仕事もなく、ちょうど暇だつたので來ただけだ。運がいいのか、悪いのか。わからないな。

「とにかく、俺は葵の頼みごとで來ただけだ。何か渡すものがあるんだろ、早くくれ」
そしてさつさと家に帰つて休もう。これ以上ここにいたら、さらに面倒事に巻き込まれそうだ。そんなもの三年前のあの事件だけで充分。

「まあ、まあ。そんなに急がなくても。奏ちゃんにも顔見せて来なさいよ」

「ん？ ああ、奏か。って、今は学校じゃないのか」

「あの子は小学生よ。もう授業は終わってるし、塾もないんだからそろそろ帰つてくるでしょう」

奏はこの女と一緒に暮らしている小学生の女の子だ。三年前の事件以来、拠り所がなくなつた彼女を連れてきたのがこの先生。それ以来、奏の面倒を見ている。養女というものだろうか。実際は飯炊き係のようなものだが。この女は相当怠け者だからな……奏、強く生きてくれ。いつか俺が絶対にここから救い出してあげるからな。

「奏は元気なのか？ しばらく会えてないけど」
会えてない……正確には俺があまりここに来ていないから、会いに行かなかつたという方が正しいが。

「もちろん元気よ。無口などころは相変わらずだけど。友達もできたみたいだし。でも私は迷惑つて思つてゐるのか全然家に連れてこないんだけどね。あ、そうそう、あの子すごく勉強できるのよ」

「こういうのを親ばかというのか。

「元気にしてるなら何よりだ。ま、奏ならどこに行つても大丈夫な気がするな。ところでリニアは？」

ふと、頭に浮かんだ人物について尋ねる。リニアの方とはあの事件以来、一度も会えていないのだ。

「リニアか……」

先生は顔を顰めたまま押し黙つてしまつた

「二番目の弟子のことだよ。リニア・イベリン。覚えてないか？いや、覚えてないわけないだろ」

「……」

一呼吸おくと、先生は大きな欠伸をしながら答えた。

「覚えてないとは言つてない。実はあれ以来、私もリニアとは連絡が取れなくなつているんだ。ドバイに行つたとは人伝手に聞いたけど、それ以外は何もわからない。ま、元気にやつてるでしょ。そもそもあの子がどこかで苦労してるとは思えないし。弟子入り前にも、あの子はハンス・ブリーゲルから色々教えてもらつてたんだから平氣よ。余裕ができたらその内ひよっこり帰つてくるんじやない？」

俺は、そつと溜息をつく。先生もこの話題は落ち着かないのか、何度も冷蔵庫を行ったり来たりしていた。おかげでテーブルの上にはブドウ味の炭酸飲料の缶が山になつていて。先生は昔からこの飲み物が特に好きらしい。

互いに何も言わず缶の山を消費していく。
しばらくすると、いつのまにか俺たちは無駄話をしていた。教授がうるさいだとか、授業が退屈だとか、親御さんの文句が多いだとか。苦手な相手だとしても、こういう会話はストレス発散になるようだ。きっと俺もテスト終わりの疲れが溜まっていたのだろう。誰でもいいから会話をしたかったのだ。

ふと、時計を見るとだいぶ時間が経っていたが、未だに奏が現れる気配はしない。
「奏はどこか行つているのか？ 学校はもう終わつてるんだろ？」
すると先生の口からとんでもない言葉が出てきた。

「奏ちゃんなら夕食の買い物に行つているんじゃない？ 大きな鞄もつて」
先生は両手を広げて鞄の大きさをアピールする。
本当に情けないな。

「子供にそんなことさせるなよ。重くて持つて帰るのも大変だらうが」
すると、今度はもつと情けない返事が返ってきた。
「だつて私、買い物なんてできないもん。私が行つたら余計なものばかり買つてくるよ？」

偉そうに言いやがつて……いつたい何ができるんだ、この女は。

「変わんなないな、このお姫様は」

「何言つてるの、私は働く主婦だよ?」

皮肉を言つてみても先生は堂々とウインクを返してきた。

「結婚もしてないのに主婦かよ」

「だつて私、子供いるじやん」

その子供が飯の準備をしているんだがな。

先生には何を言おうが同じことの繰り返しになりそうだ。

——ガチャ

ドアを開ける音が俺の背後でした。小さな足音が聞こえる。自分の家なのに常にあんな感じなのだろうか。下駄箱の閉じる音が聞こえたと思つたら、職員室にちょこんと顔だけが現れた。奏だ。ガキの頃から見ていたのに、もうこんなに大きくなつたのか。久しぶりに会うと本当に喜ばしい。

ふと、奏と目が合つた。ちょっとびっくりした様子だつたが、奏は直ぐに元の表情に戻つた。

「久しぶりだな、元気だつたか?」
「うん」

「それはよかつた。大きくなつたな、もう五年生か?」

「うん」

「夕飯の買い物つて何買つたんだ?」

「いろいろ」

「そつか」

「うん」

奏は無口だ。先生に聞いた話では三年前の事件の後、失語症にかかつたらしい。治つた今でもあまり喋らないそうだ。俺が奏に会つたのはその頃だ。

「さて。奏ちゃんも帰つてきたことだし、ご飯にしましょ。テストがあつたなら何も食べてないでしょ?」

ちらりと奏の表情を伺うが、別に嫌ではないようだ。でも、悪いな、奏。俺は一刻も早くこの部屋から立ち去りたいんだ。たぶん俺は、まだこの場所が居心地悪いんだろう。

先生の誘いを丁重にお断りし、俺は玄関へと向かう。

「じやあね。またいつでも来て。待つてるわ」

「また来たくないし、待たなくともいいよ」

すると、先生はしかめ面な顔を寄せてきた。

「また、その話。ここはそんなに怖いところじゃないつてば。気負いすぎじゃない? あれから時間も結構経つてあるんだし、昔のような事件はもう起こらないわ」

「……ああ」

—それでもここには来たくないんだ。

自分でも切り替えようとは思っているが、どうしてもここに来ると不安な気持ちになつてしまふ。

先生との会話を適当に済ませて俺は奏の方へと向き直つた。

「じや、奏。またな」

奏が小さく頷くのを見届けてから、俺は幼稚園を後にした。

冷たい風が肌に染み入る。辺りはすでに日が落ちていた。誰もいない通りを一人歩いてい
る、どこか感傷的な気分になつてくる。

三年前、世界に危機がやつてきた。世界の危機なんていうと、それは俺たち一般人の知ら
ないところで勝手に起こつて勝手に解決するものだろう。でも違つた。当时、高校生だった俺はなぜかその世界の危機というのを知つてしまい、更
にはそれを解決する力を持つていたのだ。全く馬鹿馬鹿しい。でも、俺だつて最初は好奇心もあつた。俺には仲間がいてあいつらと
共に、ヒーローにでもなつた気分で世界を救つた。

一けれども、その翌日あいつは死んでしまった。

最初は自殺だと思われていたが、後々それが他殺だとわかつた。俺は一生懸命、手がかりを追つたけど、結局犯人はわからなかつた。あの事件のせいで葵も変わつてしまつた。ひどい結末だ。世界の危機を救う代わりに、俺は仲間の死と親友の変化という代償を背負つたのだ。
それでも世界は何もなかつたかのように過ぎ去つていく。
——俺は何のために世界を救つたのだろう。

「あ」

考え方をしながら歩いていると大事なことを思い出した。

「葵の頼みごと、もらつてくんの忘れてた?」

仕方ない、また幼稚園に戻るか。

「こ……こんにちは」

俺は再び幼稚園のドアを開いた。廊下には馴染みの女が満面の笑みで立つていた。

「あら、久しぶり。こんにちは」

さつきと同じ反応だ。またここに戻つてくることを知つていたのだろう。さすが魔女。こ

こ

の女には適わないな。

「さつき会つたばかりだろ。久しぶりつて何だ」

「あれ、そうだつけ」

「さあな」

本当に疲れる。

深いため息をつくと、彼女は俺の肩を叩いてキツチンの方を指差した。
「ご飯、食べに来たんでしょ？ さつきは、ごめんなさいって帰っちゃつたけど、やつぱり
食べたくなつたの？」

この女、わざとだ。絶対わざとだ。馬鹿にされている気がする。

「そうじやなくて、葵の頬みごと。貰うの忘れてそのまま帰つちまつたんだよ」

「あ、そつかそつか。そうだつたね」

先生は目を丸くして、頭を搔きながらゆつくりと職員室へ歩いていった。

「はい」

ぽんつと手に乗せられたのは、お花や動物がプリントされた派手な封筒。このデザイン…
…幼稚園だからか？ それともこの人の好みだらうか。

「だつせえ」

「そう？ 結構かわいくない？」

俺の反応が気に入らないのか彼女は口を尖らせている。

「……じゃあな」

これで本当に用事は終つた。帰ろう。

と思いきや、ドアノブに伸ばしたはずの俺の腕が止まつた。

「……」

「あなた一人暮らしでしょ。食費も減らせるわよ」

食費。確かに腹も減つている。どうしようか。

俺が考えあぐねていると、突然くいっと何かが俺の裾を引っ張つた。

「ごはん、たべてくるの？」

じつと奏が俺を見上げていた。

……これは断れないな。

俺はおとなしく奏の後ろをついてキッチンへと向かつた。

今日のメニューは器とスプーンと箸と……つて違う。この急展開に頭がついていつてないようだ。とりあえず俺は、奏に渡されたものをどんどんテーブルの上においていった。どうやら今晚のご飯は鍋のようだ。

そして奏がキッチンから大きな鍋を慎重に運んできた。見ているだけで、とても心配になつてくる。

「いただきます」

結局、三人で仲良く鍋を囲んでいた。

「うまい……」

奏の作つた鍋は中々の出来で、正直本当に小学生か疑うレベルだつた。

「一つて、魔法使いがこんな生活してていいのかよ」

あまりにも普通すぎる。

「じやあ、逆にどう過ごせばいいのよ」

「そうだな。なんか、こうバーンとかっこよく魔法を使つて……」

箸を置いて、宙に文字を描く仕草をしてみると、彼女はくすくすと笑つていた。

「それつて、つまり。どこかの機関に捕まつて、実験されている施設から逃亡とかする感じ？」

「いや、そういうんじやなくて……」

俺は慌てて水を含んだ後、必死に否定した。

「どうして魔法使いがこんな不便な生活をしているのかつてことだよ。もつと楽な生活ができるんじやないのか」

彼女は苦笑を浮かべていたが、箸だけは進んでいた。

そして鍋の肉を食べながら、考え方をしていた彼女はやつと口を開いた。

「今の時代、魔法使いなんて必要なくなつてしまつたのよ。こんなものは、せいぜい飾り程度。それくらいに過ぎない。魔法使いなんて称号、人生で何の役にも立たなくなつてしまつたし、第一、魔法なんかより今は銃弾一発の方がずっと強いじゃない」

「それはそうだが。

「それに」

にやりと口の端を上げた彼女は、箸で俺を指さしてきた。

「魔法では稼げないでしょ」

「確かに。魔法でお金が作れるわけでもないしな」

正論すぎて何も言えない。

「だから、これぐらいがちょうどいいのよ。働いてお金稼いで普通に過ごせればそれで充分。今更あなたに『世界の平和を守れ』なんて言う人いないんだから、あなたも普通に学校に通つて、卒業して、普通に生きればいいのよ」

「違う。俺はこんな話がしたくて言い出したわけではないのに。」

沈黙。食器の音しかしない。

「奏ちゃん、おかわり」

彼女から器を受け取ると、奏は慣れた手つきでご飯をよそつた。普通の生活か。普通なら、子供が飯の準備することなんてないんだけどな。でも、まあ、奏の料理の腕前を目の当たりにしてしまうと、任せてしまう気持ちもわからなくなる。

「うまいな

「でしょ」

「ありがとう」

「どういたしまして。遠慮しないで、いっぱい食べて」

「あんたじやない。奏に言つてんだ」

すると、奏がチラリとこちらを見た。

「料理上手なんだな、びっくりした。まだ五年生なのにすごいな、また奏の料理食べたいよ」

「……」

奏の返事はなかつたが、多分喜んでいる気がする。

「ごちそうさま」

スープを飲み干して一息ついた頃、再び奏が俺の服の裾を引っ張つた。

「……明日も食べに来ていいよ」

「そつか。ならお言葉に甘えて」

自然と口にしていた。あれだけここに来ることを嫌がつてたのに、今はほんの少し心が軽い。ずっと抱いていた緊張感がほぐれたような感じだ。

「何ニヤニヤしてんだよ」

奏との会話の最中、ずっと先生は気色悪い笑顔を浮かべていた。

「何つて。楽しいから。あ、あなた明日も来てね」
「……なんだか、この女に言われるのは嫌だな。」

こうして夜が更けていく。

誰かと一緒に夕飯を食べたのは久しぶりだった。

たまにはこんな夜も悪くないか。

数日が過ぎた。学校へ行くと、普段見掛けなかつたあいつが、久しぶりにやつてきた。いつもなら近況を聞いたり、彼女でもできたかななどと冗談を言い合つたりするが、今日は挨拶だけで特別な会話はしなかつた。

「試験受けたのか？」

「ああ……まあ」

葵は軽く言葉を濁しながら答えを回避する。あんな風に反応するということはあまり試験については触れられたくないようだ。良く考えれば、いや良く考えなくとも、いつも授業に出ていない人間が試験を受けて点を取れるわけないか。俺は思わず苦笑してしまつた。

「そつか、そつかー」

「う……」

俺にからかわれることはわかっていたはずだろうに。

葵は苦々しい表情で俺から視線を外した。いくらこいつがマイペースだといつても、定期試験を台無しにしてしまつては多少なりともショックがあるのだろう。学生にとつて最も大切なものは単位である。それを全部逃してしまつた奴の顔には、嬉しさとは真逆のものしかなかつた。

「それは、それは残念だな」

「……からかうなら他の場所でやつてくれ、疲れるから」
もう俺にいじられることに飽き飽きしたのか、葵は顔をしかめながら拒絶する。

涼やかな風がそよそよと吹いた。ふと空を見上げると、綺麗な青空が広がっている。どうやらこの季節もそろそろ終わるらしい。

ただただ無意味な会話が流れる。雑談。友達同士の軽い冗談、そこには互いの私生活に関することは一切話さない。しかし、彼とは中学時代からの付き合いである。
「最近もいたずらしてゐるのか」

「いたずらって？」

「高校時代に色々したじやないか」

「あー」

高校時代、俺たちの学校はかなり厳しかった。

例えば、『ひとたび何か起こると、問題が解決するまで全生徒の活動をやめさせる』など、あらゆる厳格な校則の下、性能のいい子供を大量に生産するのが学校の方針だった。しかし、そのような学校でも唯一の欠点がある。それは俺たちのような問題児が、一人や二人必ず出てくるという点だ。認めたくないが、俺と葵が仲が良くなつたのは運命のようなものだつたのかもしれない。

実は葵も魔法使いであり、生まれた時から能力を持つていたという。遠くにあるものを引き寄せたり捕まえることができる力だ。あいつはその能力をいたずらに使つていて。問題を解決できず、先生の手が出そうになつた時、あいつは宙に手を伸ばして空気を掴み、そ

のまま先生の後頭部に勢いよく投げつけた。空氣といえども、その威力は絶大で先生は気絶してしまう。このような度を超えたいたずらのおかげか、先生たちは疲れ切つてしまい、学校を休む先生が増えていったという噂まである。更に驚くべきことは、あいつの周りの友達はその能力のことを全部知っていたのだ。それにも拘わらず、彼らは葵を気味悪く思うこともなく普通に接していたようである。今思うと、俺たちはなんとも素敵な学校生活を送っていたな。

さて、本題へ移るとするか。俺は鞄の中にずっとしまっていたそれを取り出した。先日、先生からもらつた書類だ。こいつがあまりにも神出鬼没だつたため、会えることも伝えることもできなかつたのである。

「ほら。直接行つてもらつて来たんだ。失くすなよ」

「ありがとな。行きたくなかつたはずなのにお疲れ」

「別に。夕飯もご馳走になつてきたから」

「へえ」

葵は驚いた表情で俺を見ていた。まあ、そうだろうな。俺だつて自分に驚いた。

彼は再び封筒に目をやり、また俺の方を見返す。

「これ、中に何があるのか気になつたんじやないか？ 俺なら、好奇心で見るけど葵が、すつとその華やかな書類を突き出してきたので、俺はすぐに目をそらした。

「俺は見たくない」

「ふーん。なんで？」

意外そうな顔をしながら葵は聞き返してきた。

「何が入っているのかもわからないし、開けたって得しそうにない。それに余計な事を思
い出したくもないからな……大体、そんな封筒の時点で受け取りたくもなかつたさ」

「そういうと、葵はこれ以上、追求することなくその封筒を鞄の中へとしまつた。

「なあ鈴木、この後授業ある？」

「三限と四限」

「そつか」

どちらからともなく、俺たちは揃つてベンチに腰掛けた。特に会話をすることなく、ただ
呆然と校内を眺めている。雑音の中の静寂。時がゆっくりと流れしていくようだ。授業へと
急ぐ生徒、楽しそうにおしゃべりをしながら帰る生徒、大きな鞄を背負いながら歩く教授。
まるで映画館に映し出されたスクリーンを見ているようである。

「ああ、何も起こらない平和な日々だ。

ふと隣を見ると、葵は少し空腹に負けているのか、時計を見ていた。俺もつられて時計を
見る。まだ昼休みが終わるまでかなり時間が残っていた。俺の視線の先に気付いたのか、
葵は満面の笑みを向けてきた。

「鈴木、お腹空いてないか？ 何か食べに行こうぜ」

「彼の瞳から嫌な予感がする。

「……割り勘なら」

26.psd

「そ、そ、そ、君のおごり
おい、それは割り勘じやないだろ。

ぼんやりと授業を聞く。教授の言葉が耳に入らない。それでも俺は無意識に、重要そうな部分だけはノートに書き写していた。試験の恐怖故だろう。親のお金で大学に通わせてもらつているため、最低限のことはするつもりだ。

ふと、先日のことを回想する。半ば強制的だったが、三人揃つて落ち着いた雰囲気の中で夕食を食べた、あの日のことを。

先生自体は元々嫌いではない。ただ俺のトラウマのせいであそこには近づきたくなかっただけだ。今は……まあ以前よりは、ほんの少し気持ちが軽くなつた気がする。また誘われたら、俺は何だかんだ言いながらも行くのだろう。

「このようない状況では、消費者は……」

いつのまにか講義が終盤に向かっている。この教授、最初から最後までトーンが一定である。すごい。

「では、この問題を……前列で三番目の学生」
誰だか知らないが、不幸だな。そう思い、ため息をつくと教授が俺の目の前に立つていった。

「君だね」
……へそ。

入学した当初、俺はサークルや学科の集まりのようなものは、存在こそ知っていたものの全く入る気は起きなかつた。今になつて思えば、適当に参加して狂つたように遊びまくつていたら、色々なことを忘れたまま過ごすことができたのかもしれない。残念といえれば残念だつた。とはいえ、おかげで俺は一人の時間が以前より増え、アルバイトや勉強に多くの時間を充てることができるようにになつた。

そして、現在。大学生活も一年と半年が経つた。俺は何も変わつていない。葵でさえ向こうの仕事を手伝い、二度と三年前の悲劇が起こらないよう努力しているというのに。俺は、何をすればいいのかもわからないままだ。

本当に俺は17歳から何も成長していないのかもしれない。このまま無意味に過ごしていいともいいのか。

「放送でお知らせします、今回の曲は……」
聞き覚えのあるメロディに思考が停止する。

「なんだつて、この曲？」
「さあ」

『Top Of The World』だな。

目の前を過ぎていったカップルのうち、男の方が途方に暮れたような表情をした。まだ恋愛初期か。俺は歌詞を脳内で追いながら帰り道についた。

「魔法使いの すげえな」

「別に凄いこともない」

「なあ、他にはないのか？ 火とか水、出したりするやつ」

「そんなものないよ。俺にできることはこれだけだ」

「何だ、それじや偽物じやないか」

「何だと？」

「はいはい、二人とも。ほら、今日はここまでにしてそろそろ帰ろうよ」

「……うるさいな、大体何でお前がいるんだよ。他の女子と遊べばいいのに、毎日毎日ついてきやがつて」

「何でつて……子供の頃からずつと一緒に遊んでいるからじやない？」

「別にそんな小さい頃からでもないだろ。中学からの付き合いじやないか」「そうだっけ？」

つまらない夢。久しぶりだな。あいつが夢の中に出てくるのは。ここ一年ちつとも出てこないから、もう見ないと思つていたのに。全く、生きていた頃もだが、死んでからもしつこい奴だ。

家に着いた途端、とりあえず横になつていたのだが、どうやら寝落ちしてしまつたみたいだ。外をのぞく限りまだ夕方か。

深く深呼吸をしてから、俺は起き上がつた。

「……部屋の掃除でもするか」

このままじつとていたら、何かに押しつぶされそうな気がした。

午後九時。だいぶ遅い時間帯だが、俺は他人の家の前にいる。

「こんばんは」

ドアを開けて入ると、そこには見覚えのある女性が座つていた。先生はちらりとこちらを一瞥したが、仕事の手を止めるることはなかつた。俺も気にすることなく部屋に上がるが、彼女は何も歓迎をしないのは良くないと直したのか、申し訳程度の笑顔を向けてきた。

「あら、今日は反対ね」

「ああ、鈴木はここに来ることが嫌いだからな」

すると先生は肩をすくめて、否定するような動作をした。

「それにしてはこの間は楽しく遊んで帰つたけど」

「本人が嫌だと思っているんだから、そう信じなくちゃ」

「それも、そうね」

俺は迷うことなく手前のソファに腰かける。遅れて彼女は一人分のカップを手にして入ってきた。いつもと同じ香りがする。おなじみの紅茶だ。カップを俺の前に置き、彼女はお気に入りの缶ジュースを自身の前に置いた。

「仕事はどうだつた?」

「ああ、なんとか。最初はちよつと大変だつたけど、実際にやつてみたら楽だつたよ」

「そう、それならよかつたわ」

「良かつたといえば良かつたのか?まあ、おかげで学校の試験の方はダメみたいだけど」俺が苦笑いを浮かべて答えると、先生はジュースを飲みながら素つ氣ない口調で答えた。

「それはそちらの事情、私には関係ないわ。私たちはそういう関係でしょ」

「……魔女だな」

俺は軽く挑発してみるが、彼女は平然としていた。

「もともと魔女よ」

静寂。

それでも空気だけは張り詰めていた。

「最近、なんかあつた?」

「ああ、まあそつちはなんとか……」

世間話に慣れてないのか、彼女はあいまいな返事をする。

「……いつも俺たちの会話はこんなだな」

「まあ互いの接点となる話題がないからね」

「そもそもうだな」

またしても静寂。彼女が二本目を開ける音だけがしていた。

「他のやつらはどうしてるんだ？」

「他のやつら？ 誰のこと？」

彼女は心当たりがないのか疑問を示している。

「リニアは元気にしているだろうが、赤城と幽遊は？」

やつと見当がいったのか、二人の名前が出ると、彼女はすぐに嬉しそうな顔で話し出した。

「ああ、元気よ。幽遊の方がいつも振り回してるけど、そこがあのカッブルの魅力だからね」

「そつか。特にそつちは動きがないんだな」

「今になって研究所や協会が動く理由はないからね」

「たしかにな」

会話が飛び交うことで、先ほどの冷たい空気が緩んでいくように思える。そして俺が紅茶を飲み終えると、目の前に優しい微笑みがあつた。

「……何？」

会話を飛び交うことで、先ほどの冷たい空気が緩んでいくように思える。そして俺が紅茶を飲み終えると、目の前に優しい微笑みがあつた。

「考えてみると、かなり忙しい一年半だったなーってね」

「そうか？」

「あれこれと走り回っていたからね。あなただって、二度とあんなことが起きないようになつて必死だつたじやない」

この女にそんな風に言われると、むず痒くなつてくる。俺は急いで話題を変えた。

「そういえば、安月給でこんな大変なバイトも珍しいな」

「いつか給料上げるから心配しないで大丈夫よ」

「ふーん」

再び静寂。話題の区切りが見えるようだ。何も言わずに、じつとカップに残つた紅茶の跡を眺めていると、俺はいつもエプロンをしている少女の顔を思い出した。

「そういえば、奏は？」

「ああ、寝ている」

「九時に？ 早いな」

「ああ見えても、小学生だし、優等生だからね」

「誰かさんは正反対だな」

さて、もういいだろ。そろそろ本題に入るか。

「……何かあつたみたいね」

俺の考えが伝わつたのか、彼女の顔も張り詰めた表情に変わる。それを見て、つい俺は薄ら笑いを浮かべてしまつた。そして、俺はゆっくりと胸のポケットから、小さな布が入つた透明のビニールを取り出した。

「これ何だと思う？」

「さあ」

「三年前に俺達が着ていた制服の一部だ。仕事を処理していたら近くに落ちていた」

「あら」

「密かに動いてるみたいだ。性懲りもなく」

「挑発していると？」

「たぶんな」

「彼女はビニールを手に取り、じっくりと眺めていた。

「色からして……女もの。確かにこれは見過ごせないわね」

「ああ」

「それにしては、私たちだいぶ落ちついてるけど」

「今更何を」

三本目に彼女は手を伸ばした。俺も二杯目をもらうためにキツチンへと向かう。

「俺一人で処理しなければならないのか？」

「さあ」

再びソファに腰を落しき会話を続ける。彼女の表情は先ほどより緩んでいた。俺が思つ
ていい程、彼女はこの件を気に留めていないようで少し腹立たしくなつてくる。
「単なる偶然である可能性もあるが、しばらくは緊張しなければならないと思うけど」
「まあ、それもそうだが。向こうもこちらに私がいるのを分かつていて、こんなことする
馬鹿もいないでしよう」

「戦いを覚悟しての挑発になるからな」

「そしたら鈴木くんはどうするつもり?」

その内彼女があいつの名前を出すとは思っていたが、これ出でれぬし困る。

「……どうすれば良いかわからない」

「ならば」といてあげなさい」

「これは置いて行く。探索はそつちが専門だからな」

「わかつたわ、やつてみる」

「ありがとう、じゃあ俺はもう帰るから」

俺は玄関の方へと向か直った。

「やようなら」

彼女は軽く手を振りながら見送ってくれた。

「やようなら」

「I've been where you are before° No one understands it more° You fear every step you take」
トーベ・スモルジウ「心がこゝに座つてお嬢様が歌ふが返つて歌ふ。

〔So sure that your heart will break° It's not how the story ends〕

数日前。日付が変わるまで残り二、三時間という時に俺の家のチャイムが鳴った。覗き穴に見えたのは葵だった。いつもなら追い返していたが、今日は夢見が悪かつたせいもあり、気分を紛らわすにはちょうど良かつたのだ。

「よく覚えてるな？」

「うんざりするほど聞いたからな」

当時のことは全部覚えているが、俺は暇つぶしにそのまま会話を続けた。

「それ、いつ頃だつけ？」

葵は歌うのをやめて、静かに答えた。

「高校二年の頃だろ。その前にこの曲はあつただろうけど
俺はほんやりと、その時のことと思い出した。

「どんびのやつ、一緒に歌えるようについて最後まで覚えさせたな」

葵も俺と同じように昔のことを思い出していいるのだろうか。彼は普段めつたに目にすることのない穏やかな顔を浮かべている。

「ああ……そだつた。懐かしいな、あいつは面白い奴だつた」

そういえば、こいつこんな時間に訊ねてきたが、今まで何してたんだ。

「どつか行つて来たのか？」

「まあ、色々とな」

見事にはぐらかされてしまつたが、俺もそこまで気になつてゐるわけでもないからいいか。

「……お酒でも飲もうかな」

ぽつりと葵がこぼした。こいつがそんなことを言うなんて初めてだ。乗らない理由がない。

「そうだな、そうしよう。ところで酒は誰が買うんだ?」

「ええと……割り勘?」

「……こんな時こそ割り勘か」

「幽霊退治しない?」

「は? 幽霊退治?」

俺は数回、まばたきをしながら相手を凝視した。

「そう、幽霊退治」

相手はそんな俺の表情がおかしいのか、くすりと笑いながら答える。

部屋には古いポップソングが流れている。ラジオ独特の雑音も織り混ぜ、その音楽は絶妙な響きを出している。この聞き覚えがある曲は、高校時代に学校の先生が聞かせてくれたやつだ。

「あんた……突然、何言つてんだ」

これは本当に突然の出来事だった。今から十分前、俺の携帯に一本の電話がかかってきた。出てみると、つい先日にも聞いた声だった。

『夕食、食べにきたらどう?』

『夕食?』

『そう、夕食。食費削れるわよ』

『おい、俺はオタクとそんな親密な仲じや……』

『じやあ、三人分用意して待ってるわね』

断る前に電話を切られてしまった。全く。なんて強引な誘い方だ。

一体どういう風の吹き回しだろう。あんな電話無視すれば良かつたのに、俺は再び幼稚園へと足を運んでしまった。そして、先生は開口一番に「幽霊退治しない?」だと。

突然すぎて、驚く気力もなかつた。

「それで? なんだつて?」

とりあえず、話の内容は知りたかつたので俺は先生に聞いてみた。

「だから何回も同じこと言わせないでよ。あなたが幽霊退治をするの。幽霊退治」
何が何だかさっぱりわからない。

「幽霊退治……？ 僕が？」

「なに、できないの？」

おい、良く見てみろ。俺は祓い屋でもなんでもないぞ。そんな漫画に出てくるようなことを俺にやらせる気か。

「で生きるわけないだろ。」といふか、俺はそういう非現実的な事からはもう、おさらばしたんだ。葵にやらせるよ、葵に。向こうの方が専門だろ。何であいつじやなくて俺に頼むんだ

だ」「葵くんには別の仕事を頼んでるのよ」

「う……けど他にも俺より使える奴が他にいるだろ。赤城さんとか」

俺の困った顔が楽しいのか、先生はずつとニヤニヤしている。

「周ちゃん」と幽遊ちやんは旅行に行つたのよ。しばらく休みがなかつたからつて幽遊ちやんが怒つちやつて。それと、ご存じだらうけどリニアとは連絡とれないし」

飲みかけの炭酸を机に置き、先生は静かに説明するが、この態度からして俺にはその説明も信じられ難い。

「なら、残つたカードはあなた一人。あなたがやるしかないじゃない？」

「この女……『じやない？』だと？」

俺は先生のセリフを恨めしそうに繰り返した。

「じやない。俺はやらないぞ」

俺も俺だ。何も考えずに、のこのことやつて来たのがいけなかつた。そんなに親しい間柄でもないのに、わざわざ電話までしてご飯に呼ぶわけがないじやないか。何か用事がある

はづに決まつてゐるだら。まつたく俺も気が抜けすぎていたな、反省しよう。

「大体、俺が退治なんてできるわけがないだら。常識的に考えてみろよ。俺は葵みたいな特異な能力は持つてない。簡単な魔法しか使えないんだ」

「へー」

先生は雑誌を右手に飲み物を左手に、適当に相槌を返してきた。とても暇そうな顔をしている。目の前の机に大量の書類が積まれていてことに気づいてないのでだろうか。

『『へー』じゃなくて……。もしもし？ 俺の話聞いてたか？』

「あ、うん、聞いてるよ」

一瞬だけこちらに視線を向けたが、すぐにそれは雑誌へと戻る。

こいつ……聞いてねえ。さつきから三ページはめくつてるぞ。

「どうしてもやりたくないの？」

じとりと先生を睨んでいると、やつと彼女はまともな会話をしてくれる気になつたようだ。

「どうあつてもしたくない。アルバイトも勉強もやらなきやいけないし、俺だつて忙しいんだ。神父でも祓い屋でもないので余計な用を増やしたくない」

「成程。分かつた、それなら仕方ないわね。いたずらに呼び出して悪かつたわ」

——カラソツ

先生が雑誌を閉じた際の風か、飲み終えた空き缶が床に落ちた。静かな職員室に缶の音が響く。お互ひ何も言わずに、相手を見つめ合う。しかしそれは穏やかではなく、どこか敵

意のようものが含まれている気が……。

「奏ちゃん、そこにいるの？」

不意に、先生が困った顔でドアの方を見た。すると、いつからいたのか奏の顔だけがドアから覗いていた。俺が奏に声を掛ける間もなく、先生は会話を進める。

「奏ちゃん、巫女よね？」

「うん」

「今回のことできる？」

「できる」

「じゃあやつてくれる？」

「うん」

俺が口を挟む暇もなく、とんとん拍子に話が進んでしまった。先生は本当に先生のような表情を浮かべながら奏の頭をなでている。

「今回の場所は奏ちゃんが通う小学校だつたから、このまま放置したら奏ちゃんも心配すると思つてたの。ちょうど良かったわ。あ、もちろん報酬はちゃんと支払うからね、といつても生活費にいくけど」

多少は申し訳ないのか、先生はそつと頬を搔いていた。いや、そんなことはどうでもいい。それよりもっと気になるところがあるだろ。

「おいおい、ちょっと待て。こんなこと子供にさせるのか」

「仕方ないじやない、放置しておくわけにもいかないでしょ」

冗談だろ。いざとなれば、命も危ないっていうのに。
奏、一人に任せたなんて……。

「ん？」

何故か、奏が茫然と俺を見つめていた。

「……」

「いやいや、ちょっと待ってくれ。」

「……」

「こんなのがただ見て見ぬふりすればいいじゃないか。いくら可愛い妹分がお願ひしたとして
も、俺は疲れているし忙しいし。そうそう、俺はもうこんな非現実的なものとは関わらな
いって決めたじやないか。だから……ほら……こんなもの見て見ぬふりを……。」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

できるわけがなかつたのだつた。こうして俺は久しぶりにこのような類の仕事を引き受けてしまつたのだつた。畜生。必ず報酬もらつてやる……五割は確実にもらつてやる、畜生三先生はどこからかハンカチを取り出して、清々しい笑顔で見送りをしてくれた。

「いつてらつしやーい」

「うるせえ三」

過程はともあれ、俺は奏と共に学校へ向かつた。学校までは大して遠くはないはずだが、寒さのせいととても遠く感じてしまう。

「寒いな」

「うん」

正直にいうと俺はだいぶ緊張している。この手の仕事とはしばらく無縁だったということもあるが、何よりめんどうなことに巻き込まれる可能性が高いからだ。
何かが起きる前にとつとと事を收めよう。

ちらりと隣を盗み見る。たぶんこの緊張の原因はここにもあると思う。奏とこんな風に一人で歩くのは初めてだ。なんだかいつも話している時とは違う雰囲気で、妙な感じがする。

いつも以上に奏が大人びて見えた。仕事という名目があるからだろうか。

説明が遅れたが、奏はかなり能力のある巫女だ。無免許であるのは仕方がないが仕事はで
きるから大丈夫だと聞いたことがある。ちなみに巫女が使う神通力も魔法の範囲内である
ため、奏も一応魔法使いだ。最初に【魔法】を大成した人曰く、【説明することはできても
話にはならない力】。これが魔法というものらしい。
実にあきれる理論だ。その後、長い年月を経て様々なタイプへと分かれていったらしいが、
本人はそこまで気にならないらしい。その本人というのは今頃、幼稚園の職員室でおなじ
みの炭酸飲料片手に雑誌でも読んでいるんだろうが。

一人で考え事をしながら歩いていると、いつのまにか奏が先頭にいた。奏も緊張している
のだろうか、少し肩に力が入っているようだ。
無理もないか、今回は奏がメインの仕事だもんな。

「そういえば、巫女の服は着なくてもいいのか？」

「……」

奏の緊張をほぐすつもりで声をかけたが、返事が返つてこない。逆に気まずくなってしまった。
「この状況を打開するにはー。」
「俺の中の巫女のイメージって巫女装束着て、鈴振りながら踊る感じなんだけど奏もそ
ういうことやるのか？」

窮余の一策として、頭の中に浮かんだ疑問をそのまま言葉にしてみた。

「……」

奏は足を止め、少し首を下げた。

「あ、やばい。失言だつたのか？」

「……しない」

「え？」

奏はすっと体を反らして、俺の目をまじまじと見つめた。俺が眞面目に質問をしているのかを判断しているようだ。

「そんなことしないよ」

「あ、ああ。そうなのか。ごめん、ごめん」

奏の迫力に気圧されてしまった。やはり、触れてはならない部分だつたようだ。

「必ずしも巫女がそういうことをするわけじゃない」

「へえ」

「うん、そうだよ」

そして奏は、また前を見て歩きだした。

奏のこのような反応はかなり新鮮だつた。いつもは会話という会話が成り立つていなかつたから。どうせなら、この機会にもつと聞いてみるか。

「じゃあ伝統服を着るのか？ 今着ているのは普段着だろ？」

質問してから数秒間。返事もないが、足を止める気配もない。聞こえなかつたのだろうか。もう一度聞こうと思った瞬間、奏がぱつりと零した。

「……恥ずかしい」

「え？」

「あんな服着たら恥ずかしい」

そうか。いくら大人びて見えても奏は小学生だった。確かに、その年頃の女の子にはあまり好まれる服装ではなさそうだ。

「悪いな、変なこと聞いて」

思わず俺は笑つてしまつていた。前を歩く奏の表情は見えないが、おそらく彼女も顔を赤めているようである。年相応の反応で俺は少し安心したのだった。

俺たちが住んでいるこの町には幼稚園から高校まで全部ある。おかげで自然と人が集まり、多くの団地が軒を連ねている。そんな住宅地から少し歩いたところにある小学校。町内に二、三か所ある内の一つ。そして、奏が通つている学校だ。

さすが夜の学校。昼間とは全然雰囲気が違うな。

俺と奏は昇降口を抜け、廊下に出た。俺たち以外誰もいない廊下は、静寂に満ちていて、本当に得体のしれない何かがいるようだ。

「何階に行けばいいんだ？」

奏はゆづくりと階段を指した。

「四階。五年生の教室」

「奏は何組なんだ？」

「二組」

奏は右手でピースを作り、ぽつりと答える。

四階に上ると、「5-1」という看板が真っ先に目に入った。

「それで、どこの教室に」

俺が訊ね終わる前に、奏は二組の教室へと向かつていった。

— 奏のクラス？

仕方なく後ろをついていくと、奏はロッカーの前に立っていた。そしてポケットから鍵を取り出し、ロッカーを開けると、中から何かが転げ落ちた。

— 御幣だ。よく巫女さんが振っているやつ。

「……いや、何で御幣が学校のロッカーにあるんだよ」

「……」

奏はこちらを見ているが、返事がないようだ。床に落ちた御幣を奏は丁寧にポケットへと入れた。とりあえず、幽霊退治の準備は整つたみたいである。

「さて。どこで幽霊が出るんだ？」

「隣のクラス」

奏の指示に従い、俺たちは隣の三組へと移動する。

「そういうや、こんな勝手に入つていいのか？ 普通は警備員がパトロールしているんじやな

いか？」

「うん。だから先生が前もつて説明してたよ」

……あの女、本当に色んな意味で怖いな。

教室に入ると、俺はポケットの中から紙の束を取り出した。そしてドアの周りとその周辺にそれをつけると、『誰も入れない』と紙に文字を書く。

これはただの落書きなどではない。言葉と文字には本当に力が入っている。拳より言葉が強いという言い伝えがあるようでは、物も言いようでは角が立つという諺は真実だ。古来より、言葉と文字には巨大な力が込められている。

そう、魔法の原理はここから始まる。俺も仕事をするからには一通りの魔法は習った。魔法の構成は表音文字と表意文字に分かれている。俺がよく使うのは表音文字の方だ。文字を適当に書いた後、自分でもよくわからないが力を込めるとき、その文字の通りの効果が発揮されるらしい。

俺が入口で作業している間、奏は幽霊が存在するのか否かを確認するため、机を整理して儀式を行っていた。

——御幣を振りながら。

よく揺れる。奏は時々、こちらの様子を伺いながら淡々と儀式を進めていく。巫女さんが

48 psd

儀式をしているのを見るのは初めてだ。やっぱ、どんな宗教であれ神聖な儀式の最中は独特な空気感があるな。教室が一瞬の内に別の空間へと変わったように感じる。しかし、次の瞬間、莊厳な雰囲気に満ちていた教室は一気に現実へと引き戻された。

——がらり。

「なに?」

背後で教室の扉が開く音がした。おかしい、俺はさつき紙を貼つたはずだ。いくら俺に才能がないといつても基本は学んだ。あんな初步的な魔法くらい失敗するわけがないはずだ。なのに、何故ドアが開くんだ。まさか幽霊、いやもしくは俺より高度な魔法使いか。

「あら」

現れたのは若い女の人だった。どうやら一般人らしい。

さて、どうしようか。

この状況を何て説明するか。まず、俺の後ろにいる奏が何をしているのからだな。答えは『儀式を行っている』。では次に俺は何をしているのか。これも簡単だ。正解は『それを見物している』だろう。この二つを参考にして、現在俺たちは他人の目にどう映つているのだろうか。

「……」

「えっと、その、だからですね、これは……そのちょっとした事情がありまして、だから

「その」
「奏ちゃんじやない」

「え？」

「こんばんは」

「こんな時間に何してるの？」

「儀式です」

「そう、頑張つてね」

「はい」

俺のことはそつちのけで会話が進み、あつという間に彼女は教室から出ていった。

「誰……？」

「担任の先生」

「そう、なのか、でも何で？」

素直に疑問を零すと、奏が最初から説明してくれた。実は今回の件を依頼したのは先ほど
の担任の先生であり、彼女の言葉によると、『学校に幽霊が出ると』いう物騒なうわさが子
供たちの間で大きく広がっているらしい。そこで奏が巫女だと知っていた担任の先生が密
かに奏に依頼したというわけだ。学校側としても、子供たちを落ち着かせるためという
と事態の収束のためだろう。問題は、俺一人が何も知らなかつたということだ。帰つたら、

問い合わせてやる。

「そういうや奏は、学校に幽霊が出ていることを知らなかつたのか？」

「うん」

「巫女なら真つ先にわかるんじやないのか？」

「見れなかつた」

「周りの噂は信じなかつたのか？」

奏はこくりと頷く。意外と直接目にしないと信じない性格らしい。

「じやあ、何でこんな依頼引き受けたんだ？ 友達が心配だつたのか？」

「うん」

「へえ。それで？ 儀式を行つた結果は？」

「何もいない」

「そうか」

幽霊がいないなら、いないでいい。何も起きていないのが一番だ。そもそも、幽霊のうわさは一部の子供たちが適当に作つた嘘が広まつただけかもしれない。

「じやあ、帰るか」

机を元通りに直し、俺たちは教室を出た。

——そろり

「ん……？」

突然、奏が俺の腕を掴んだ。

「どうした？」

奏は少し強張った表情で前を指さしていた。つられて俺も前を向く。

すると一、白く透き通った存在が俺たちの目の前を通り過ぎていった。

ゆっくり、とてもゆっくりと。

こういうときは目を合わしてはいけない。これが幽霊に対する正しい対処法だ。
そして非常に小さな音だつたが、よく耳を澄ましてみると、その物体は何かを呟いていた。

—行きくな

—疲れて

—ないから怖い

—遊びた

「狂つたのか？」

幼稚園に戻ると、真っ先に俺は先生へと詰め寄った。

「何が？」

「とぼけるな、学校に出たのは幽霊じやなかつたぞ」

「あら、幽霊じやないの？」

あくまでも冷静に対応する先生に頭が痛くなつてくる。

「いたずらをするにも限度があるだろ。子供まで動員しておいて幽霊じやないだと? 何を勘違いしているのか知らないが、俺はあんたにあまりいい印象を持つてないからな」「はあ……とりあえず落ち着きなさい」

「何が落ち着けだ」

「幽霊ではなかつたんだろ?」

突然、先生の目の色が変わつた。やつと真面目に話を聞くらしい。

「ああ、幽霊ではなかつた」

「それじやあ何だと思う?」

「……魔法か?」

そうだ。最初は幽霊かと思つたが、あれは幽霊なんかではなかつた。あれは学校に通つてゐる子供たちの不満が積りに積つて一つになつた、いわゆる「念」と言われるやつだ。言葉には力がある。魔法を使わない人であれ、その人の言葉には力が籠る。子供も例外ではないのだ。

「そう、あれは魔法だつた」

先生はそう言つてため息をつく。

「結局、先生が行くのが面倒くさかつただけだろ」
呆れたように皮肉ると、意外な答えが返ってきた。

「半分はね」

「……残りの半分は？」

「今回の件が本当に魔法のせいだと言うのなら、私を動かすことが目的だつたに違いない」

「本当に魔法のせい？ どういうことだ、先生を動かすことが目的？」

答えは解っているが中々に口に出せない。きつと確信が持てないからだろう。そんな俺の内心を見破ったのか、先生はまるで宿題を出すかのように俺に質問をする。

「今感じている疑問をそのまま言つてみなさい」

今感じている疑問。それは――

「いくら子供たちの言葉が積もつたといつても……その、実体が見えるほどの【念】になることは……」

薄々感じてはいた。でも、まさかとは思うが。

「学校に……魔法使いがいる……？」

「正解」

魔法使いを実際に目にしたのは中学生の頃だ。その時、俺が目にした魔法使いというのが時宮葵だ。最初は魔法使いが何なのかも知らなかつたし、ただの超能力者かなんかだと思つてた。今になつて考えてみると、友達がそんな特異な奴にも関わらず驚かなかつた俺も相当特異だつたのかもしれない。

葵の能力は、いたずら程度のもので俺もそこまで魔法がすごいとは思つていなかつた。高三の時には手から炎を出す珍しい魔法使いを見たが、あれ以来俺はすっかり「そちら側」の人間とは出会つていなかつた。まだ存在しているのかすらも怪しく思つていた程だ。それなのに。

「……また突然だな」

「なに、怖いの？」

「ああ、怖い」

素直に返事をすると、先生は驚いた顔をしていた。

「何で？」

「さあな。魔法使いとは色々と過去にあつたからな」

「でもあなただつて魔法の一つや二つ知つてるじゃない？ 魔法使いじやないの？」

「あれは護身用だ」

投げやりに答えると、先生はそれ以上の追求はしなかつた。そしてテーブルの上のジュースを口に含み、大きなあくびをする。目前でこんな呑気な態度をとられるとイライラし

てくる。どんな事件が起きたら、この女は慌てふためいて対応をするのだろう。いや、今この冷静な態度こそが大人の対応なのか？俺がまだまだ未熟だということか？そんなことはないはずだ、俺が普通で向こうが異常だ。

「ふふ……まだ聞きたいことがあるんじやないの？」

俺がイラついているのを知っているだろうに、先生はさらに煽つてくる。

「今回の件の裏には何かあるんだろ？」

先生は俺が尋ねる内容を既に予想していたのか、余裕の笑みで話し始めた。

「この間、保護者と先生が集まる懇親会があつたのよ。一応、奏ちゃんは親がいないから保護者である私が出て、まあたくさんのお嬢御さん達と軽く会話をしたりしたの。それでその懇親会の後に担任の先生と個人個人で面談する機会があつてね。その時に、学校内で幽霊が出るという噂を聞いたのよ。向こうも奏ちゃんが巫女だということは知っていたから、私にそのことを言つてきたんでしようね。まあ私も最初は、どうせ学校によくある七不思議みたいなものだと思つて話し半分に聞いてたけど」

「……けど？」

「数日前、葵くんが仕事を終えて帰ってきた時に、現場にこんなものが落ちていたって渡されたわ」

先生は後ろの戸棚を開き、机の上に置いた。透明なビニールに包まれていたそれは、とても見覚えがある布きれだつた。

信じられない……だつてこれはー、

「そう、三年前にあなたたちが着ていた制服」

「なんで……」

俺が愕然としていると、先生は試すように聞いてきた。

「鈴木くんはどう思う？」

「俺の意見を聞いてもどうしようもないだろ。というか、もう答えは出ているんだろ」
「何か別の考えがあるかも知れないじやない」

「俺は特にない」

「それなら仕方ないわ。私もそこまで重く捉えるつもりはないんだけど、何もない街で急にこんなものが出てくるとね。少し警戒しといた方がいいんじゃないかつて思つて、この布切れについて色々と調べてたんだけど」

「その出所が奏が通つてる小学校だつたってことか」

「ピンボーン」

ご機嫌な先生はウインクをしながら肯定した。当たつてほしくはなかつたが。

「辻褄が合いすぎていてるの。誰かが意図的にやつたとしか思えない、放置しておくのもなんだから奏ちゃんにお願いしたのよ」

「結局、幽霊はいなかつたけど」

「それは結果論。あなたたちが動いてくれたから、こういう結果が出たんじやない」

「思念……子供たちに直接、害はないんだろ？」

「でも親御さんたちの耳に入ると、色々と面倒くさいでしょ」

つまり犯人。というか向こうの狙いは事が大きくなることだつたつてことか。

「学校 자체が気に入らなくて犯した悪戯かもしれないけど、もつと何か大きなことを狙つ

ているのかもしれない。現状では、証拠がその思念だけだから何もわからないわね」

先生は大きく肩を落とし残念そうにして、こちらの様子を窺つている。

「それで……俺にどうしろと言うんだ？」

「処理できる？」

「できない」

「どうして？」

「俺はちゃんと魔法使いでもないからな」

「奏ちゃんがいるじゃない」

「子供をそんな危険なことに巻き込むのか？　あいつは小学生だ、何かが起こった後じやど

うしようもない」

「そんなの関係ないわよ」

「関係ある」

お互い気づかない内にどんどん距離を狭めていたようだ。先生の顔が先ほどより近くにあ
る。ここからは気合の勝負だ。後退することはできない。大体、無理やりに押し付けられ
た俺達の立場を考慮すべきだ。張りつめた空気が流れている。それはまるで、緊張感という糸が張り巡らされているかの
ようで、

「大丈夫」

静かな部屋に幼い声が響いた。振り返ると、とつくに部屋に返したはずの奏が入口に立っていた。

「私はできるからいい」

奏はいつもの無表情で俺たちを見ている。そう答えると思ったから奥にやつといたのに。言い争つていて内に向こうまで声が響いてしまったようだ。奏が了承してしまったとなると、話し合いは終わつたも同然だな。

今ここで俺が奏の援助に行かないと、あいつは一人で処理しなければいけなくなる。それはとても危険だ。

「わかった……手伝えればいいんだろ」

子供が勝負に勝つたかのように、先生は満面の笑みを浮かべた。

「その制服の布端はどうするんだ?」

「これは非常に重要なものよ。あの制服は三年前の事件以来、学校側がわざわざ制服のデザインを変えたから二度と作られることのない代物。つまり学校側があの事件に関連する人物を引き入れた可能性もある」

先生は全てを話してはくれないようだ。

それでいい、わざわざ余計なことに足をつっこまなくていい。

「じゃ、明日中に終わらせる」

部屋を出る瞬間、文句でも残していくことを思い、俺はちらりと先生に向き直った。

「普通に過ごしていいって言つてたあんたが、何でまた俺にこんなことさせているんだろ
うな」

「人手不足だから?」

至極真っ当な答えが返つて来てしまつた。

翌日。今日はかなり忙しかつた。教授に呼ばれて学校に行き、図書館で課題をこなし、ア
ルバイトに行き、休む暇もない。むしろ、休み暇がないからこそ頑張ることができるのか
もしれない。怠惰は敵だ、何も考えずに動き続ける方が楽だと思う。

バイト終わりの午後七時。外に出てみると、辺りは真っ暗で冷たい風が疲れた体にしみて
くる。いくら重ね着をしていても寒いものは寒い。もつと厚い服装にすればいいのだろう
が、今日は動きやすい格好でないと駄目だつた。なぜなら、この後にも予定が控えている
からだ。

奏と共に小学校の幽霊退治。今日は昨晚の倍以上の紙束を持つてきており、あらかじめ文
章も書き終えている。今度はもう失敗しない。しつかり奏のサポートをしなくては。
「とりあえず奏を迎えていくか」

幼稚園まで歩いて二十分。マンションに囲まれた道は、街灯は少ないが多くの木々が生い

茂つてゐる。縁が多いのは良いと思うが、夜はどうしても物悲しく感じてしまう。そして、この暗さではいつ犯罪が起きてもおかしくないので心配だ。

昨日と同じ部屋のドアを開けると、いつも通り仕事もせず雑誌を読みながら寛いでいる先生が「早いわね」と一言声をかけてきた。

あんたに用はないんだがな。

先生の隣に座つていた奏に視線を送ると、彼女は小さく頷き俺の方へ駆けてきた。

「いってらっしゃーい」

呪いのような激励を無視して、俺たち二人は再び学校へと向かう。

＊＊＊

昨晩と同じ光景。やはり夜の学校には慣れないようだ。

「一応ここにもつけておくか」

また一般人に入つてこられるに困るため、校門に『絶対に入れない』と書いた紙を貼つておく。そして、廊下にも『動けない』『逃さない』と書いた紙をあちこちに貼つておいた。廊下の構造上、邪念体のようなものに逃げられると人間の足で追いつくことは不可能なため、このような罠を作ることにした。以前もよく使つていた方法だ。昨晩と同じように、ロッカーから御幣を取り出してきた奏と例の教室に向かう。

教室に入り机を整理すると、奏は神聖な儀式を始めた。とても集中している。奏の邪魔が

入らないよう、サポートするのが今日の俺の仕事である。

午後十時、点滅を繰り返す監視センサーの明かりだけが教室を照らしていた。窓からこぼれる街灯の光は頼りなく、むしろ不気味な雰囲気を一層増しているように感じる。静かな教室は、まるでこの空間だけ時間が止まつたかのように錯覚するほどだ。俺たちを残して動き続ける時間。ここで何が起こつても、起こらなくても世界は回り続けるのだ。ぼんやりとそんなことを考えていると、突然息が詰まるほどの巨大な圧迫感を感じ、思わず両手に持っていた紙束を握りしめた。

——何かが近づいてくる。

言葉にできない程の不気味な音が廊下から聞こえてきた。
それは徐々に大きくなり、微かに内容が聞き取れるようになつてくる。

——行きたくな

——疲れ

——ないから怖い

——遊びたい

その時だつた。突然、大きな音と共に風が吹いて教室のドアが勢いよく開かれた。俺たち

の目の前に現れた白く透き通るような塊は、昨晩よりも更に巨大になつてゐる。特に敵意があるとは思えないが、何が起こるかはわからない。大人しい内にさつさと拘束して奏に祓つてもらうのが一番だらう。祓うこと 자체はそこまで難しくないはずだ。

しかし先ほどからずつと聞こえてくる声が耳に痛い。機械音のようなそれは、同じ言葉を何度も何度も繰り返し続けてゐる。自分の集中力を保つことで精一杯だつた。

「——」

奏が何か祈祷の言葉でも言つたのだろうか。『声』のせいで何も聞こえなかつたが、奏のおかげで邪念体は教室の外へと逃げ始めた。

「よし！」

作戦通りだ。

俺は準備していた罠をすぐに起動し、邪念体を捕えた。

「捕えたぞ！」

一息ついて邪念体を良く見てみると、街灯の光に照らされているそれは、とてもきれいだつた。光が透過された邪念体の表面には深い朱色が映つており、まるで小さな深紅の海のようだ。そんな神秘的な光景に目を奪っていた俺は気付かなかつた。貼り付けていた紙が一枚、また一枚と落ちていてることに。そして次の瞬間、紙が一気にはじけ飛んだ。

「な……」

反応する間もなく、邪念体は俺との距離を一瞬で詰めてきた。

「くつ……」

苦しい。息ができない。邪念体は俺の首を一定の力で絞めている。
くそつ、油断していた。これは仕事だ。一瞬でも気を抜いたら、生死に関わってくると知
っていたはずなのに……久しぶりすぎてそんな基本的なことまでも忘れていたのか、俺は。
あまりの締め付けに首筋近くの皮膚が破れてしまいそうだった。
血が流れている感覚がする。

ふと、奏の姿が端に見えた。どうしていいかわからないようで、慌てた表情をしている。
「く……るな」

最後であろう力を振り絞って、俺は奏へと声をかけた。今、奏が来たらあいつも危険な目
に合わせることになってしまう。怪我を負うなら俺一人で充分だ。
瞼が重くなってきた、頭に血が巡っていないせんだろう。

——『こんなことで怪我なんてしたくない』

唐突に昔の記憶がよぎった。

そうだ、こんなところで締めてどうする。危険なんて、この仕事に限つたことじやない。
危険はいつどこで何をしようがついて回るものだ。
それが常識であれ、非常識であれ……

感覚が乏しくなっている右手を何とか動かし、ポケットから紙を取り出した。

すると、パンツという音と共に小さな爆発が起こり、首に巻きついていたものが解け、俺の身体はまっすぐ床に向かつて落ちていった。受け身もできずに落ちた俺の身体には、衝撃が直接染み込んでくる。

「う……腰……」

物凄い痛みだが、先ほどの息苦しさよりもマシだ。駆け寄つて来てくれた奏の頭を撫でて、無事を示すと、俺はすぐに邪念体に向き直つた。爆発によつて後退した邪念体の周りは、同じく爆発の跡が残る床があつた。一瞬、『弁償』という言葉が頭によぎつたが、まあ先生が何とかしてくれるだろう。いや、してもらわなければいけない。

さて、奏に情けないとろんばかり見せてられないな。

「一魔法はかなり単純なんだ。ある程度の能力を備えると応用も効く。だからこんなこともできるようになる」

不思議そうに見上げる奏を横に、俺は『止まれ』と書いた紙を折つて紙飛行機を作り、「1、2、3」という合図で邪念体に向かつて紙飛行機を飛ばした。

「じや、さつさと仕事終わらせるか」

奏は安心したように領き返してくれた。

最後に投げた紙飛行機によつて拘束された邪念体を、奏はあつという間に清めた。

「ふう……これで一段落だな」

額に張り付いた汗を拭おうとした時、首筋に痛みが走つた。空白の期間が長かつたせいと

はいえ、あんな化け物にやられそうになるなんて。まあ、無事に終わつたからいいか。

「さつきは心配かけて悪かつたな」

邪念体の消失を見届けた奏に声をかけると、彼女はじつと俺を見つめてきた。

「……心配した」

不安な色をした大きな瞳が俺を見据えてくる。

「……ごめんな、これからはもう無謀なことはしないから安心してくれ」

奏の頭を小さく撫で、俺たちは学校を後にした。

＊＊＊

「あらら」

先生は笑いながら俺の格好を眺めている。服には学校の埃と爆発による汚れがいっぱいついていた。

「へえ。かなり苦労したみたいね？」

「……ああ、大変だった」

奏と一緒に幼稚園に戻り、先生に結果を報告しに行くと、この女は「腕が落ちたのね」などと皮肉は言うが誉めることはなかつた。まあ期待もしてなかつたが。

「奏がちゃんと退治したから、もう学校には出ないだろ」

「どうかしらね。根本的な原因の魔法使いは退治していないから、まだまだ何か起ころるかもよ？」

「あ、魔法使い。

「そういえば忘れていた三」

俺が絶叫して頭を搔き落す姿を、先生は大きな声で笑いながら見ていた。

「鈴木くん大丈夫よ、心配しないで。ひとまず、今回のこと向こうも何か思うところがあるでしょ。まさか邪念体があんな風に暴走するとは思つてなかつたはずよ」

「ん？ どういうことだ？」

目を閉じて考えているような素振りをする先生は、ゆっくりと説明し始めた。

「子供たちに熱心な教育をして立派な大人にするのが普通よね。でも子供たちの感情なんて、そこにはないのよ。親が『全部あなたのためだ』って決めるから。子供たちがいくら友達と遊びたいと思っても親が勉強を強要する。親も強要したくないけど、しなければならない。それは隣の子もしているからってね」

「どういうことだ？ それは普通じゃないのか？」

「まあ普通と思うかもしれないけど、そんな『普通』を子供たちは恐ろしく感じてしまつたのかしらね。遊びたい年頃に、鞄を背負つて塾に通つて家に帰れば予習に復習。それはある種の悲劇みたいなものじやない？ こうして子供たちの心の中には不満が生まれて、それが学校に積つていった。それを魔法使いは利用したのよ。子供のような純粹な感情であればある程、邪念体を召喚するのは簡単。そして、向こうの目的は保護者や教師に噂を広まらせるためつてとこかしら」

「いや、魔法使いが何でそんなことするんだ？」

「その先は私にもわからないわ。ただ邪念体は危なくないという仮定で出発したっていうのは明確ね。全く……子供たちの心を元にしたんだから、むしろ攻撃的に決まつてるじゃない」

そう言つて、先生は窓をそつと開けた。冷たい風が先生の髪を揺らしている。

「これからどうするんだ？」

「何が？」

「まだ完全には終わつてないんだろ、魔法使いも捕まえてないし」

この結末はあまりにも中途半端だ。

「心配しないで、多分これ以上学校に関する噂や事件は起きないはずよ」

確かに俺もその点については同意できる。今回は偶々俺たちだつたから良かつたものの、一般人だつたら本当に大事になつていたからだ。

「まあ向こうが望んだ結果が何だつたかはわからないけど……」

「けど？」

「幽霊退治は終わつたんだからいいんじやない？」

先生は大きく伸びをして笑いをこぼした。言われてみれば、綺麗に終わつた気がしなくもない。大きな事故も起きていないし。

「そう……だな」

「そうそう」

いつもの清涼飲料水を気持ちよさそうに飲み干す先生。

——では、そろそろ代価を受けとる時間だな。

「報酬を早く……」

「はい」

先生は俺が言いだす前に、引き出しから小さな封筒を取り出していた。

「今回は苦労したみたいだからね」

「あ……ああ」

俺はしばらく目の前に置かれた封筒が信じられなかつた。まさかこんなあつさり貰えるとは。多分、俺は今とても笑つてゐるだろう。これでしばらく、ゆつくり安心して過ごせると思うと、努力の甲斐があつたものだ。たまには、努力するのも悪くないな。

「じや、俺はもう家に帰る」

先生と互いに、にこにこと笑いながら『お疲れ様』という挨拶を交わし、俺は幼稚園を後にした。

すると、幼稚園を出たところに奏が立つっていた。

「どうした？」

「……」

奏は何も答えない。何か言いたいことがあつて俺を待つていたんだと思つたけど。

奏は依然として俺を見ている。

「……悩みでもあるのか？」

すると、俺の質問とは関係ない答えが返ってきた

「ごめんね」

「ん？」

「さつき……守れなかつた」

「あ、ああ」

何だ、そんなことを言いたくて俺を待っていたのか。

俺はため息をついた後、奏と同じ目線になるまで屈んだ。

「奏が気を使うことじやないだる。失敗したのは俺だ、仕事中に油断なんかしたから罰をもらつたんだ。奏は自分の役割を果たしただる。それに何でもかんでも自分のせいにするなよ。まだ子供だろ」

奏は驚いた表情で俺を見ている。

「だからそんな暗い顔するな。報酬も貰つたし何か食いに行くか？」

「でも」

奏は少し戸惑つた顔で幼稚園のドアに視線を送つていた。おそらく先生が気にかかるのだ

ろう。

「大丈夫だろ、先生ならカップ麺でも食べるつて」

そして、俺は奏を連れて近くの飲食店へと向かつた。奏は俺が思つていた以上によく食べるようだ。予想よりお金が要りそつだが、奏のおいしそうに食べる表情を見ていたら、別に構わない気がしてきた。

「奏、お腹いっぱい食べていいからな」
「うん」

コツコツとヒールが床を叩く音が廊下に響き渡る。長い髪に耳飾り、すらっと伸びた脚がスカートから覗く。誰が見ても好感を持つはずであろう魅力的なスタイルの女だ。

ここは小学校、女はどこかの教室に向かっている。下校時間はとっくに過ぎ、教師も帰り支度を終えて学校を後にしている時間帯だろう。

窓から入る月の光が女の顔を照らし、表情さえも明るく見せる。

女は『音楽室』と書かれた教室で立ち止まり、中へと入った。

すると、そこにはもう一人、別の女がピアノを弾いていた。慣れた手つきでピアノを弾く女は、彼女が入ってきたにも関わらず、とても落ち着いている。

「素敵な曲でしょ」

ピアノを弾いていた手を止めて、女は問いかける。

「私のために用意してくれたのかしら」

入ってきた女は気持ち良さそうに笑いながら、机に腰掛けた。

「机ではなく椅子に座つてください。供たちが一生懸命に拭いた机なんですから座らないでください」

咄嗟に注意を受けた女はブツブツと文句を言うが、女性は笑顔でその反論を受け流してい

る。そして二人同時に口をつぐみ、お互に別々の方向を眺めていた。

何もしないまま時間が過ぎていくが、その沈黙を楽しむかのようにゆっくりとピアノ演奏が始まった。心がおちつくような曲だ。

「これ何で曲？」

「Carnation……」

どこかで聞いたことがある。ポップソングのようだ。質問した女性はしばらく考えていたが、やがて思い出すことを諦めて窓の外を眺め始めた。

「素敵な曲ね」

「ええ、私この曲が本当に好きです。落ち着いていて。この時代の音楽はいい曲ばかりなんですよ」

女は嬉しそうに話していたが、ぱつとピアノを弾く手を止めた。

再び音楽室に静寂が訪れる。

「何の用事ですか、こんな遅い時間に」

女が口を開くと、窓を眺めていた女性は女の方へと視線を戻した。

「わかつていいでしよう、真田先生」

真田と呼ばれた方の女性は顔を上げ、机の方を見返した。

「金色の魔女」

「……」

「黒死病の女」、「マエストロ」……かなり陳腐ですけど、もつともらしい名前ですね」「古い異名ばかりね、一体いつの時代よ、センスを欠片も感じないわ」

様々な異名で呼ばれていた女は、興味無さそうに自身の爪を眺めている。

「今回の事件で認識が変わりました」

「へえ」

「奏ちゃんの担任になつたのは、本当に偶然でした。どうせなら試してみようと思いまして」

「それで?」

「予想通り強かつたです」

「評価甘すぎよ」

「金色の魔女」と言われた女は涼しげに笑っていた。自分がからかいの対象にしている子に高得点を出されてしまい、面白くないのだろう。

「それで、どこまでが目的だったのかしら」

真田はまるで昔話でもするかのように淡々とした口調で質問に答え始めた。

「元いた研究所と縁を絶つてから随分経ちました。三年前の事件で研究所 자체も大きな損失を受けたので、彼らも組織を統制することも困難でした。私はその時逃げ出した者の一人です。そして研究所を抜け出して選んだのが教師の道でした。そして、先生になつて初めての生徒の一人が奏ちゃんでした」

魔女は何も言わずに真田の独り言に耳を傾けている。

「今回の事件に悪気はありませんでした。ただ勉強に苦しんでいる子供たちを見ていると可哀そうだと思つたんです。全部あなたのためだと言われ続けている子供たちをどうにかしてあげたくて。でも教師という立ち場の私ができるのは応援だけ。そんなもの、何も解決してくれないことを子供たちは既に知つているんです、そんな事実が少し残念でした」

「そのまま給料をもらつて満足する先生は嫌だつたの？」

「どうなんでしょう。もしかしたら『理想の教師像』というものを、研究所で私の脳内へと埋め込まれてしまつたのかもしれないです。事実、私は今でもこの感情が本当に自分のものなのかもわかりません。ただ今回の事は、私が子供たちのストレスを取り除きたいと

いう考え一つで起こしたことです」

「その後始末は誰がするのかしらね」

「クラスに巫女がいるじゃないですか」

真田の返答に、魔女は大きな声で笑い出した。

「なるほどね、こちらが遅かれ早かれ処理してくれるつてわかつていて起こしたのか。すごいじやない、あなたもつと大人しいのかと思つていたけど案外頭回るのね」

「邪念体、幽霊のうわさが広がることはある程度覚悟していました。けれど、邪念体を退治すれば、こうした思念自体もなくなるので綺麗な結果に終わる。これが私の考え方でした」「無責任ね、でもまあ結果オーライなのかしら」

魔女は先ほどと打つて変わつて嬉しそうにしている。

「うちの子はどうだった？」

「彼が暴走した邪念体を簡単に捕えるのを見てびっくりしました。三年前の事件の主役ら

しいですね」

「一つ一つ見守つていたのか？」

「はい、私が起こしたことですから」

「それで結論は？」

いきなり口にした魔女の言葉に、一瞬真田は言葉を失つた。結論、つまり『彼はどうだつたか』という問いの答えを魔女は訊ねているのだ。

「『ing』」

真田の答えに、今まで笑つていた魔女の表情が変わつた。

「運命の開拓能力『ing』。研究所側も知つていたのね。三年前の敗北で得た教訓が多くつたというわけかしら。やっぱり今回の事件もいたずらに起こしたんじゃないの？」

「いいえ。『ing』と言う能力 자체は研究所で埋め込まれた一種の常識です」

「常識。それ素敵な言葉よね。どんなことも常識という言葉の下では通用する。しかし『ing』とはね。その能力を持つていてる本人さえ知らないというのに。まあ私ははどうでもいいけど。また無責任なことをしてからして、私たちに責任を押しつけなければいいわ」

一息ついてから、今度は魔女がひとり言のように話し始めた。

「研究所の子供が先生になつたつていうのは私も耳にしていたわ。まさかそれが奏ちゃんの担任の先生だとは思いもしなかつたけど。偶然か、はたまた必然か。どちらにしろ一人で今回の事件を起こすにはあまりにも大変ね。後ろに誰がいる」

魔女の質問に、真田は今まで以上の動揺を見せた。

「……私一人で計画したものです」

「そ、」

しばらく真田を眺めていたが、魔女はそれ以上問い合わせることはなかつた。そして、再び机に腰を掛けると、胸ポケットから煙草とライターを取り出した。

「ここ禁煙です、学校ですよ」

先ほどの動搖はどこにいったのか、真田はさう自然とした表情で魔女を諫めた。
「ああ、悪い、悪い。私も久しぶりだつたから何も考えてなかつたわ」
煙草を仕舞い直すと、魔女は思い出したように話を切り出した。

「あなたがさつや弾いていた曲、私結構好きよ」

「If you gave me a fresh carnation

I would only crush its tender petals

With me you'll have no escape

And at the same time there'll be nowhere to settle……」

真田が歌詞を淡々と語る。

「魔法も歌詞も力を加えると言ふ点では同じね」

静かに語る魔女に真田は問いかける。

「逃げるところはありますか」

「……」

「あの場所を離れたら、何か違う世界があると思つていた。けれど、結果は同じ。じつに

いつても社会というのはあつて、私たちはそりに適応していかなければいけない。私、自分が無力なのが悔しかつたです」

真田はどこを見るわけでもなく、ただ宙を見つめていた。

「Carnation の最後はハツピーホンドなのかバツドエンドなのか誰にもわからないわよ」

「If you gave me a dream for my pocket

You'd be plugging in the wrong socket

With me there's no room for the future

With me there's no room with a view at all.....」

魔女は歌詞の一部を呟いた。

「()んな最後おアリだと思うけ()」

真田は驚いた顔で魔女を見返した。

「あれこれ悩んでいるようだけど、そんな()は誰もが経験すること。大体、歌詞をそんな複雑に考えなくていい。音楽は音楽として楽しめばいいのよ」

魔女の言葉に感心したような表情をする真田を余所に、彼女はポケットから小さな袋を取り出す。中に入っているのは制服の切れ端だ。

「これ、何だと思う？」

魔女が真田の目の前に差し出すや否や、彼女は勢いよく立ちあがつた。ピアノの椅子が倒れることにも気づいてないのか、怯えた表情をしていた。

「わ、わかりません」

「本当に？」

「……はい」

明らかに関連性はあるが、絶対に出所を言いそうにはないようである。魔女はため息をつくと、ビニール袋を仕舞い直した。

「じゃあ私はそろそろ行くわ」

その言葉にずっと俯いていた真田は顔を上げた。

「もつと……聞いていかないんですか？」

「また機会があるでしょ」

氣の抜けた返事をして魔女はドアに向かう。

「普通の人間ではないですね」

「私はただの幼稚園の先生よ」

「私も先生です」

「あら、一緒ね」

「そうですね」

「では、奏ちゃんをよろしくお願ひします。先生」

「はい、奏ちゃんのお母さま」

そして、二人の女性の笑顔と共に、音楽室の扉は閉まつた

夜。学校の職員室で、作業をする女教師が一人。彼女の名前は真田だ。

「かなり熱心ね」

「仕事よ」

彼女の後ろに立つてゐる誰かが、嘲笑と共に話しかけている。

「そんなことしなくとも、普通に暮らせるのに何で仕事なんかするの？」

声の主は非常に派手な格好をした少女だった。

「私はもう研究所を出たから、働かないとお金が貰えないのよ」

素つ気なく答える彼女に少女は怒りを露わにした。

「それなら帰つてきたらいいじやん。何で帰つてこないの？」

「そうね、私にもわからないわ。ところで今日は遊びにきたの？」

書類を確認しながら訊ねる彼女に、少女は目を丸くした。同時に頬が赤くなつたのを否定するように首を振る。

「そんなわけないでしょ。ただ真田ちやんが生きているかどうか確認しに来ただけ」

「そう」

淡々と書類を確認する真田の後ろから、少女も書類の内容に目を通す。もちろん理解はし難いので、真田に逐一尋ねるが彼女は適当な返事を返していた。

最後の書類チエックを終えると、真田は椅子を回転させて少女に向き直つた。

そして、その少女を真正面から見据えて忠告をする。

「気をつけて」

「……何に？」

少女は突然の真田の言葉に困惑を示していたが、彼女の目は真剣だつた。
「金色の魔女が探している。餌を浮かべるのが急すぎたわ」

その言葉でやつと理解したのか、少女も真剣な表情に変わつた。
「そんなこと覚悟してた。それに真田ちゃんには関係ない」

「あるわ」

「なんで」

「友人を危険な目に合わせるわけにはいかないわ」

友人という言葉に反応したのか、少女の目は一層大きくなつた。

「何それ……放つておいて」

「お願いだから無茶なことはしないで」

「……わかつた」

真田の真剣さに圧倒され、少女はしぶしぶ了承したのだった。

「くそつニ騙されたニ」

夜遅くだが、俺、鈴木聰太は絶叫していた。近所迷惑なんて今は後だ。

「全部千円札つてどういうことだ、あの女ニ」

あの場で内容を確認しなかつたのが俺の最大のミスだ。おかげで昨日の晩飯は災難だ、コ

ツコツと貯金していたお金が一気に飛んでしまった。まさか奏があんなに食べると
は思わなかつた。いや、奏がたくさん食べることには構わない。問題は報酬の方だ。
昨日の大量出費のせいで、俺の頭の中ではずっとお金の計算が続いている。バイトのお金
をいくら生活費と学費に回すか。もつとバイトの量を増やすか。

「はあ……」

それにして妙な感じがする。昨日のような出来事がこれからも、頻繁に起きて今後の俺
の私生活を邪魔するような気が。まあ気のせいだろう。とりあえず、このまま幼稚園に向
かって正当な報酬をもらいにいくとしよう。それに当分の間は食費節約のため、向こうで
御馳走にならないといけないな。

-Track.1 "Pianoman" End.

82.psd

83.psd

Track.2 Retrace

わわわわ。

ここはとある空港だ。大勢の人々が忙しなく行き来している。案内放送から流れる声。それに合わせて移動する人々。長旅からようやく帰国したのか、たくさんの荷物とお土産を手に移動する人。再会を喜び、抱き合う人。空港は様々な感情で埋め尽くされている。そんな騒然とした場所に一人の女が立っていた。

眼鏡をかけ知的そうな外見の女。きらきらと輝く銀髪に、空のように澄んだ青の瞳。顔立ちからして明らかに日本人ではなさそうだ。通り過ぎる外国人でさえも、珍しそうに彼女を眺めていた。そんな周囲の視線を楽しむかのように彼女は自信満々な顔で出口へと向かう。

「三年ぶりか……」

眼鏡をくいと上げる。これはどうやら彼女の癖のようだ。

「少しも変わらないな」

まるで何回も訪れたことがあるような口ぶりだ。女は出口が見えると、ほんの少し歩調を早めた。そして外に出るや否や、

「ええええええ!?」

一絶叫する。

「どうして誰も迎えに来てないの? 三年ぶりなのに!」

何か手違いがあつたのだろうか。女は迎えがいないと、怒りの表情を浮かべていた。
「何だよ!せつかく戻ってきたのに!歓迎カードの一つもないじやないか!」

彼女は行き場のない怒りにひたすら地団駄を踏み、壁を蹴りつづける。他人の視線は全く
気にならないようだ。

こうして数分が過ぎ、彼女も冷静さを取り戻すと大きく深呼吸して顔を上げた。
「もういいに迎えが来ないんだつたら、私から行つてあげるわ!」

「一リニア、参上!」

女は空に向かつて高らかに宣言する。このリニアという女が再び日本に戻ってきた直後、
今まで安定していた勢力図に歪みが生じ始める。この女のせいか、あるいは偶然か。
ただ明らかなのは、この女が今回起きた事件に深く関わっているという点であり、彼女によつてこれまで隠されてきた真実が明かされてしまうという点だ。
リニア・イベリン。『銀髪の魔術師』と呼ばれた女が再び日本に舞い戻ってきた。

86.psd

「へつくしょいっ三」

天城紫乃は思わずくしゃみをした。

「何だろ、誰か噂でもしてんのかな」

ティッシュで鼻をかみながら、彼女は妙な不安感を胸に覚えた。現在、平日の午前中。子供たちのはしゃぎ声が隣から聞こえてくるが、園長先生である彼女はいまだ職員室にこもっている。

「あ、これかわいい二

パソコンに映し出されるおしゃれな鞄に目が止まつた。就業時間中だというのに、この女は他の教師に内緒で、通販サイトを開いている。バレたらまた叱られてしまうからだ。そう、既に三回ほど経験済みなのだ。

「園長先生、早く来てください三」

「……はいはい」

彼女は奥から聞こえる職員の声に、しぶしぶエプロンをつける。

「さつきの鞄、後で買つかな」

ひとり言を呟きながら扉を開けると、彼女の前に凄まじい形相の職員が立っていた。

「宮森先生……まるで鬼のようですね」

宮森という女性は二コりと笑うと、彼女の腕をがつちりと掴んで教室へと連行した。しかし、そんな天城紫乃も社会人。教室に入ると、一気に表情を変える。

何人の子供の面倒を見て一緒に遊ぶ。そして事務的な処理も行い、更にはもうひとつの方の仕事も行う。普通の人間ならオーバーワークで倒れてもおかしくないだろう。だが、彼女は普通ではない。

「彼女の身体は事実、ゾンビのようなものであり疲労感も苦痛すらも感じない。

「せんせい！」

「なーに？」

園児に笑いかける先生。何も知らない人間にはただの平凡な人間に映るだろう。

鈴木聰太もこの天城紫乃も。

保育士の仕事は思つていた以上に大変である。子供たちの面倒を見ることに気を使い、もちろん親御さんたちへも気を使う。最近は英才教育の風潮があり幼稚園より塾にいれる人が増えたが、それでも未だに多くの園児がここに通つている。時々、天城紫乃は思う。このような忙しい日々を送つていたら、魔法関係のことなど考える余裕もない。ただ別にそれが不満というわけでもない。現に彼女は今的生活をそれなりに幸せと感じている。

しかし、今日だけは何かおかしいようだ。彼女の胸にはずっと、もやもやとした気分が残つてゐるようである。

「杞憂だつたらいいんだけど」

天城紫乃は頬杖をつきながら深いため息をこぼす。魔法を創始した女には全く見えない。こうして彼女の気分が晴れないまま一日が過ぎようとしていた。

夕方。他の職員が退勤すると、天城紫乃は別の顔を見せる。こちら側では、近頃密かに魔法士協会や研究所が動いているという事実を捉えた。先日、鈴木聰太と九条奏を派遣したあの幽霊事件だ。表向きには彼ら二人が事件を解決したが、直接処理をしたのはこの天城紫乃だ。

「三年前にB級のせいであんな痛い目にあつたのに、連中も懲りないわね」机の上に資料を放ると、彼女はいつものように冷蔵庫から炭酸飲料を持ち出し一気に口に含む。

その時だつた。

「ここにちはー＝先生」

ノックも無しに勢いよく扉が開いた。

「リニア、来ちゃつた」

予想外の訪問に、彼女は口に飲み物を当てたまま固まつていた。そして、大きなため息をこぼす。

「これだつたのか……」

どうやら彼女を一日悩ませていた原因がわかつたようだ。

「久しぶりね、何の用かしら」

すると、リニアという女性は両手を大きく広げた。

「逃げる場所がなくなつてしましました。それで私は帰つてきました」

「逃げる場所？」

「はい」

「……三年間、ずっと逃げていたということ？」

「はい」

「あなたつて人はもう……」

元気に返事をするリニアに対し、彼女は呆れるように頭を抱えた。普段からマイペースであるこの天城紫乃がそのマイペースを維持できない相手が二人いる。一人は職員の宮森先生。それでもう一人がこの女、リニア・イベリンである。

「うわ、これまだ持つっていたんだ」

「勝手に触らないで」

「はい、はい……あ、これ可愛い」

「全く……」

あれこれ好き勝手に部屋を見て回るリニア。そんな愛弟子をしばらく眺めた後、彼女は何かを決心したように、手にしていた飲み物を机に置いた。

「それで、リニア。本当に何のために来たの？」

リニア・イベリン。有名な魔法士である彼女に政治的な陰謀が絡んでいたとしたら、いつ抹殺されてもおかしくない。三年間もの逃亡生活とはいえ、彼女ほどの実力持つた魔法士ならば逃げ切れるはずだ。それが今、最後の砦ともいえるこの日本に戻ってきた。天城紫

乃も彼女がそれなりの窮地に追い込まれているのだと察しているようである。

「私、色んな国に行つたわ。欧洲、北米、南米、果ては中東までも逃げて。とにかく隠れる場所はたくさんあつたけど問題が起こりまして」

「……ハンスがくる」

「ハンス・ブリーゲルか」

「ハンス・ブリーゲル。有名な教会幹部のボディーガードであり、執事で名を知られている。警護のための魔法を取得しているため、典型的な実用主義者だ。実戦にも優れていると定評がある。そして何よりリニアは父親との仲が悪く、彼はリニアの父親代わりであり、お互いに信頼し合っている仲であるはずだ。」

「リニア……あなた、何やらかしたの」

天城紫乃は頬を引きつらせるしかなかつた。すると彼女は苦笑したまま答えた。

「実は父との仲がついに壊れちやつて。あの三年前の事件。先生の弟子である私が協会の要請で色々な所に派遣されたじゃない？まあ結局最後までやらずに放棄しちやつたんだけど。そのことで協会側からたくさん尋問させられて……でもあの人は私を助けてくれなかつた。それで仕方なく協会から抜け出して、現在に至るわけ」

天城紫乃は本日、何回目かの深いため息をついた。

「リニア……あなた、ここ三年間の間に何回か遊び来てたでしょ。そんなことになつてい

たなら何で言わなかつたんだ。私が介入したら、師匠としていくらか助けられたつていうのに」

「先生、私の性格わかつてゐるでしょ？」

「……そうね」

目の前で明るく笑つてゐる馬鹿弟子に、また私はため息を零してしまふ。彼女は現在の自分の状況が本当に解つてゐるのだろうか。しかし、こんな風に笑つていても三年間逃げ続けていたのは事実のようである。いくら師匠と言えども、遠く離れた弟子のことは解らない。予知能力などもない。私は弟子がこんな状況だつたとすることを今まで知らず、呑気には旅でもしているんじやないかと思つていたのか。そう思うと、私も少し申し訳なくなつてくる。三年前の事件以降、情報収集活動を絶つたせいでこんな結果になるとは思つてもみなかつた。

「つまりお前を処理するために、ハンスが追つてきているつてことね？」

「そういうこと」

ハンスのこととなると、依然として乾いた笑顔に戻るリニア。

よりもよつてハンス・ブリーゲル。大物過ぎる。私が直接介入すればすぐに取まるのだが……第一次著作事件の時、協会内部の問題には手出ししないという契約にサインをしてしまつた。もちろんそんな契約ひつくり返してもいいのだが、そうすると協会からの支援

金が絶たれてしまうのは考へるまでもない。

「うーん……」

師匠が難しい顔をしているというのに、この馬鹿弟子はニコニコと笑っていた。

「リニア、あなたはこれからどうするの？」

「一応、しばらくは今まで以上に身を潜めておくつもり。この地は協会の不可侵領域だからハンスも勝手はできないでしよう。」

「いくらここが不可侵領域だとしても、私が対応しづらいんだけど」

そもそもリニアは、金色の魔女である私の弟子。協会もそれを知った上で、何故ここまで執拗に彼女を追つているのか。やはり本当の父親の方が協会内部の紛争を起こそうとしているとしか考えられない。そしてハンス・ブリーゲルは主である彼の命令なら必ず遂行するだろう。

私がこの紛争に露骨的な介入をすることは非常に難しい。しかし、事の重大さだ。葵くんの手に負える問題ではない。そもそも彼は他の案件に忙しい。赤城周にしてもリスクがかすぎる。残りの子たちも……無理だろ。結局、私がやるしかないのか？

「お前は……何で来るたびに事件を持つてくるんだ」

「もちろん、私はトラブルメーカーだから。トラブル作つてなんぼのもんよ」

私の愚痴を受け流し、リニアは楽しそうに笑っている。

「それ自慢できないわよ」

「そう?」

「とにかく。せっかく来たんだからゆつくりしていきなさい。私がどうにかしてあげるから」

さて、どうなるか。このまま考えていても仕方がない。ひとまずは何か事が起こつてから考える方向にしよう。

「ああ……私はどうしてこんな優しいんだ」

「それ、ナンセンスね」

「え」

瞬間、玄関の方で音がした。

買い物から帰つてきた奏は玄関に見慣れない靴を見つけ、その足で執務室へと向かつた。両手に大きな袋を提げたまま、中の様子を窺う。そして扉を開けると、銀色の髪が目に入つた。

リニア・イベリンだ。

以前から面識のある奏は警戒することなく、ただきよとんと彼女を見つめていた。そんな奏の視線に気づくと、リニアは彼女の前に屈み、にこりと笑いかけた。

「久しぶりね、奏ちゃん」

「リニア」

「元気だった? 『飯はちゃんと食べてる?』

「うん。元気」

「そつか、それなら良かつた」

「うん」

奏はいつも通り口数は少ないが、嬉しそうな雰囲気が感じ取れる。色々と訊ねてくるリニアの態度に嫌がる様子も見せない。そもそものはず、三年前の拉致事件で奏を助けたのは彼女だ。

「そういうえば、奏ちゃん大きくなつたね? いくつになつたの?」

「十歳、今は五年生」

「へえ、もうそんなになつたの」

「リニアは何歳になつた?」

「奏ちゃんレディーの年はむやみに聞くものじやないわよ」

「……れでいい?」

「うん、レディー」

首を傾げる奏。つい天城も口を挟む。

「それ、ナンセンスじやない?」

「え?」

部屋に響き渡る笑い声。師匠と弟子の三年ぶりの再会、リニア・イベリンの帰国。ここから彼らの日常生活は、逃れることのできない大きな渦へと巻き込まれていくことになるのだった。

ハンス・ブリーゲルはあまり表に出ることが好きではない。そんな彼にとつて、秘密集団のボディーガード兼秘書とは適職といえよう。彼は主人の命令とあれば、文句なしに仕事を行う。そんな彼に下された命令の一につに主人の娘の世話をいうものがあった。十年以上に渡り、少女の世話をしたハンス・ブリーゲルには、本人も知らぬうちにリニア・イペリンに対して本当の娘のような愛着を感じていた。

そこに今回の「リニア・イペリンの抹殺」という命令。あまり気乗りしないのも当然だ。しかし、彼は公私の感情の区別ができるプロである。主の命は絶対。あらかじめパスポートやビザなどは教会から発給されていたため、日本へ来ることは簡単だつた。後は彼女を見つけ出し、処理するだけである。

元々リニアは彼から体術を学び、金色の魔女から直々に魔法も教わり、逃げることには長けていた。当時は教会の上層部もここまで彼女に気を使つてなかつたので、目をつぶつていた。

しかし以前から何度か彼女が金色の魔女と接触していた事実を把握しており、ついに協会側もハンスを派遣するに至つたわけである。そしてついにリニアの方も危機感を感じたのである。彼女は日本、現存最高の魔法士、天城紫乃の元へ助けを求めて逃げてしまつた。師である彼女が協会側に対し、何か仕掛けてくるに違ひないのである。

「やれやれ自らが育てた子を、自らの手で処理しなければならないのか……上層部も中々に性質が悪い」

ハンスはポケットから煙草とライターを取り出した。金属製のライターに映る彼の顔はあまり良いとは言えない。彼は煙草に火をつけると歩き出した。

空港を出ると協会側の人間が黒い車の前に立っていた。互いに軽く目礼を交わすと、彼はハンスにステッケースを渡した。

「それでは幸運を祈っております」

「ああ、最善を尽すつもりだ」

ハンスは車に乗り込むと空港を後にした。

「一だから、早く来てくれってどういうことなんだ」

『いいから早く来なさい。色々と話さなければいけないのよ』

図書館で勉強している最中、突然の電話だった。幼稚園にはたまに夕食を食べに行く程度で、しばらく俺は穏やかな日常を送っていた。だから今日、こんな風に先生から電話來ること自体久しぶりすぎて驚いている。そして、電話口の彼女の声は珍しくイライラしていた。

「嫌な予感しかしない」

彼女の声とは別に、後ろの方で騒がしい音もしていまし、何よりあそこまで機嫌の悪い先生もめつたにない。

「まさか。

あまり行く気がしないが仕方ない。返事をする前に電話を切られてしまつたので、仕方なく出かけることにした。ついでに夕食もご馳走になつてこよう。

外に出ると、どんよりとした雲行きに更に気力が削がれる。図書館から幼稚園まではバスに乗つていくしかない。まるで全てがあの魔女に味方をしているかのように、バス停に着くとすぐにバスが来た。乗客は少なく、俺は一人掛けの席に座りぼんやりと外を眺める。下校途中の学生や買い物帰りの主婦、犬の散歩をする老人。外の世界は非常におだやかな日常が送られていた。俺も普通の日常を過ごしたいのにな。

幼稚園に着くと、俺はいつものように執務室へとまつすぐに向かつた。玄関に見慣れない靴があつたが、俺は楽観的に努めて『奏の新しい靴』と捉えようとしていた。

しかしー、

「久しぶり」
「……」

やはり違った。

先生のそばに立っていた女。それは伝説のトラブルメーカー、リニア・イベリンだった。

ついに炎いの権化とも言える女が来てしまった。

「なにその反応。久しぶりの再会なんだから、少しは喜んでよ」

「喜ぶところか？」

「そう、喜ぶところよ」

「全然嬉しくないのに、どうやつて喜べと」

俺が入口で立ち尽くしていると、リニアが思い切り抱き着いてきた。無理やり退けようにも、俺も男である以上躊躇つてしまふ。結果、俺は成す術もなく彼女のいいように頭を撫でられるしかなかつた。別に嫌ではないが……複雑な心境だ。

「そうちやんも大きくなつたねー。雰囲気も男らしくなつちやつて」

「……そうちやん呼ぶな」

「ほんと、昔と大違い。立派になつちやたのね」

「……」

「でも、そうちやんは相変わらずかわいいねー」

お氣楽そうに笑うリニア。いい加減、ずっと抱きしめられているこの状況が恥ずかしくなつてきた。

「ええい、もうあつちいけ三」

リニアの腕を掴んで向こうに押し返すと、彼女は頬を膨らませて拗ねた表情した。

「もう。レディーに対して失礼だよ」

ん？今『レディー』とかいう単語が聞こえたような？気のせいか？気のせいだよな。

「それで、リニアは一体いつきたんだ？」

「今日。正確には今日の朝方」

「ずいぶん早い到着だな」

「まあ逃亡中だから」

「は？」

まるで大したことでもないよう答えるリニア。逃亡中……？

「詳しいことは先生が教えてくれるよ」

リニアから面倒ごとを丸投げされた先生は非常に疲れた顔をしている。こんな先生の姿はめったに見ない。まるで人が変わってしまったかのようだ。

そして先生は事の顛末を話し始めた。

「つまり……三年間逃げ続けて、ついに逃げ場所がないから先生のもとにやつてきたってことか」

「うむ」

あつけらかんと肯定するリニア。先生と同じで俺も彼女がそんな状況下だとは全く思わな

かつた。そして今もこうしている間に、この女には危機が迫つてきているということだ。本人は気にしている素振りを見せないが。

—今回の件は非日常すぎるな。

「とりあえず、リニア。がんばって」

すると彼女は再び俺に抱き着いてきた。

「そんな他人事みたいに言わないでよ」

「いや他人事だし」

「私にとつては、そうちやんは他人事じやないよ。私、そうちやん大好きだから」

「あ、はい。そうですか」

もう抵抗するのも面倒くさくなってきた。そもそも空腹で抵抗する力も沸かない。

「それより夕飯はいつ食べるの？」

「奏ちゃんが用意してるから、もうちょっと待つて」

「あー、早く奏ちゃんの料理食べてみたいな」

「こいつら……。」

「成人女性二人もいるのに、子供に料理させてんのか」

俺が呆れた声を漏らすと、二人は顔を見合わせて答える。

「だって私、料理できないもの」

「私も料理できない」

この師匠あつて、この弟子ありつてことか。

『仕事だ』

綺麗に整頓された部屋に響く声。それは机の上のパソコンから聞こえてきた。画面には奇妙な風貌をした金髪の青年が映つてゐる。「奇妙な」というのは、青年にはその若い顔立ちには似合わない立派なひげが生えていたからだ。彼は威厳のある雰囲気を醸し出したまま言葉を続ける。

『ハンス・ブリーゲルが動いた。君も動き始めなさい』

パソコンの前に座る少女はその名にびくりと反応した。魔法士の間では有名な男。彼女にとつて最強の相手と言えるであろう。

『奴が動いたということは、リニア・イベリンが日本に戻つたという証拠だ。再び君が起ころる可能性が高いだろう。直接調査をしてこい。いざとなれば彼女を抹殺しても構わない』
リニア・イベリンの抹殺……？
少女は疑問を抱いた。

——自体は彼女と関係がない。むしろ君の覚醒を促すには、鈴木聰太を拉致する方が賢明ではないのか。

『議会で決定したことだ。君の性格上、色々と疑問を持つているだろうが議会は君が思っているほど賢明じやない。君はただ言われたことをすればいい』

青年の態度からして、彼はこの少女の上司のようだ。

『我々の計画は *ing* の覚醒を誘導するものだつたが、この組織も疲弊してしまつてゐる。金色の魔女との一騎打ちには協会の勢力が邪魔だ。今回の件で協会側との形勢を逆転するつもりだ。健闘を祈つておるよ』

そして映像が終わつた。パソコンの前に座る少女はため息をついた。今回の件は彼女にとって重要度が大きい。長期的な *ing* 覚醒計画のため彼女はこの都市に來た。潜入に數カ月かかり、人目に付かず行動するためにまた数カ月かかり、ちょうど一年近く経つた今になつて、計画がまた白紙に戻つてしまつたようである。

少女が所属している組織「研究所」は数人の研究員が交代制で構成される議会が最高本部であり、この議会の決定により本部全体が動く。そして少女はこの研究所で造られた存在だ。いくら下された命令に納得できないとしても、本体に組み込まれた研究所への忠誠機能により必ず実行しなければいけない。

ふと、彼女は同志とも言える友人を思い浮かべた。

——真田ちゃんならこういう状況でも躊躇いなんてないのだろう。

幽霊事件以後、研究所内部で離脱者とされている彼女は現在密かに身を隠している。

—今回の件で手柄を取れば、私の進言で彼女の件は赦されるかも知れない。

少女は立ち上がり、戸棚を開いた。そこには派手な服がたくさん掛けたある。その中の一つを選んで着替えると外出の準備をした。

少女——、ノエルは研究所のため、そして友人のため、任務を遂行するのであつた。

「奏、手伝うよ」

俺が台所に入ると、奏は手を止めて振り返った。可哀そうに。世話を大人がまた一人増えるなんて。奏に向かい軽く黙とうをすると、彼女は小さくお辞儀を返してくれた。そして一緒に夕飯の準備をする。

「そういえば、奏さん。今日はずいぶんと楽しそうですね」

普段なら黙つて頷くだけだが、今日は返事を返してくれる。よほど機嫌がいいのだろう。

タンタンタン

心なしか道具を切る音さえ楽しげに聞こえる。

「何かあつたのですか？」

「うん。リニア、帰ってきた」

そうか、そういえばこの二人はとても仲が良かつた記憶がある。そもそも三年前にリニアが奏を救つたのだし、当然といえば当然だけど。

「じやあ、今日はお祝いしなくちやな」

「うん。今日はお肉いっぱい使う」

嬉しそうに調理する奏を見ていると、リニアの帰国も悪くないような気がしてきた。厄介事さえ持ち込まなければ、俺だつてリニアはそこまで嫌いじやない。

何故なら、彼女はとんびに似ていた。

根本的な部分は違えど、あの持ち前の明るさはどこか似ていると思った。もちろん今となつては、ただの学生時代の思い過ごしのようなものではあるが。あの余裕のなかつた時は本当にそう思っていたのだ。過去の恥ずかしい想い出のようなものだ。

「ご飯」

「え」

「ご飯まだ？」

頭に思い浮かんでいた顔がすぐ横にあつた。リニアだ。

「まだまだ。早く食べたいなら手伝つたらどうだ？」

「だから料理できないって」

「じやあ、大人しく待つてろ」
肩に乗つかる顔をどけると、リニアは反抗するかのように後ろから抱きついてきた。
「いつ完成するのー？」

「あと少し」

「そうちやん、料理でできるなんてすごいね」

「こうみえても自炊歴二年目なんで。たいていの料理はできますけど」

皮肉をこめて言つたものの、彼女は香氣に笑つていた。

「私なんてお腹に入れればみんな同じだと思つちやうから、料理に必要性を感じられないんだよね」

その後もりニアは暇なのかずつと俺に抱きついたまま、ちよつかいを出し続けてきた。

「もう……あつちで大人しく待つてろ」

「えー、ひどいじやない。私、そうちやんのこと大好きなのに」

「分かつたから、向こうに行つといてくれ」気が散る

俺だつて健全な男子学生なのだ。いくらリニアとはいえ、女性にずっとくつつかれていたら集中できるものもできない。

ふと、奏が俺たち二人をじつと見ていることに気付いた。

「奏？」
「……」

何も言わない。

「どうかしたか？」
「……別に」

ふいつと顔をそむけると、奏は再び調理に戻った。いくら鈍感な俺でも彼女が少し不機嫌になつたのはわかる。調理をさぼつて煩くしてしまつたせいだろうか。全く、このトラブルメークーム。文句を言おうと後ろを振り向くが、リニアはとつくに台所から姿を消していた。

夕飯はバーべキュー・パーティをする事になつた。俺はホットプレートに火をつけ、食材を乗せていく。牛肉、豚肉、鶏肉、たくさんのお肉と野菜。正直四人分にしてはかなりの量に思える。まあ、この獲物を狙うかのように構える大人二人がいるには充分だろう。二人とも焼き加減がよくわからないため、じつと俺のGOサインを待つてゐる。リニアに至つてはビール片手に構えているので、零しそうで心配だ。

「お、この肉はもういいと思……」

俺が言い終わる前に二人は動いていた。初戦は先生の勝ち。さすが先生、大人気ない。一枚目の肉も焼けそうだつた。どうやらリニアも目をつけており、俺の言葉を今か今かと待つてゐるようだ。

「これもそろそろ……」

俺が喋り出すや否や、リニアは動いた。

——しかし。

「はい、奏」

俺は焼きたての肉を奏のお皿へとすかさず置いた。それをリニアに盗られる前に素早く口に含む奏。中々の連係プレーだ。

「そんな」

がくくりと肩を落とすリニアだが、当たり前だ。

「子供が優先に決まってるだろ」

そんな様子を見て、笑っている先生。いや、あんたが一番年とつてるんだから自重すべきなんだがな。先生にも一言言いたがつたがお金を出してもらつていて以上、見過ごしておこう。というか、年の話をしたら殺されそうだ。

半分くらい食べ終わつた頃、だらうか。焼き加減を見ている最中、先生が不意に口を開いた。
「私、こう見えて本当に幼い頃から希代の聖女様扱いされてきたから、料理したことないのよ。周りの人間が知らずとおいしいものを提供してくれていたし。その後も幽遊ちゃんや奏ちゃんが食事を用意してくれたから、実は一度も台所に立つたことないのよね」
「ほう……」

話しあとに聞き、俺は適当な返事をしておく。人間、生きてきた環境に大きな影響を受けるのは明らかなんだな。堂々と料理できない宣言をする女性も中々いない。やはりこの二人は普通ではないと実感した。
「ところで、こんなのがんばり飯食つてるけどリニアの件は大丈夫なのか？」

「多分、露骨的な攻撃はしてこないと思うから大丈夫じゃない?」

俺は眞面目な態度で先生に尋ねるが、彼女は肉を食べながら返事を返した。せめて食べ終わつてから話してくれ。

「何か考えがあるのか?」

「いや、何も思いつかない」

思わず拳を構えてしまつた。そんな俺をなだめるかのよう、奏が俺の肩をたたいた。

「諦めて」

ああ、そうだ。この女はそういうやつだつた。大体、俺には関係ないことだ。ただ何か悪いことが起ころのは避けたかつただけである。

「大丈夫だつて!」

そんな俺の心情を知つてか知らずか、随分酔いが回つたりニアが肩に手を回してきた。

「ハンスは私の父親みたいな存在なんだから、偶々、仕事の関係上ちよつとぶつかるだけよ。どうにかなる、絶対。こんなところで悩んでいても仕方ないんだから、今はただ目の前のお肉をおいしいと思つとけばいいの」

そう言つて俺の口に肉を突つ込むリニア。

うまいな。

「それより私が三年間どんな生活していたのか話してあげる」

そして彼女は一人で勝手に話し始めた。酔つ払いを無視して俺は思う存分を肉を食べる。奏に秘伝のタレを作つてあげると、彼女はそのタレが気に入つたらしく満足げな表情を浮かべていた。

「先生もタレいるか？」

「いや」

先生は静かに首を振ると、煙草を取り出した。

「何だよ、煙草なんて吸うのか。初めて見た」

先生が火をつけると、煙は外に惹かれていくかのように窓の隙間を逃げていく。

「以前、第一次著作事件というのがあった」

「何だそれは」

先生は近くの器に灰をこぼして続ける。

「封印を解かれて直後、一銭もなかつた私は魔法士協会に乗りこんだんだ。『私が魔法を構築したんだから使用料を払いなさい』って」

「うわ。いくらなんでも横暴すぎないか」「横暴じやないわよ。私が構築したのは事実だし、魔法書も私が制作したんだから最低限の著作権料はもらうべきでしょ」

「確かに納得できなくもない」

一応、先生も作者つてことになるのか。

「それで法的処置も辞さないって言つたら向こうも動搖してね。魔法そのものが世界に明るみになつてしまふから。そこで色々と話し合つた結果、魔法士協会との間にいくつか細かい協定ができたの『魔法士協会内部のことには一切関わらない。代わりに魔法士協会側は著作権料として一定の支払いをする』って。私はそのお金で幼稚園の維持をしているよ

うなものなのよ」

「……もし協定を破つたら？」

「もちろん」

続きは言うまでもないようだ。

「つまり、あんたは迷つてるってことか」

「さあ」

はぐらかす先生だつたが、その視線は奏とリニア、両方を見ていた。一人の子供を養うには経済的な支援が必要である。協会からのお金を絶つわけにはいかない。しかし、弟子を見捨てる事もできないのだろう。さつきは二人が近くにいたから適当に答えていたのか。先生も色々と考えてはいたんだな。

「ねえー二 二人で何話してるの?」

再び、リニアが抱きついてきた。先ほどより赤い顔をしている。かなり酒が入っているようだ。

「ねえ、そうちやん。教えて」

リニアは頬をすりすりと寄せてきた。
「やめる、馬鹿」

「私は馬鹿じやないよ。リニア・リニア・イベリンよ!」

「わかつた、わかつた。いいから、向こう行つてくれ」

「もう……この男、空氣読めないわね。ねえ、リーチやんつて呼んで、リーチやん」

「おい、奏もいるんだ。いい加減にしろ、酔っ払い」
「なに、そうちやん。こういうの嫌いなの？」

「別に嫌いでは……いいから、向こう行け」

「もう! このダイナマイトボディのお姉さんをよく見なさい! 本当に向こう行っちゃっていいの! ?」

俺はリニアを無視して再び肉を焼き始めた。

「ん? 」

気づくと、また奏がじつとこちらを見ていた。先ほどまで嬉しそうにお肉を頬張っていたのに、今はなんだか不機嫌に見える。

「奏……どうかしたか? 」

「……バカ」

「は? 何で? 馬鹿はこいつだろ」

「うるさい」

……やつぱり今日の奏はよくわからぬ。

「それで、どうするつもりなんだ? 」

寝落ちしたりニアを隅にやると、俺は先生の元へと戻った。先ほどは冗談を言っていたが、今ならちやんと答えてくれるだろう。先生は偽物っぽい笑顔を向けてきた。

「助けてくれる? 」

「どうやつて」

「私は今回、表立つて動けないから君がリニアのボディーガードをしてくれたらいいな」

「俺なんかより、リニアの方がよっぽど強いぞ」

「それでも一人より二人でしょ？」

その笑顔はなんか腹立つな。

「……まあ、本来なら断るところだけど、今回は事態が深刻みたいだから仕方ないか」と
きつと奏も今回の件に関わらざるを得ないのだろう。俺はリニアより奏の方が心配だ。こ
んな大人二人には任せられない。

「わかった、その依頼受けるよ」

慌ただしい宴が終わつた。ひとしきり食べたのでお腹も心も満たされている。辺りを見回すと、先生もリニアも床に寝転がり、奏だけが黙々と片づけをしていた。俺も手伝うと声をかけたが、休んでいてと言われたので大人しくそうすることにした。
しかし、ただじつとしているのも勿体ない。かといって、奏に片づけを任せて俺だけ一人帰宅するというのも申し訳ない。

「コンビニでもいくか」

食後の運動も含め、先生たちに酔い覚ましの薬を買ってくることにした。

「どこいくの？」

出かける準備をしていると後ろから誰かが呼んだ。リニアだ。

「コンビニ。食後の散歩。お前は寝てろ」

「やだ。私も行く。酔い覚ましに外いく」

「まあ、別にいいけど」

幼稚園からコンビニまでの距離は結構ある。俺はぼんやりと光る街灯を眺めながら、夜風に身を任せる。この街にもずいぶんと慣れた。まるで地元のような気分さえする。そつと空を見上げた。今日は雲が多くて月が見えない。辺りがいつもより暗いのは月の光がないせいか。俺は前に向き直る。まばらに置かれた街灯のせいでの先は真っ暗だ。ふと、俺は自身の将来を考えた。

「俺はこの先どうなるのだろうか。一生懸命に勉強をして、就職して、真っ当な人生を生きていくのだろうか。だとしたら、きっとそこには不満なんてない、理想的な将来だ。目標も理想もない方が賢く生きていくべきだ。中途半端な理想主義より、無難な現実主義の方が俺には向いている。」

「……何が起こるかわからないのに、今から考えても仕方ないか」

先ほどの大人二人の意見を参考にする。あの人達もたまには役に立つのかもしれない。ちらりと隣を見た。先ほどから、よたよたと危なげに歩くりニア。まるでゾンビのようだ。

「そんな酔ってるんだから大人しく寝てればよかつたのに。何で來たんだよ」「そうちやんと、一緒に……行きたかった」

途切れ途切れに喋り、ついにリニアは俺に寄り掛かってきた。不覚にも、一瞬じきりとしちゃう。ふわりと香る、女の匂いとやらが妙に鼻をくすぐつた。

「べ……別にそんなこと言つても、俺は惚れないぞ」

「あらら、それは……残念」

軽口を叩くりニアだつたが、彼女はもう歩けそうにもなかつた。俺は近くの公園に寄ると、ベンチに彼女を座らせた。やれやれ、しばらくここで休んでからいくか。

「あの」

どこかで子供の声がした。振り返つてみると誰もいない気のせいか。

「お兄さんね」

すぐ目の前で声がした。女の子。奏より少し成熟した、六年生か中学一年生くらいの女の子が立つていた。年齢にそぐわない、含みのある笑顔で笑つている。嫌な予感がとてもする。さつさと交番に預けてしまおう。

「どうしたの、君？ 家出？」

「……」

少女はどこか不満そうな顔をしたまま黙つている。よく見ると、彼女の服装はテレビや雑誌で見たような服。とても高級そうだ。お金持ちの御令嬢にも見える。この辺は団地住宅地だから隣町から来たのだろうか。沈黙が俺を妙に緊張させる。「えつと。どうして俺に話しかけたのかな？」

「……」

「俺、ちょっと今は忙しくて……」

「お兄さんは、運命についてどう思う

「え？」

風があつと通り抜けかのように思えた。よくわからないが冷や汗までも出てきた。

「人生とは何？」

「あの、ごめん。ちょっと俺には何を言つてるのか、さっぱりで……」

パンツ

隣で音がした。どうやらリニアの頭がベンチに当たった音のようだ。

再び前を向くと、

「あれ？」

少女の姿はなかつた。まるで何かに化かされたような気分だ。

「俺も酔つ払つたかな」

「いたた……あれ、ここどこ？」

先ほどの衝撃で目を覚ましたリニアをつれ、コンビニへの道を再開する。

「ほら、あとちょっとなんだから……ちゃんと歩いてくれ」

「わかってるつて」

そう言いながらも、彼女の足元はふらついていた。

「……リニア、無理そうならここで待つてくれ。すぐ戻つてくるから」「嫌だ。それは、嫌。一人は……寂しいから、嫌」いよいよ、面倒臭くなってきた。

「……じゃあ、おぶるから。乗つてくれ」

「……うん」

多少、歩きにくさはあるが仕方がない。俺はリニアをおぶつたままコンビニへと向かつた。

「こんな姿、葵に見られたら一生ネタにされるな」

「え？」

「なんでもな……」

次の瞬間、先ほどとは比べ物にならないほどの悪寒が全身を通り抜けた。

——やばい。

直感が脳に危険信号を送る。目の前からもの凄い視線を感じた。目をこらして見ると、まるで夜の闇に溶け込むかのように道の真ん中に黒ずくめの男が立つていた。

「五年前、ある少女がいました。ある日、少女は自分の道を生きると言つて家を飛び出した」

抑揚のない声。まるで機械が話しているかのようだ。男は続ける。

「そして五年が経った」

男は一呼吸置くと、やつと感情が宿つた声を漏らした。

「リニア・イベリン。素敵なものだな」
それは寂寥感で満たされたような声。

「私が自分でつけたんだもの、綺麗な名前でしょ」

「君の性格にぴったりだ。モーターの名前をとつてくるとは」

「違う、これは植物の名前よ」

「ほう」

真剣な表情で答えるリニアだったが、彼女は未だ俺の背中におぶさつたままである。おかげで少し緊張が解けた。

「もう大丈夫、おろして」

「ああ」

リニアは俺の背中から降りると、簡単なストレッチを始めた。どうやら酔いは完全に覚めたらしい。

「本当にハンスが来るとは思ってなかつたわ」

——ハンス　この男がハンスなのか

ハンスと呼ばれた男は、身動き一つすることなく丁寧に答えた。

「ええ、私もこんなことになるとは思いませんでした。少々、驚いています。あなたを育てたのは私自身ですから」

「そうね、あの人は自分の子供を見捨てて、全部あなたに押しつけたんだから」

「ですが、あなたの父様は私の御主人ですから。主の命令は絶対です」「へえ、あなたってそんなに型物な人だつたつけ？」

「私も月給を戴く身でして」

声には出さずとも、互いに口角を上げて笑い合う。

「じやあ、私を処理しに来たつてことね」

「はい、お嬢さま」

「お嬢さまなんて久しぶりね、そうちやん聞いた？私も本当にお嬢さまなのよ？」
こいつ。緊張感がないのか、あえてこのような態度をしているのか。

ハンス・ブリーゲルはじつと俺たちを見据えていた。俺は最大限に警戒しながらポケットの中を探る。畜生、紙が足りない。護身用に財布の中に入れておいた数枚しかない。これじゃ、ボディーガードにすらなれない。ただの足手まといだ。

俺の焦りが伝わったのか、リニアはいつもの笑顔で笑いかけてきた。

「大丈夫よ、私が守つてあげるから」

「なつ……おい、それは男が言うべきセリフだろ」

彼女の一言ですつと心が落ち着いた。そうだ、いくら使えないとはいっても、何か方法はある。こつちは二対一だ、勝機はある。

唐突にハンスが口を開いた。

「魔法使いに勝つことができる最善の方法」

「それは魔法を使わないこと」

反射的にリニアが答えた。

男は続ける。

「その最善の方法を超える方法」

「相手が魔法を使えないように阻止すること」

再びリニアが間髪いれずに答えると、男は小さく笑つた。

「基礎は覚えているようですね」

「ああ、昔から何回もハンスに言い聞かせられたからね」

雑談を交わし合う二人だが、空気は一触即発だ。

「上層部の、あの人下した命令は何?」

「魔法士、リニア・イベリンの除去。ただこれだけです」

「あのクソ親父……」

リニアは拳をきつく握りしめた。二人が集中している中、俺は財布の中から慎重に紙を取り出す。

「ほう、君が鈴木聰太か」

「つる」

「俺を知つていてる?」

「あれが君の本体とは。思つていたより普通だな」

彼は俺の反応なんか無視して淡淡と呟く。

「……何だ？　こいつは何を言っているんだ？」

「お……おい、あんた、それ、どういう意味だ？」

「先手必勝！」

リニアは胸元に仕込んでいた紙を勢いよくハンスに向かつて投げる。紙に書かれた複数の文字が輝き始め、一気にハンスを襲つた。稲妻や炎、水流が同時に発生し、彼の姿が視認できないほど煙が立ち込めていた。

「やれやれ……」

煙が徐々に晴れていく。ハンスは無傷で、まるで砂を落とすかのように手をはたいていた。
「魔法使いに勝つための最善な方法、それは魔法を使わないこと。私の教えとは異なりますね」

男はすばやい動きで服の中に潜ませていた拳銃を取り出した。俺も必死でそのスピードについていく。彼が引き金を引いたのと、俺が『曲がれ』と書いた紙を投げたのは同時だつた。幸いにも、俺の紙は弾丸に当たつた。奇跡かもしれない。弾はリニアを避けて、壁に穴を開けた。

「バカニ 気をつける！」

俺の忠告にも関わらず、リニアは舌を出して笑つている。

「まあまあ、ピストルに消音機までつけて……さすがプロね」

リニアの称賛にハンスは眉ひとつ動かさない。ただじつと彼女を見据えていた。

「勝つための喧嘩では僥倖を狙ってはいけない。これもまた私が教えた指針とは異なりますね」

「それを知つていて、何であなたは暗殺しなかつたの？」

「……」

一瞬の静寂の後、リニア・イベリンは物凄いスピードで前に飛び出た。狙うは男の腹部。1、2、3と右足で連撃を繰り広げ、そのまま左足で男の頸を思い切り蹴り上げた。ハンスは唇の端から零れる血を拭い、数歩後ろに退く。しかしリニアの攻撃は止まない。彼女はハンスとの距離を一気に詰め、今度は腕を狙う。リニアの重たい蹴りを両腕で受け止め、男の動きは鈍くなつた。そこを休むことなくリニアは攻め込む。

目の前で繰り広げられる超人同士の戦いを、鈴木はただ呆然と見つめていた。事実、彼にはリニアの攻撃を全て把握できていなかつた。彼女の攻撃はあまりにも素早すぎて、ある程度の武術経験がないと目が追いついていけない程だ。

おそらく今まで一番重たいリニアの蹴りが、ハンスに入つた。思い切り腹部に受けた彼は衝撃で後ろに追いやられるが、彼は倒れなかつた。そして何事もなかつたかのように、襟元を直して服をはたく。まるで痛みを感じないロボ

ツトのように平然とした表情をしていた。対する、リニアも一切動搖を見せずに呼吸を整えている。いや、彼女の額にはうつすらと冷や汗が流れていた。
表向きは鈴木に笑いかけていたが、リニアは内心非常に焦っていた。彼女の目論見では、先ほどの一撃で相手を倒すとは行かないまでも、膝をつかせるつもりでいたのだ。

—これは中々、手ごわいわね。

先ほどからリニアの攻撃はしつかりハンスの懷に入っている。格闘に詳しくない俺でも、彼女の一撃、一撃の重さは常人とは比べ物にならないほどだろう。

しかし、ハンス・ブリーゲルは倒れない。ましてや痛みを見せる表情もしない。
おかしい……あの銀髪の魔法士、リニア・イベリンの攻撃だ。いくらなんでも無傷のはずがない。何かを仕込んでいるとしか考えられない。

瞬間、ハンスは上着を脱いだ。俺もリニアも息を飲む。

彼が脱いだ上着には大量の拳銃と短剣が仕込まれていた。そして、ハンス自身の身体には記号のような文字がびっしりと書き込まれていた。

それを見てリニアの顔はより一層真剣なものへと変わる。やはりそうだ。彼の身体に書かれているのは魔法だ。おそらく防御魔法のようなものだろう。あれでリニアの攻撃を防い

でいたに違いない。なるほど、彼が言っていたのは攻撃に魔法を使うなど意味だったのか。勝負は攻撃と防御の使い分け。魔法を一切使うなという意味じやなかつたのか。

くそつ、盲点だつた。

「それでは、失礼いたします」

ハンスはリニアと同等の早さで距離を詰めてきた。しかし彼女のようく猪突猛進ではなく、頭を使つていて。彼は俺に向かつて攻め込んできた。急いで躱そくとするも、達人に追いつけるわけがない。

鋭い痛みが腹に響いた。全身に電気ショックを食らつたかのような痺れが走る。ハンスは俺に一撃を加えた後、そのまま方向を変えてリニアの方へと向かつた。

彼女は俺に気を取られていたのか、受け身が一瞬遅れてしまつた。しかし、その遅れが命取りだ。ハンスの蹴りを上手く受け止められなかつたりニアは、壁に向かつて後ろへ大きく弾き飛ばされてしまつた。

「……くつ」

リニアはなんとか態勢を整え直していたが、左腕を押さえている。

「けほつ」

瞬間、思わず俺の口から血が飛び出た。これが噂の鉄の味つてやつか。頭が非常に痛む。生きているということは相手が多少手加減をしたということだろう。いくら初期魔法とはいえ、俺の攻撃が邪魔になるのは明らかだつた。一騎討ちに持ち込んで得意の格闘で勝負

する方が得策なのは当然だ。

態勢を立て直したりニアだつたが、手傷を負つて動きが鈍つっていた。しかし、ハンスはそんな彼女の様子に構うことなく、全力で攻撃をしかけていく。数手まではなんとか捌き切つていたりニアだつたが、左腕の痛みに反応が遅れてしまつたのか、重たい一撃が彼女の脇腹に入った。勢いよく壁にぶつかり、リニアは悲鳴を上げる。俺の視界も霞んできた。

「冗談じやねえぞ……」

このまま気絶なんかしてたまるか。俺はまだ生きてる。
なら、まだやれることがあるはずだ。
考えろ……考えろ……=

「一つ目のミス、相手の力量を正しく判断しなかつたこと」

——ハンスは倒れこんだりニアの元にゆっくりと近づいていく。

「二つ目のミス、理論をそのまま鵜呑みにしたこと」

——歩、そしてまた一步近づいていく。

「三つ目のミス……いや、これは言わなくてもわかりますね。せめてもの、苦痛なくお送り致します」

「ふざけんな!」

俺はハンスに向かつて、全力で紙を投げた。

これで相手の動きを封じ込めさえすれば……

「私が君を無視したと思つていたのですか? とんでもない、君が一番の最大変数だから初めに消したのですよ」

男は腰に下げていた小さな短剣を二つ、俺に向けて投げた。

片方は俺の手に、もう片方は紙に吸い込まれた。

「勝手に……殺すんじゃ……ねえ」

痛みに慣れていないせいなのか、俺は震んでいく視界に抗えなかつた。

「カミュはいつもぶらついていた。自殺と反抗の中で。光と闇の中を歩きながら、魂と肉体の間を。価値と存在の間を彷徨した男。『存在は本質より先にある』。私はこの言葉がとても素敵に感じた。本質は外にある概念や価値に基づいて規定されたことにはすぎない。存在そのものが持つているものではない。我々は存在するから、ここにいる。本質なんてものは後付けにしかすぎない。私は本当に彼の哲学が好きだ」

「遺言はそれで全部か?」

「ああ」

「最後の言葉がアルベル・カミュか。笑わせるな」

「知つてゐるか？『我々は人生に何か意味があると信じてゐる。そのためには理性をもつたと言われてゐる』私は、この理論大嫌いだ」

「人間性を望んでゐるのか？」

「まさか。そんなものはいらぬ」

「俺は……絶望しか待つていないと知りながら、何度も何度も岩を運ぶ存在が人間の眞の姿だと思つてゐる」

「ほう、その部分知つてゐるのか」

「ああ、だいぶ前に友人が聞かせてくれた。それじやあ……ここまでだ。御苦労だつたな」
「虚無に囚われ自己を忘れる。それが人間の本性とは……これだから私は哲学なんてもの
は嫌いなんだ」

「う……」

目を開けると、そこは見慣れた天井だった。

「今のは何だ？ 夢か？」

「そうだ……リニアつ三」

周囲を見回す。どうやらここは幼稚園のようだ。

お腹の苦痛と共に、今までの記憶を思い出す。あちこちに巻かれた包帯のせいで自己嫌悪に陥りそうだ。俺は無意識に拳を握ると、短剣が刺さった部分に痛みが走った。

「おはよう、鈴木君」

先生は雑誌を読みながら、軽く声をかけてきた。普段通りだ。普段通り過ぎる。

「先生……あの後どうなったんだ。リニアは？」

「外にいるわよ」

良かつた。まだ生きている。外にいるということは、傷の方はそこまで深くないのか。

「……先生、心配じやないのか？」

「声をかける役目は私じやない」

そう言うと先生は、外を見ながら炭酸飲料を飲む。こちらからは彼女がどんな表情をしているのかもわからない。

コトン

扉が開く音がした。奏が痛み止めや飲み物など、たくさんお盆に乗せて運んできた。

「ああ、ありがとな」

奏はとても心配そうな表情を浮かべていた。胸がずきりと痛む。奏にもこんな顔をさせてしまうなんて。申し訳ないな。

「本来なら病院で数週間の入院ものだつたんだけど、今回は私の知り合いに任せた。傷の治りも早いと思うよ」

「先生、医者の知り合いもいるのか」

「まあね」

彼女は大きく伸びをすると、奏が俺に持つてきた果物を食べ始めた。いつもの俺なら何か言つてゐるだろうが、今はそんな気分ではない。

重苦しい雰囲気がこの部屋には満ちていて、とても居心地が悪かつた。

「強かつたでしょ？」

そんな中、先生は軽々と質問をしてきた。

「ああ……勝てなかつた」

「当然だ、君が数十人で挑んでも一瞬で負けるだろう」

「じゃあ、数百人でいつたら勝てるのか？」

「まあね」

思わず冗談をいつてしまつた。しかし先ほどよりは気が楽だ。

「今後、どうすればいい」

「さあ。私も彼がこんなに早く来るとは思わなかつた」

先生は真剣な表情で外の暗闇を見つめる。

「……それも冗談か？」

「どうして？」

幼稚園周辺はもちろん、この都市全体に結界を張つてゐるのは知つてゐる。なら、殺氣が

感じられたらすぐ反応するはずだ」

「そう、君が知っている通り結界は作動している。敵が殺氣を出した時に反応する結界が。でも、反応しなかった」

「それはつまり……」

「どうだろ？ 本人に聞いた方が早いんじやない？」

先生は再び雑誌を読み始めた。もう彼女は何も言わないつもりなのだろう。まだ少しくらいするが歩けないことはない。俺は全身に訴えてくる痛みを無視して立ちあがり、玄関に向かう。奏が手を貸そうとしてくれたが遠慮した。いつまでも子供の前で弱つていられない。俺は彼女の頭をそっと撫でて、外に出た。

玄関を出ると、リニアが壁に背中を預けて立っていた。整った顔立ちの横顔は、俺に気付かずただ前を見ている。

「ひどい顔だな」

「え……あはは、そんな情けない顔してる？」

無理して笑っているのが丸わかりだ。彼女はかなりやつれた顔をしていた。

「とりあえず。お互いまきてたからよかつたんじやないか？」

「そう？ ポジティブすぎじやない？」

「いいんだよ、無事に帰つてくれたんだから」

すると、リニアは大きな声で笑つた。そして自身の頬を両手で叩く。気合いは充分入つた

ようだ。いつもの表情に戻ってきた。

「やっぱり、私そうちやんが大好き」うん、リニアの辞書に『絶望』なんて言葉はない、ただ前に向かって進むだけだ三

「突つ走りすぎるなよ」

「分かつてゐるつて」

このマイペースさ……リニアらしい。ひとまず彼女が元気を取り戻したようで良かった。

「リニア、あの後どうなったんだ」

一瞬、彼女は視線を落としたが、すぐに上を向いて拳を空に突き上げた。

「負けた」

一言。たつた一言で質問に答えた。詳しいことは教えてくれなかつた。

「……そうか。まあ、別に詳しいことはいいや。他人の家族関係とか面倒臭いこと、俺には関係ないしな」

「うん」

遠慮がちに笑うリニア。彼女の視線は先ほどからずっと、俺を見ようとしない。

「ただ……」

俺は一呼吸置いて言葉を続ける。

「ただ、俺はお前がいいやつだと思つてるから。横で黙つて手助けするよ、あんまり力にはなつてやれないとは思うけど」

訳もなく恥ずかしくなつて、つい鼻を触つてしまふ。何を緊張しているのだろうか。ちらりと横を見ると、リニアが驚いた顔で俺を見つめていた。何となく、目線を合わせづらくて、俺がそっぽを向くと彼女は困つたように笑つた。確かに嬉しさは感じられるのに、同時に参つたような笑顔だ。

「やつぱり、そうちやん。格好よくなつたね」

「……そうちやん、言うな。それより今後はどうすんだ?」

「うん、ハンスは今日、昨日と同じ時間帯にまた訪れると言つて去つていったわ」

「今日か……早すぎるな」

「処理するには早い方がいいってことね。そういえば、手。大丈夫?」

「ああ、平気だよ」

リニアに見せるように手を差し出すと、彼女は優しく俺の手をなでた。
「よかつた。あの傷、だいぶ深そうに思えたから」

「もうだいぶ治つたよ」

俺は数回ほど手を握る真似をした。本音を言うと、まだまだ痛みが走つてているが男の意地だ。

「さて。今夜来るつて言うなら、とつとと準備をしなきやな」

「準備?」

「俺はお前と違つて武闘派じやないからな。色々と作戦を立てないといけないんだ」「あら、私は武闘派じやないわ。レディーに武闘派なんて失礼ね」「何がレディーだ、この怪力女」

「なんだよ!」

俺は何も問わなかつた。ハンス・ブリーゲルがどのような思惑をしているのかさえ。

俺はただ彼女を助けることができればいい。ただ彼女が笑顔を向けてくれればいい。いつものように冗談を言い合えればいいのだ。余計なことを聞いて慰めるよりも、冗談を言い合つて気を紛らわせるほうがいい。それは経験者である俺が何よりも知つていることだ。

「腕が落ちましたね」

「そう?」

呼吸を整えるリニア・イベリンに対し、ハンス・ブリーゲルは涼しい顔をしていた。リニアは奥で倒れている鈴木に駆け寄りたいが、ハンスがそれを許さない。彼女は悔しさに歯噛みするが、それでも笑みを絶やさず敵を挑発する。

「ねえ、ハンス。私、何か間違つていてる? 成長した娘が家を出るのは普通でしょう。あの人は一体何を考えているのかしら」

リニアの言葉を淡々と受け流し、ハンスは独り言のように話し始めた。

「五年……少なくとも五年前のお嬢さんは素敵でした。主人には内緒で、私から魔法使いを撃退する方法を教わったお嬢さん。あの頃はまだ魔法も習つていなかつたですね。必死に体術を学ぶお嬢さんを見ていて、私は生き残る術として多くの技を教えました。私はお

嬢さんにいつまでも平和で元気に過ごしてほしいと……本当の娘のように思つております

た」「私もハンスを父親のように思つていた」

「ありがとうございます。しかし、あなたは金色の魔女の元に行きました。魔法を学ぶために。少し裏切られたような気持ちになりました。そして同時にお嬢さんが主人の、『魔法士の子』だと悟りました。家を飛び出し、命と引き換えに魔法を学ぶ姿は、まるで魔法士の本能そのものでした」

ハンス・ブリーゲルは黙つてリニアを見据える。彼女は負い目を感じているのか、彼を見つめ返すことができなかつた。

「三年ぐらい前、数年ぶりにお嬢さんを見かけた私は自分の目を疑いました。銀色に染まつた髪に、非常に活気に満ちた表情。私が知つておるお嬢さんではありませんでした。しかし、これが本来のお嬢さんだつたのだと氣付いたのです。ですから私は諦めました。私より金色の魔女の方がお嬢さんを正しく育ててくれると。私はただお嬢さんが協会のターゲットにならないよう動こうと。ところが三年前の『事件』が起きた。今、協会はお嬢さんを必死に追つています」

ハンスは戦闘姿勢を解いて、黙つてリニアを見つめていた。

すると、突然彼女は大きな声で笑いだした。

「何でそんなに心配するんだよ、私はもう子供じやない、誰よりも力強く前だけを見て走

る。誰よりも明るく、絶望なんてしない。私の人生は私のものだ。リニア・イベリンは銀髪の魔法士よ」

彼女は挑むようなまなざしで真っすぐとハンスを見返した。そんな彼女の様子を見て、ハンスも小さく笑う。

「鈴木聰太は協会内で主要人物として上がっています。いつ危険が迫つて来てもおかしくない。本当に彼を守りたいのならば、命を掛けてください。私は銀髪の魔法士を処理しなければなりません」

「……本当に戦うしかないのね」

「はい、そのような覚悟も無しに自分の人生を決めたのですか？ 前だけを見て進んでください、お嬢さん。いいえ、リニア・イベリン」

そしてハンスは彼女に背を向けた。

「明日、同じ時間に私はまたここに来ます。生き残るためには、私を倒すしかありません」

ハンスはちらりと鈴木を一瞥すると付け加えるように言葉を添えた。

「手加減したので彼の傷は深くありません。まあ、手の方はやりすぎましたけど……大事には至らないでしよう」

「ハンス三」

リニアの声に思わず彼は立ち止まつた。そして振り返る。

「生き残つてくださいね、お嬢さん」

そう言い残すと、ハンス・ブリーゲルは夜の闇に消えた。

「あの……馬鹿っ三

複雑とした感情を胸に抱え、リニアは鈴木を背負い幼稚園へ向かう。

一方、団地から少し離れた場所の路地裏。

ハンスは壁に寄りかかりながら、煙草に火をつける。

「やれやれ、ネズミが一匹隠れていたな。

——いくら戦闘に集中していたとはいって、最後になつてようやく気付くとは。

「只者ではないな。

彼は煙草を口に加え、先ほどの方角を見返した。

——決戦は明日だ。

研究所の尖兵であるノエルは、焦りの表情を隠せずにいた。まさかあのタイミングでハンス・ブリーゲルが乱入してくるとは思わなかつたのだ。急いで身を引いたノエルだが、

彼の気配に気づいていなかつたら今頃死んでいるに違ひない。研究所の者だと分かつた瞬間、慈悲はないだろう。何しろハンスは研究所をひどく嫌悪していると彼らの世界では有名なのだ。

「このままじや引き下がれない……」

観察対象である鈴木聰太に顔を見せたところまでは良かつたが、ハンス・ブリーゲルに感づかれてしまったことにより、彼女に課せられた任務の難易度は上がつてしまつた。ノエルは一人、部屋の中で爪を噛みしめる。

「私は一体どうすればいい……真田ちゃん」

少女の顔には疲れが出ている。ノエルは膝を抱え込んで、顔を腕の中にうずめた。

——このまま時間が止まつてくれれば。

「……つにじやない。駄目だ、挫折しては駄目」

つまらない感情は捨てる。それが研究所の教えた。

自身を鼓舞してノエルは顔を上げる。逆に考えれば、協会側の人間と魔女側の人間をまとめて処理できる機会ではないか。

ノエルは無理やりにでも前向きに捉えることにした。

そして、再び昨日の場所へ向かう準備をする。

「真田ちゃんのためにも……」

彼女は友人のために、また任務のために戦場へ赴く。何が正しくて、何が正しくないのか。彼女には善惡の判断は必要ないのだろう。何故なら、そこには彼女の意志は存在しないのだから。

＊＊

時間というものは、案外早く流れるものだ。正確に且つ迅速に。ふと時計を見て浮かんだ言葉がこれだつた。そして夕方になつたと認識すると、俺は知らずに舌打ちをしてしまつていた。おそらく、俺もそれなりに緊張をしているのだろう。包帯が巻かれた右手を見る。短剣が貫通したとは思えないほど、すっかり治つていた。医者がすごいのか、あるいは急所を外した彼がすごいのか。

「世の中すごい人間で溢れてるな」

他人事のように呟くが、内心気が氣でない。いくら策を練つてみても確実に勝てる方法が浮かばないので。先生の手は借りることができない。そんなことをしたら奏を見捨てることと同じだ。

奏……奏の巫女の力を使えば、また解決策が浮かぶかもしれない。

「いや、駄目だ。絶対に」

奏を巻き込むわけにはいかない。きっと奏は自分より仕事を大切にするだろう。だから、奏をこんな危ないことに巻き込んではいけない。

「……葵のやつ、こんな時にどこで何してんだ」
頭に浮かんだ友人。彼ならば力になつてもらえるはずだが、生憎、先日から連絡がつかない状態だ。以前から何度か音信不通はあつたため、心配はしていないが腹立たしくはなつてくる。

「あいつがいたら、いくらか勝算があるのに……たく、必要な時にいないやつだな」

独り言が次々と出てくる。きっとストレスが溜まっているのだろう。周囲には誰もいない。ここは幼稚園の裏門だ。ぼうっと幼稚園の遊び場を見ていると、俺も幼稚園児に戻りたくなつてくる。

「つて、俺は何を考えてんだ」

また独りでに言葉が出た。

風が吹く。誰も乗つていらないブランコがきいきいと揺れていた。

「多分、これも罪滅ぼしみたいなものなんだろうな……」

誰に訊ねたわけでもない、ただの独り言だ。

風が少しだけ強くなる。まるで風が俺の言葉を攫つていったかのように、胸がすつきりとした。

「全く……俺らしくない」

結論は出た。

「普通の方法ではまず勝てない。それなら」

俺は意識を集中して過去の記憶を思い出す。

あの非日常の日々を。様々な色の光線。剣戟の音。鳴り響く銃声。人生の唯一の汚点。今はある日々を思い出して、答えを見つけるしかない。過去からは逃げ続けることはできないうが、もしかしたらその過去は今なら役に立つかもしれない。だとしたら、それは大事な財産じやないか。

俺は才能のない凡人だ。それなら、全てを出し尽さなければいけない。要らないものだと勝手に決め付けるわけにはいかないんだ。

瞬間、頭の中が一気にクリアになつた。脳内の思考がまるで血管のように駆け巡る。

「そうだ……これなら……」

100%とまではいかないが、いくらか勝率は上がつた。充分だ。たとえ1%でも勝てる見込みが上がつたなら、それだけで気力がわく。

「これが人間の知恵ってやつだな」

俺は立ちあがり、近くの石ころを蹴つた。

「これだから魔法は嫌なんだ」

本當だ。本当に魔法は嫌だ。

「さて、お嬢様。そろそろお時間ですね」
「あら、先に言つてくれるつてことは、私のことずっと気にかけてくれたのかしら？嬉しい！」

返事をする前に、リニアが勢いよく抱きついてきた。最初は恥ずかしかつたが、もうすっかり慣れてしまつた。いや、慣れて良かつたのか？

「はいはい……気にしてますよ。それより、リニア」

俺はリニアの抱擁を軽く流して、話を切り出す。彼女も俺の空気を察してか、すぐに身体から離れた。

「少々三年前に時間を戻そう」

「どういうこと？」

俺はポケットから大量の紙束と筆記用具を取り出した。

「あの時。俺たちが生き残れたのは、この紙とペンだけの簡易的な魔法のおかげだ」「……そうね？」

リニアは首を傾げている。俺の意図することがまだ分かつていないのでだろう。

「今回もこの方法で行く。事前に書きためておく、これなら昨日のようにはいかないはずだ。リニア、お前はただ戦闘に集中してくれ。後方支援は任せろ」「なるほど。つまり、そうちやんは私を守つてくれる騎士つてことね」

「あくまで後方支援だけどな」

「それでも私を守つてくれるでしょ？ 立派な騎士じゃない」「……こんな時位、もうちょっと真剣になれよ」

正直『騎士』という言葉が恥ずかしい。

すると、突然リニアがそつぽを向く俺の頬を突き、ウインクと共に顔を近づけてきた。

「あえて真剣になる必要はないんじやない？」

近づく顔のせいもあり、俺は何も言えなかつた。

「何が起きたとしても、常に真剣に、気を張り詰め、集中して……。でも、必ずしもそんな必要はないと思う。笑つても絶好調の時だつてあるじやない。緊張は死ぬ前にすればいい、というか本能的になるものだけど。だからさ、それまでは笑つていようよ。少なくとも、私はそうしたい」

眩しくらいの笑顔が目の前にある。誰にも否定なんてさせないほど、清々しい程の自己主張。思わず、笑みが零れてしまつた。

「んー？ お姉さん何かおかしたこと言つた？」

「誰がお姉さんだよ。お前、俺より年上だつたのか？」

「さあ」

予想通りすつとぼけるリニアだつたが、そんな彼女の顔を見ていると自然と緊張の糸がほどけてきた。

「とにかく。俺がお前を最大限守つてやる。だから、絶対に勝てよ！」

「うん。私たちは絶対に生き残つて、2人揃つてここに帰つてくる」

「……フラグを立てるな、フラグを！」

リニアは楽しそうに笑みを浮かべ、くるくると踊り始めた。決戦前だとは到底思えない表

情だ。

「リニアを絶対に死なせたくない。いや、絶対に死なせない。

「……明日も、みんなでご飯食べよう」

「え？」

驚いた顔で振り向くリニア。いや、俺の方がもっと驚いている。無意識に口から言葉が出てきた。

「あ……いや、だから。明日も四人でご飯食べたいって思つて」
一瞬の間が空いた後、堰を切つたようにリニアが笑いだした。

「なんだよ。そこまで笑わなくとも。俺は真剣に」

「ああ、ごめん。つい……」

リニアは笑いすぎて出てきた涙を拭い、

「うん、わかってる。そうしよう、明日もみんなでご飯食べよう」

そして、不意に俺の頬に柔らかいものが触れた。

「お、お……おい」

「ん？」

「な、何の行為だ？」

「さあ。私にもわからないけど。なんかしたくなっちゃって」

舌を出して笑うリニア。何故か急に顔が熱くなってきた。別に初めてというわけでもない

が、こんな感覚は久しぶりだ。

——その時だつた。背後に視線を感じた。いや、視線というには生ぬるいような……

「か、奏。あ……いや、これはその」

言葉が上手く紡げない。というか、何で俺はこんな言い訳じみたことを言つてるんだ。

「……」

奏は黙つて俺を見つめている。
感じる。これは間違いなく怒つてゐる。

「あの……奏さん？」

「怪我しないで、無事に帰つて来て。話は後で聞くから」

言い終わるや否や、奏は物凄い音を立ててドアを閉めた。

リニアは肩を震わせて笑つてゐる。
あつけに取られる俺を尻目に、

「大事なお姫様が嫉妬に駆られてしまいましたな」
「うるさい。何が嫉妬だ。大体……いや、何でもない」

「大体？」
「いいから行くぞ」

ハンス・ブリーゲルに再びエージェントから連絡があつたのは、あの衝突から五、六時間後のことだった。普段よりも仕事が遅いことに対し、上層部から何かしら催促があるだろうと予測していたため、特に焦つた様子もない。ハンスは周囲を見回し、誰もいないことを確認すると電話に出た。彼の予測通り、内容はリニア・イベリン暗殺の件。何故すぐに処理しなかつたのかと。自身の主人の仲介役である、このエージェントの様子は電話越しにも分かるほど彼に疑念的な感情を向けていた。そもそも催促の連絡がかかってくる時点で、ハンスは協会から疑われているようなものだ。

「しかし、やはり何かおかしい」

ハンスは顎に手を当てて考え込む。

「そもそもリニア・イベリンの処理に何故私が？血縁ではないものの、私が彼女の面倒を見てきたことは協会も知つてゐるはず。仕事のスピードが落ちる可能性も少なからず予想できただはずだ。彼女の処理を優先するならば、私より腕の立つ者は協会にまだまだいるではないか。」

しばらくすると、ハンスは仕事の準備を始めた。考へることをやめたのではない、ただ彼は指示されたことをするだけだ。主の命令は絶対。それが正しいことであれ、正しくないことであれ。この生き方こそが彼の性格には合っている。

「まあ、人を処理することは正しい事とは言えませんが」

ハンスは、静かに口角を上げる。どうやら心的な余裕は充分にあるようだ。

ふと、彼は何かに思い至つたかのように目を見開いた。

「そ、うか……なるほど」

彼の頭の中に、ある考えが浮かんだ。

「やれやれ、本当に上層部は性質が悪い」

一人で納得したハンスはもう一つの考え方をする。それは、自身の行動云々ではなく「研究所」についてだ。偵察に来ていた研究所の尖兵。ハンスが最後にようやく気付いた程の実力の持ち主。約三年間、大人しくはしていたものの研究所は力を蓄えていたと思われる。そろそろ何かを仕掛けるのではないか。そうなると、研究所との全面戦争は避けられない。つまり再び三つの勢力がぶつかり合う日も遠くないのではないか。

予想される事態に、ハンスは眉間の皺を寄せる。そして一息吐くと、腕時計を確認した。
約束の時間だ。

「死ぬか、生きるか」

腕時計を見つめたまましばらく感慨にふけつていったが、やがて覚悟を決めたのかハンスは立ちあがつた。そして衣擦れの音すらも立てず、彼は動き出した。

「寒い……」

外に出て最初に思つたことがこれだ。昨日より寒い氣がする。それとも緊張しているせい

だろうか。

「三時間前。

「出せ」

「何を？」

俺の覚悟とは裏腹に、先生は気の抜けた返事を返してきた。

「今回の相手は強すぎる。少なくともリニアをフォローできるぐらいの装備が欲しい」

「それで？」

「……三年前に使つたやつ。全部出してくれ」

すると、先生はやつと表情を変えた。

「あら、あれを再び使うっていうの？」

「仕方がないからな」

先生はしばらく俺の顔を眺めた後、どこか嬉しそうに笑いだした。

「驚いたわ。二度とあんなこと体験したくないって言つてたのに。自分から言い出すなんて。非日常とは縁を切つたんじゃないの？」

先生の挑発に自然と笑みがこぼれる。

「あんた……俺が誰だか忘れたのか。常識だと非常識だと、ましてや日常だと非日常とか、そんなもん今はクソくらえだ。友人が困つているならただ助けてやる」それが鈴木聰太つてやつだ」

俺の言葉を聞き届けると、先生は近くにある鞄を取り出し、俺に投げかけた。

「あ、危ないだろ」

「大丈夫、大丈夫」

そう言いながら、先生は俺の方をじっと見てきた。

「な、なんだよ」

「いやいや、装備出せとか言つときながら、既にいっぱい付けてるじゃない」

正直、彼女は初めから分かつていただろうが、いざ指摘されると恥ずかしくなる。俺は先生の言葉を無視して、鞄から装備を取り出した。

懐かしい。前につけていたやつだ。

もう二度と目にすることはないと思つていた装備を、俺は一つ一つ付けていく。苦痛を最小限に抑えられるガード、愛用していたナイフ、ワイヤーに、表面に鋭い刃がある手袋。銃器類は……。

「ここまで重装備じやなくてもいいか」

「どうして？」

俺の様子を横から見ていた先生は、不思議そうに尋ねる。

「だつて今回は前みたいに世界の危機じやないからさ。ただの内輪もめに巻き込まれただけだろ」

「さつきと言つてること違くない？」

「これはただの個人的な感想」

納得いかない顔で俺を見る先生。適当に会話を流すことしかできない。俺自身、本当の理由を答えていいのか分からなかつからだ。

ついに約束の時間になつた。今からおれたちは命のやり取りをする。最悪だ、最悪の気分だ。でもどこか高揚感のようなものも感じる。

「まるで映画みたいだな」

「となると、主人公は私たちね。今はクライマックスかしら」

リニアと雑談をしながら、昨日の場所に向かう。俺たちは静まり返つた夜の道を揃つて歩いていく。虫の鳴き声ひとつ聞こえない。誰もいない公園やぼんやりと光る街灯を見ていると、とても不安になつてきた。明らかに昨日と同じ道なのに、覚悟ができるだけでこんなにも違つてくるものなのか。まるで知らない街を行く当てもなく歩いている気分だ。

「いや、俺たちには目的がある。

目の前の暗闇にぼんやりと浮かぶ影が見えた。身動きもせず闇に溶け込む男。ハンス・ブリーゲルだ。

「ハンス三

男とは正反対にリニアは笑顔で、腕を大きく広げて話しかける。演技が入っているかのような素振りだ。ハンスは黙つてリニアを眺め、小さく彼女の名前を呟く。

「リニア・イベリン」

すると彼の呼び掛けに答えるようにリニアは一步前に出た。

「そう、私はリニア・イベリン。そして私は生きるためにこの場にいる。ハンス、ハンス・ブリーゲルが生きてゐると言つたから。私は生きるために、あなたに認めてもらうために、死ぬわけにはいかない」

リニアが腰を低くして、戦闘態勢に入つた。俺もサポートをする準備をする。

先に動いたのはリニアだつた。勢いよく振り上げた彼女の脚は、ハンスの頸を見事に蹴りあげた。そして、その足はそのままハンスの腹部に入り、彼は後方へ飛ばされた。

しかし、とつさに受け身をとつた彼は、大してダメージを食らっていないようである。

「ありや、全く効いてない」

舌を出して、振り返るリニア。お前も全く緊張感ないな。

「仕方ない」

俺は舌打ちをしながら、服の中に忍ばせておいたナイフを一つ投げた。狙いはハンスではなく、リニアの足元。地面だ。これは一種のバフみたいなもの、これでリニアも多少は戦いやすくなるだろう。

「ほう……やはり準備をしてきましたか。刃に文字を入れれば、魔法が無効化される可能性は減るということですね」

ハンスは俺の作戦を予測していたのか、驚く素振りを見せることなく淡々と分析をしていたはずだ。その隙を狙い、リニアが再び先手を仕掛けた。拳を突き立てる。今回は上手く懐に入れた。それでもハンスはびくともしない。涼しい顔で俺たちを見返してきた。リニアはすぐに後方へ身体を抜いた後、今まで以上の速度で距離を縮める。そして彼の脇腹を一発、二発。重たい蹴りを入れた。

しかし、未だにハンスの表情は崩れることができなかつた。彼はそのまま懐から短剣を取り出し、俺と同じように自身の近くにそれを刺した。
「武器に文字を入れて魔法を使う。これを考案したのは私が最初のはずだつたが……一体、誰が教えてくれたのですか？一人で考えたというなら、君には素晴らしい才能がありますよ」
短剣が光を放ち始めた。それと同時にハンスは戦闘態勢に入る。守りに入つていたさつきまでとは違う、明らかに攻撃の姿勢。

「これが本物ですよ」

ハンスが俺をめがけて一直線に走りだす。反射的に俺もあらかじめ文字が書かれている紙を取り出した。これで少なくとも十秒は持つだろう。無意識の内に俺は拳を握りしめていた。

三年前を思い出す。

—あの記憶を、あの経験を。

—そう、経験は武器になる。

魔法で強化した俺の身体は、精一杯ハンスの動きについていく。もつて十秒。その間に一つでも攻撃を受けてしまつたら、その苦痛はこの十秒が終わると全て俺に帰つてくる。受けたら最後、俺の身体は倒れてしまうだろう。

熱風が通り過ぎるかのような攻撃。かるうじて右によけた後、俺は身をかがめて紙を地面に張り付けた。そしてそのまま、ごろごろと回転しながらそちら中に紙を張り付ける。ハンスは俺を追うことなく、地面の紙を見ていた。

瞬間、リニアが彼に向かっていく。彼の注意がリニアに向かつた所で、俺はポケットからワイヤーと紙を取り出した。

「ほう、そのワイヤー。Chaser の遺品か」

ハンスの言葉に構うことなく、俺は彼に向けて紙を投げた。先ほど張り付けた紙も効果を使える頃合、逃げ道はないはずだ。
これなら、勝てる!!
希望が見えたと思つた。

しかし、ハンスはこちらの攻撃を見越して素早く前に飛び出た。俺は咄嗟に地面に刺したナイフを投げるが、彼は躊躇うことなく左手でナイフを受け止め、そのまま俺に向かって投げ返してきた。

既にバフ時間が終わつた俺の身体は避けられない。幸か不幸か、身体に巻いていたプロテクターのおかげで深く刺さることはなかつたが、痛みが傷口から登つてくる。

俺は喉から出そうになる苦痛を押し殺した。視界がぼやけ、眠気が襲う。魔法を使おうと思つても集中できない。リニアが不安そうに俺を見てきた。

「だ、大丈夫だ、俺はまだ……」

「まだ倒れるわけにはいかない」

やつとの思いで身体を起こすと、俺はリニアに向かつて紙を投げた。

相変わらず恐ろしい速度で相対している二人だが、お互に冷や汗が出てきたようだ。

「お嬢さん、先ほどの蹴りは少しダメージがありましたよ。あちらの青年の苦痛とは比べ物にもなりませんが」

「そうね、だから何なのよ」

淡々と話すハンスに彼女も苛立ちを見せているようだ。

「お互い、魔法を使わない状態で体術だけで戦うには、この程度がそろそろ限界です」

「そんなこと私もわかつている」

「はい、では決着をつける方法もお分かりですね」「魔法で終わらせなければならぬ」

ハンスは小さく頷き肯定した。

「なによ、以前あなたが教えたことと違うけど?」

「状況が状況ですから」

リニアは戦闘態勢を解いて、ため息をついた。

「いい加減、上層部の意図を教えてくれないかな?」

「それは難しいですね、仕事ですから」

「仕事仕事つて……」

うんざりした顔でハンスを見返すリニア。

すると、ハンスも腕を下ろしてじつと彼女を見据えた。

「お嬢さんは……お嬢さんは何のために戦っているのですか?」

「私?」

「はい、少なくともお嬢さんがあのような行動されていなかつたら、こんなことにはなりませんでした」

「そうね」

「どうしてこのような状況を作つてしまつたのですか?」

「さあ」

リニアは芝居がかかつたように首を傾げた。そして、ゆっくりと瞬きをして続けた。

「私が正しいと信じたから。だから私はそうした。後悔なんてしない。友達のために、大切な人のためには生きていくと思つたから……。世界中の人都助けることは無理でも、周りの人たち位は私にも助けられると思う。そしたらなんか良いことありそうでしょ」

「良いこと……」

何度も彼女から聞いていた言葉だつたのか、あるいは楽観論にうんざりしたのか、ハンスは怪訝そうな顔でリニアを見ていた。

「そうですね、全て上手くいつたならそれは正しいと言えるでしょう」

「それに私は満足してる。ハンスから離れたこの五年間、色々あつたけど良いことばっかりだつたよ」

霞む視界の中でも、たとえ彼女の後ろ姿しか見えなくとも、リニアのあの眩しい笑顔が思い浮かぶ。

堂々とした楽観論といい……あいつらしい。

駄目だな、こんなところで寝ていられない。

俺は根性で立ちあがらうとした。まず足に力を込めて集中し、次に腕、手……。

ふと、手のひらにワイヤーが握られていることに気付いた。

——これが最後のチャンスか。

俺はワイヤーを見つめ、その先のハンスに意識を集中させた。

そして一、

「良いこと、あるに決まってるだろ?」

〔つ三〕

叫びながら俺はハンスに向かつてワイヤーを投げた。それと同時に、先ほどの魔法を発動する。紙の文字は全て『止まれ』だ。発動時間は少ないが、あれだけの量。彼の地面は紙の海となつてゐる。おかげで俺の投げたワイヤーは確かに、魔法で動けない彼の腕を捉えた。そしてリニアが彼にむかい、静かに歩きだす。

「魔法を使うつて、こういうことでしょ?」

「小さな魔法も重ねれば威力が増す。そしてこのワイヤーは特別製。見事ですね」「唯一持つてる研究所の代物だ。大魔法使い専用兵器、三年前にもらつたものを使うことになるとは俺も思わなかつたがな。俺はサポー卜役、あんたを止めればいいだけ。リニア、後は任せたぞ」

苦痛に耐えられず、背中を壁に預けたまま俺はリニアの背中をただ見つめる。彼女はたくさん紙をハンスに投げた。巨大な雷に炎を起こした後、最後に彼女はハンスに向かつて拳を突き立てた。

「魔法使いを倒す最善の方法は、魔法を使わないことってね。私は最後、拳で終えたわ」
全ての攻撃をまともに食らったおかげか、ついに絶対に倒れることがないと思っていた男
が膝をついた。

「成程……このような作戦があつたとは」

「正攻法ではあなたを倒すことは無理だからね」

ハンスは荒い呼吸を繰り返しながら、俺をじつと見つめた。

「これから……どうするのですか？あなたには、研究所から……尖兵が」

「まあ、どうにかなるんじやないか」

ハンスはしばらく黙つたまま何かを考えていた。そして、傷ついた身体をゆっくりと起こ
した。どうやらリニアの勝利で決着はついたようだ。

「さてと……俺はもう家に帰つていいのか？」

やれやれと言つた様子で俺は息をついた。一方、気づくと彼女は笑顔でハンスへと駆け寄
つていた。

「ねえ、ハンスも一緒にお家帰つてご飯食べない？」

おそらく俺もハンスもあつけにとられた表情をしているに違いない。

「お前……さつきまで命がけで戦つてた相手に何を」

「いいの」仕事はもう終わつたでしょ」

俺たちのやり取りをハンスは静かに見守つていた。そんな彼に気付いたリニアがもう一度

ハンスに手を伸ばす。

「ハンス」「一緒にご飯食べよ」

「……いいのですか?」

「当たり前でしょ、ハンスは家族だもん」

ハンスは彼女の手をしつかりと握りしめた。

そうだな、やつぱりこれは家族喧嘩だったな。

「とにかく早く帰ろうぜ」

——その時だつた。

ハンスが勢いよく俺たち二人を後方へ追いやつた。何者かが突然、彼の前に現れたのだ。

「ここにちは」

少女だ。

「お前は……確か昨日会つたよな?」

「研究所の尖兵だ」

俺の疑問をハンスは一蹴した。少女はそんなやり取りを見てか、くすくすと笑いだす。

「私の名前はノエル。リニア・イベリンの監視が目的だつたけど、私の上司が彼女を処理すればもつと私を評価してくれるっていうから」

少女は拳銃を取り出すと、何のためらいも無くりニアに向かつて発砲した。しかし、間一

髪のところで銃弾はハンスが短剣で弾いたことにより壁に逸れた。

「予想通りだな。戦いの後に現れるとは思っていたが、まさかこのように露骨的に来るのはな。お前は子供か？ それとも改造人間か？」

彼は先ほどの戦闘時以上の早さで少女に接近した。やはりリニアとの勝負では多少の手加減をしていたのか。

「生半可だな。身を隠すのは上手いが、他は中途半端というわけか」

ハンスは後方へ回避しようとする少女の腕を掴んだ。

『遅い』

そして少女の手首をあらぬ方向へと曲げた。少女の悲鳴が響き渡る。思わず耳を塞いでしまいたくなるような悲痛の叫びだ。

『ハンス・ブリーゲルは後始末を専門とする』

この言葉の意味がどういうことか改めて理解した。彼は少女の片方の腕に短剣を刺した、そして少女に悲鳴を上げさせる暇もないまま別の個所を刺す。俺が口を挟む間もなく、次々と刺し続けるハンス。そして最期に壁に投げ捨てられた少女は、悲鳴をあげる気力もないのか壁にもたれかかっていた。

「背後には誰だ。ロベルトか、ゴトーか？ ルイーゼは死んだはず、フーゴはまだ生きているのか？」

ハンスの尋問に対し、少女は何も答えぬまま俯いている。
「知つてることを話せ」

彼は少女の首元を掴んで持ち上げた

「や……やめろ! まだ子供だろ、何してんだ、あんた!」

「これは人間ではありません、人間のように見える人工生命体。詳しい技術は分かりませんが、三年前に研究所が作り上げたものです。そしてこれらは我々の敵です。容姿で判断してはなりません」

「けど……見ていて気持ちがいいものじやない」

すると、ハンスは鋭く反論をした。

「こいつはあなた方に向かつて発砲した。要するに君は死ぬ可能性があつた。更に今このことは、おそらく上司から制約がかかっている状態。いきなり殺しにかかるものに慈悲をかけると?」

「それは……」

彼の言つていることは正論だ。ちらりと少女の様子を窺う。すると少女は怒りの籠つた瞳で、まっすぐとハンスを睨んでいた。その表情はどこか嫌な予感がする。俺の頬をじわりと、冷や汗が頬を流れた。

次の瞬間、少女はひとり呟く。

「私の趣味はー、

爆弾設置だよ」

突如、大きな爆発音と共に周辺の木々が倒れ始めた。初めてハンスの顔に動搖が現れた。そして俺たちへと振り返る。俺もリニアも傷を負つており、倒れてくる木を避けることは不可能だった。

「ハンス・ブリーゲルと戦うというのに、何も準備をしてこないわけないだろ」形勢逆転した少女は笑みを浮かべていた。そして傍に落ちていた拳銃を拾い、リニアへと照準を合わせる。

「さようなら」

「リニアっ三」

俺が伸ばした手は彼女まで届かなかつた。

一発の銃声が響き渡る。

その透き通つた音は、ずっと俺の耳の中で木霊していた。

「おい……三」

口から自然と言葉が零れた。大量の血が道路に流れ落ちている。

この血は……

「一ハンス三」

彼女の悲鳴にも似た叫びが聞こえる。ハンスはかるうじてリニアを庇つたものの、銃弾が

肩を貫通していた。

「この出血の量……やばいぞ！」

「ハンス」しつかりして、ハンス三

急いで駆け寄るが彼の瞳は虚ろとしている。息はまだしているようだが、重症には違いない。

「あら……ハンス・ブリーゲルに当たっちゃった。どうしよう……ええと。とりあえずもう一発撃つね」

少女は笑顔で再び拳銃を構える。

「させるか？」

少女が引き金を引く直前、俺は勢いよく少女に向けてワイヤーを投げた。見事に命中し、

拳銃は少女の手元からはじけ飛んだ。

「あーあ。あと……ちょっと、だつたのに……な」

力尽きたのか、少女もその場で意識を失つた。とりあえず勝負はついたみたいだ。

「ハンス三」

視線を戻すと、リニアは肩を震わせて彼の手を握りしめていた。

「ハンス……何で私なんか庇つて……」

すると、ハンスは消え入るような声で彼女へと笑いかけた。

「娘を……守ることに、理由なんて……要りませんよ」

「ハンス……」

「大丈夫ですよ、お嬢さん。私は……こんなところで、死にやしません」

言葉とは裏腹に、ハンスの呼吸は先ほどより荒くなっていた。出血も未だに止まらない。

「早く手当てを……」

「お嬢さん……気をつけてください」

彼の忠告にリニアはすぐに正面を見据えた。釣られて俺も前を見る。

暗がりにすらりとした美青年が立っていた。いや、ただの美青年ではない。彼はその外見に似合わず、口元に長い鬚を生やしていた。それがどこか不気味な雰囲気を醸し出している。青年は俺たちに構うことなく、気絶した少女を両手で抱え上げ、ため息を零した。

「やれやれ……ここまで実績に執着するとは。まあ、少なくとも評価できる部分もあるか」

青年の視線は少女からハンスへと向けられた。

「久しぶりだな」

「貴様が……背後だつたか」

すると、青年は心外そうに口を尖らせて答えた。

「それはちよつと違うな。私が下した命令は監視だけ。部下が勝手に突っ走つただけだ、でもここは謝罪をしとこう」

「喧嘩を売つているのか？」

「いや、今日はこれを回収しに来ただけだ」

そして青年は身を翻す。

「では、さようなら。リニア・イベリン、鈴木聰太。今度会う時は楽しく遊ぼう。期待し

ているよ」

そう言い残すと、青年は闇に溶け込むように消えていった。

その後はかなり大変だった。ハンスを普通の病院に連れていくこともできず、急いで先生の元まで彼を運び、幼稚園で手当てをしてもらつた。幸いにも一命はとりとめ、体内にも銃弾の破片は残つていなかつた。ただ弾丸事態に刻まれた魔法がかなり強力だつたのと、やけどの跡がひどいこともあります。回復にはだいぶ時間がかかつた。通常の治りの速度より二、三倍早いこちらの治療技術でも、ハンスの傷が癒えるまでには三日もかかつた。

三日後、俺ならあの傷から完全回復には五日はかかりそだだというのに、ハンスは既に回復を終え、本国・魔法協会へと戻るようだ。体調のこともあり、リニアは不安そうに彼を見ていた。

「もう帰るの？」

「これも仕事です。定期報告をしなければなりません」

「そつか」

あからさまに落ち込む彼女をしばらく眺めた後、ハンスは言葉を選ぶようにゆっくりと口を開いた。

「おそらく。私の推測なんですが、上層部の『リニア・イベリンを処理しろ』という命令

は何らかの偽装工作だと思います。研究所の動向を見るための作戦かと。それだと私が派遣された理由も納得がいきますし」

「なるほどね」

リニアは勘弁してくれという顔でため息をついた。隣で聞いていた俺も、呆れるしかない。

そんな茶番のために俺たちは本気で戦つてたのか。

「おかげで成果は得られました。お嬢さんはこれからも自由にしていて大丈夫でしょう。しばらく我々協会側は、研究所を注視しなければならないので」

彼女は少し不服そうな顔でハンスを見ていた。

「まるで私なんか、どうでもいいみたいな……」

「お嬢さん、そんな顔をしないでください。私も娘が五年間でどれほど強くなつたか試してみたかったです。この先研究所に狙われる回数も増えるでしょう。ある程度の実力がないと生き残れませんから。敵に殺される位なら私が安らかに送ろうと判断した結果です。これも愛しい愛娘への愛情表現ですよ。娘の成長を見守ることは親の義務であり、楽しみでもありますから」

「さらっと恐ろしい冗談を交えてくるあたり、あなたの体調は万全のようだな」

優しい微笑みのような悪魔の頬笑みのような、どちらとも取れる笑いを残してハンスは玄関へと向かつた。その背中を見送りながら、リニアは自信たっぷりに声を投げかけた。

「ハンス、次会う時には手加減抜きだからね」

「はい。それでは失礼いたします。キルヘン、あなたにもお世話になりました。ありがと

うございます

「はいはーい」

扉が閉まつても、しばらく俺は動けなかつた。

—キルヘン？

「あ、それ私の名前よ」

俺はよつぽど不思議そうな顔を浮かべていたのだろう、先生は事もなげに答えた。

「何だよ、名前あつたのか」

「当たり前でしょ」

「それもそうか。ところで、先生はどこまで知つてたんだ？」

「まあ、なんとなく。勘かな」

雑誌を読みながら返事をする先生。この件ばかりは適当に答えられるわけにはいかない。

「ちゃんと答えてくれ俺だけ何も分からぬ状態で苦労するのはもう御免だ」

すると先生は憐れみにも似たような瞳で俺を見てきた。

「もう終わつたことなんだから……ハッピーエンドだつたからいいじやない」

「これは俺が欲しかつたハッピーエンドじやない」

俺は思わず頭を抱えて叫んでしまつた。

ハンス・ブリーゲルが帰国後、俺たちは再び日常が戻ってきた。もちろんリニアが追加された日常だ。何の間違いか、俺の足は自然と幼稚園へと向かっていた。そして、気が触れたのか自ら幼稚園の玄関を開ける始末。

「あれ？ そうちやん、どうしたの？」

驚いた顔のリニアを見て、やつと我に帰るが俺の口は勝手に本音を告げていた。

「い……一緒にご飯食べようって約束したる」

「ああ、あれ本気だつたんだ？」

「あたりまえだろ」

「そつか……そつか三」

リニアは何が嬉しいのか、いつもよりきつく俺の身体を抱きしめてきた。まあ、そこまで嫌ではないか。俺は彼女の笑顔を見て、そう思った。

今回の事件。協会と研究所の争いが始まりかけている証拠だ。
これではまるでー、

「Retrace…というか」

Track2 Retrace end.-

(
空
白)

169.psd

少女は目を開けると、周囲を見回した。白い壁、白い家具、そして白いベッド。真っ白な世界だった。少女はここがどこなのか、何故ここにいるのか分からなかつた。少女が思い出せる最期の記憶は、ハンス・ブリーゲルとの戦いで負傷したこと。

「う……」

少女の身体に激痛が走つた。このまま横になつていた方が楽だらうが、ここがどこだか解らない以上安心して寝ていられないと思つた少女は、思い切つて身体を起こし、自身の着ている服装に目をやつた。白い服、まるで患者が着ているようだ。

その時だつた。突然、自動扉が開く音がした。少女は手元からゆっくり視線を上げる。

「……部長」

現れたのは、少女の上司のようだ。少女は申し訳なさそうな表情で何かを言おうとしているが、上手く言葉にできないようである。

「あの……部長……すみま」

「大変だつたな」

「え？」

間の抜けた声が部屋に響いた。少女の反応を気にせず、上司は続ける。
「君の力量は知つていた、だから戦闘は課さなかつた。しかしあの状況で無事に助かつてよかつた。この事実だけで充分だ。ゆつくり休んでくれ、ここは君が生まれた場所だ」

少女、ノエルは上司の言葉に安堵した。今回の失敗で処理される可能性も想定していたからだ。しかし、少女はまだここにいられる。まだ少女には利用価値がある。それはつまり、まだ少女は友人を守れるということなのだ。

「はい、これはつまり再び研究所が動き出したということかと」

ハンス・ブリーゲルは報告書を彼の上司、協会の首脳部の一人である人物に渡した。内容は今回の事件と今後浮上する勢力とその関係者について。

「また奴が戻ってきたのか」

男はため息をついて、報告書を机に置いた。

「とりあえず、ご苦労だつたな。もう君の主人には会つてきたのか？」

「いいえ、報告が先ですから。これから屋敷の方へ戻ります」

ハンスは淡々とした表情で答えると、軽く挨拶を終え部屋を後にした。ひとり、部屋に佇んでいた男は、もう一度報告書を見返す。そして頭を抱えた。

「全滅したと思っていたが。全く、科学者という者は諦めを知らないのか」

「おはよう、鈴木君」

「……お前な」

聞き慣れない呼びかけ。だが身体が勝手に彼の声に反応した。そう、俺は大学の廊下で數カ月ぶりに奴と顔を合わせた。

「葵、今まで何してたんだ。お前のせいで、俺は大変だつたんだぞ」

「何つて……仕事」

こうも当然のように返されると、何も言えない。

「仕事なら……まあ仕方ないか。お前も忙しいな」

確かに、あそこの人手不足は深刻だからな。嘘を言つているようにも思えない。

「そういうえば、リニア。戻つて来てるんだつて？」

「ああ、幼稚園で元気に食客やつてると思うぞ」

「へー、よくあの人も受け入れたな」

「あれでも愛すべき愛弟子なんじやないか？」

「そういうもんなのか」

適当に腰かけた椅子で話し合つていたが、ふと疑問が浮かんだ。

「ところで今はまだ連休中なんだが。お前、間違えて登校しちやつたの？」

「鈴木こそ、何で学校にいるんだよ」

「俺は図書館に勉強しに来たけど。お前は何しに来たんだよ」

「ひどいな、俺も勉強するために学校來たんだよ。こう見えて、する時はするから」

「信じられん」

久しぶりだと言うのに、正直ここまでテンポよく会話できるとは思わなかつた。

「さて」

俺は大きく伸びをして立ちあがると、葵に振り返つた。

「俺このあと、あそこにご飯食べに行くけど葵も行くか？」

すると彼は驚いた顔で俺を見返した。そして、小さく笑う。

「慣れたんだね」

「何が」

「あそこ、嫌いだつたのに」

言われるとは思つたが、いざ聞かれると俺は思わず視線をそらしてしまつた。まだ少しだけ、気まずさのような恥かしさが残つている。

「いや。別にそんなに嫌がる必要はないかなつて思つて。それにいつまでも同じ感情に縛られているのもガキ臭いだろ」

「そつか」

「それより、お前。しばらくは連絡通じるのか？」

葵の視線に耐えられず、俺は急いで別の話題に切り替えた。

「まあ、多分」

「最近、変な事件多いから気をつけるよ。お前なら大丈夫だろうけど」「だろうね」

俺の心配を余所に、葵は平然と氣の抜けた返事をする。

「……まるで他人事みたいに言いやがつて」

「そう?』

「そうだよ』

いつものよう に軽い冗談を交わして、葵とは別れた。久しぶりに顔を見て安心はした……
ような気がする。

研究所の中央会議室。そこには数十人の人間が座っていた。男は自身の順番が来ると、落

ち着いた声で話した。

「ということで、今回のこと私は任せませんか?』

その一言に周囲の人間はざわつき始めた。

『そうだな、今回はケラーに任せよう』

『これと言つた不満はございませんな。君はとても慎重だからね』

『成功すれば再び魔法使いたちの抗争が起きるだろう』

『しかし我々の目標は現状維持や組織修復ではない。学問の追求だ』

たくさんの声がスピーカーを通して聞こえてくる。彼は静かに状況を見守つていた。

『それならケラーのところの奴にしよう』

「人の男の提案にケラーと呼ばれた男は耳を傾けた。

「……といいますと？」

『Mr.Modification.』

思わず彼は失笑してしまつた。

「あの狂人を連れていくのか。面白い!確かに仕事は早いな」

男は「最高だ」と拍手を始めた。そんな彼の態度が気に食わないのか、周囲からは不満の声が聞こえる。しかし、スピー・カーの男はそんな声は無視して言葉をつづけた。

『とにかく、君は今度の件には干渉するな。彼が何をしたとしても』

「ああ、そうしますとも」

そして男の声は途切れた。同時に会議も終わつたのか、大勢の人間が部屋から出ていく。
『Mr.Modification. 誘拐犯を再び使うとは……全く、狂つてゐるな』

小ゑな咳きと共に、ケラーも会議室を後にした。

-"End.-

176.psd

177.psd

Track3 A Bad Dream

「寒い」

吐いた息が白く染まる。今は連休中だが、俺は図書館で勉強するために寛ぎながら学校に来た。目に見えての成果は出ないが、何もしていないよりはいいと思っている。バイトに勉強……確かに身体は疲れるが俺なりに満足感もあるため、不満はない。今日はこのまま帰つて一眠りでもするか。

「え……」

何故か校門の前にリニアが立つていた。

「おつかれ。ちょっと散歩しない？」

「別にいいけど」

特に会話をすることなく、俺はリニアの後ろをついて行くことにした。寒空の下をただ歩き続ける。行く先すらわからないまま。

——ああ、でも。

認めたくないが、こいつらとの生活は嫌ではない。一緒にご飯を食べたり遊んだり。何より他人と会話する機会があるということが一番嬉しい。サークルに入る機会を逃してしまつたおかげで、俺は葵以外とめったに学校で会話することがないからだ。

「ところで、どこに向かっているんだ？　だいぶ歩いたけど」

「幼稚園だよ」

「大学からだとかなり距離あるぞ？」

「大したことないって。今日はそうちやんと一緒に歩きたい気分なの」

そういつてリニアは笑顔で振り向いた。

「何だそりや。こないだも買い物する時、一緒に歩いただろうが」

「そういうのじやなくて」

俺が氣だるそうに答えると、リニアは拗ねた表情で俺を見返してきた。

「……まあ、たまにはこんな風に落ち着いて歩くのも悪くないかな」

すると彼女は一気に笑顔へと戻った。ころころと変わる彼女の表情はとても活き活きしているように思える。

「嬉しそうだな。何かいいことでもあるのか？」

「ううん、ただ一日一日が楽しくて」

「へえ。よかつたな」

「そうちやんは違うの？　楽しくないの？」

リニアはぐっと顔を近づけてきて、まっすぐと俺を見据えた。彼女の澄んだ瞳を見ていると、俺もつい本音を滑らせてしまいそうになる。

「いや、俺も……楽ししくなくはないけど」

「じゃあ楽しいんじやない」

「待て、『楽しくない』の反対は必ずしも楽しいというわけでは」

「じゃあ楽ししくないの？」

「いや、今は楽しいけど」

反射的に答えてしまった。リニアはだんだんと口角を上げ、目を輝かせる。

「そつか：それなら良かつた。明るくいこう、楽しいとか嬉しいと感じたら笑おう。そんなに難しくないから」

「おい、その言い方はまるで俺が全く笑わないみたいじやないか」

「そんなことないって」

楽しそうに笑っていたリニアは、気づくと俺の隣を歩いていた。

他愛無い会話が続く。突然、一際寒い風が頬を撫でた。コートの上からでも感じるこの寒さ。

「そろそろ年末だな」

「そうだね」

「この一年どうだった？」

「前半は逃走、後半は寄生」

「おい」

マフラーに顔をうずめるリニアを俺はじつと見つめた。今更ながら、やつぱりリニアは美
人だ。でもこの性格じや、まず男はできないだろう。いや、たとえ出来たとしてもそいつ
は一生苦労するだろうな。

「大変そうだな」

「何が？」

「お前と結婚する男は、一生苦労しそうだな」

数秒間の沈黙。

まずい、もしかして琴線に触れてしまつたか……。

恐る恐る彼女の様子を窺うと。リニアは顔を赤らめていた。

「何だよそれ……っていうか、こっち見るな」

勢いのあるストレートが俺の腹部に命中した。リニアはしばらく顔を伏せると、今度は笑
顔で軽めのストレートを突き立てた。

「淑女の前でそんなこと言つたらダメでしょ。鈴木聰太さん？」

「……はい」

「よろしい」

俺は二度とこの話題に触れてはいけないと学んだ。

「そういえば、最近は何してるんだ？」

「ただただ生きている」

つまり二一トか。

「協会から連絡は来たのか？」

「一応はね。私が処理対象になつてたのは、研究所の動きを見るための策だつたんだつて。まあ元々、追われていた身だからこんな役回りも仕方ないけど。とりあえず、私はまだ協会に所属という形で、所謂待機状態みたいな感じ」

「ほう」

「ちなみに月給はきちんと貰えます」

「うわ……なんだそれ」

「まあまあ。待機状態つてことは、研究所の動きを監視してろつてことなんだから仕事はしてるのよ。ということで、ここでしばらく遊んで暮らします」

結局、遊んでるんじやねえか。

「いいな」

「え？」

「いや、なんか羨ましくて。自分でも何が羨ましいのか分からぬけど」

気づくと、俺は脚を止めて立ち尽くしていた。

——俺はいつたい何のために勉強しているんだ？

「よつ」

突然、リニアが俺の鞄を取り上げた。

「何これ、かなり重たいわね」

そうは言うが、彼女は軽々と鞄を持ち上げていた。

「大事なものが入っているんだから落とすなよ」

「大丈夫、大丈夫……うわ、なんか色々入ってるね。ノートに辞書に単語帳……とまた辞書」

歩きながら人の鞄を漁る女を、俺は呆然と眺めていた。

「ねえ、どうしてこんなに勉強するの？」

「どうしてって……他の人もしてるから俺もしてるだけだ」

「それ、本当に勉強っていうの？」

怪訝そうな顔をするリニアに対し、俺は当たり障りのない返答をした。

「俺が望むのは平凡な生活。何かになりたいわけじゃない。だから皆と同じように勉強しててるだけだ。それにサークルも入っていないから、バイト以外の時間は暇だしな」

「へえ……真面目だね」

「別に。疲れてそのまま寝たりもするし。大体、みんなこんなもんだろ」

「なんか……そんなに他人を意識する必要ある？」

「あるだろ。世の中一人じや、やっていけないんだし」

「……そうだけど」

「それより、いい加減鞄を返してくれ」

リニアに向かって手を伸ばすが、彼女は俺の手をひらりと避けた。

「重いでしょ、今日は私が持つてあげる」

「え……ああ、ありがとう」

俺は行き場を失つた手で訳もなく鼻をかいた。

だいぶ歩いてきた気がするが、まだまだ幼稚園は遠い。

「本当にバス乗らないのか？ 鞄も重いだろ」

「いいの」今日はこのまま歩いて行きたいって言つたでしょ。心配しなくても、多少はそ
うちやんよりも体力あるつもりよ」

「多少どころではないだろ」

「うん？ 何か言つた？」

「なんでもない」

リニアに押し切られ、結局このまま歩き続けることになつた。夕焼け空の下を2人で歩い
ていると、懐かしい想い出が蘇つてくる。何年も前の記憶。顔をきちんとと思い浮かべるこ
とはできないが、彼女は良い奴だつた。

「そうやん、何か考え方してるとでしょ」
「え」

顔を上げると、リニアがまじまじと俺を見つめていた。

「昔の女のことも考えてた？」

「ち……違う」

ニヤニヤと笑うリニアに対し、俺は至極冷静な声で問いかけた。

「三年前……あの時。どうして何も言わずに帰ったんだ」

すると、リニアは一瞬驚いた表情をした後、すぐに俺から視線を外した。

「ごめん、やっぱ何でもない」

俺は立ち止まっているリニアを追い越し、前を歩くことにした。

「あの時」

彼女の声に足が自然と止まり、つい後ろを振り返る。

「あの時、私には誰にも言わずに消えることが一番正しい選択だと思つた」

「……後悔してないか？」

「しない」私が決めたことだから。もし後悔なんてしたら、自分を否定することと同じでしょ。それじゃあ、その時の私が可哀そう。でも……少し反省はしてる」「そうか」

真剣な顔で見据えてくるリニアを見ていると、なんだか落ち着かない。

「笑えよ」

「え」

「リニアらしくないから。明るく笑っている方がいい」

「こ……こう？」

徐々に表情を変えるリニア。若干、頬が引きつっているが、まあ合格点にしておこう。

「さてと、早く幼稚園に行くか」

「う……うん」今日は何して遊ぶ?」

「遊ばない、飯食つたら帰る」
「ええー、せつかく行くのに？」

ふと、もう一度空を見上げた。昔も今も同じ夕焼け空。

「きれいだな」

「え？」

「ほら、置いてくぞ」

「待つて、待つて」

小走りで駆け寄つてくるリニアを見て、つい笑つてしまつた。すると彼女も嬉しそうに笑い返す。そう、これが今の俺の日常だ。

「それで？」

彼女。この幼稚園の園長を務めている天城紫乃は、目の前に座つてゐる男に声をかけた。
だいぶ話しかけていたのか、カップに入ったお茶はとつとくに冷めきつてゐる。しかし、彼女は相手の様子を気にすることなく、自分は冷蔵庫からお気に入りの炭酸飲料を取り出した。

「それで？」と言われましても、俺もよくわからないんだ

「何よ、仕事なんだからちゃんと処理してよ」

男の返事が気に入らないのか、天城は退屈そうな表情を浮かべている。ここ最近の事件。彼女自身はこのような事件を嫌つてはいないが、保護者として子供、九条奏の教育上あまり良くないと考えているようだ。

「そういえば葵くん、この間の事件知ってる？」

「ハンス・ブリーゲルの件か？」

「重要なのはそこじゃないわ。わざとでしょ」

葵と呼ばれた青年は、冷めたお茶を口に含むと真剣な表情に戻り、天城を見据えた。

「ついに研究所が姿を現した」

「そう、ハンス・ブリーゲルの動きに乗じて研究所の連中がここに集まりかけている」「けど組織は半分以上壊滅したんだろ、今動くにはまだ早いんじゃないか？」

疑問を浮かべる葵に対し、天城は難しそうな顔で答える。

「どうだかね。ただ確実なことは以前程の勢力はないだろう」

「確かに。あそこまでの大規模な戦いにはならないはずだ、多分」

葵の言葉に天城は眉を動かす。

「多分……？ それはどういう意味？」

すると葵はぼんやりと窓を見つめながら静かに答えた。

「大規模なことはしなくとも勝利を収めることはできるだろ？」

「……暗殺か」

「そーいうこと」

葵は苦笑しながら言葉をつづけた。

「この世の中、しかも法治国家の中で暗殺を心配しなきやいけなくなるなんてね。やっぱ
り魔法士つてのは、ろくでもない仕事だな」

「あら、楽しくてやっているんじやないの？」

「それはそれ、これはこれ」

葵はため息を零すと再び考え込んだ。

「事実、三年前の事件で研究所は組織の半分以上の人間が消え、壊滅寸前という状態だっ
た。しかし彼らには首脳部、頭がない。要するに、全滅しない限り彼らはいつまでも動き
続けるということだ。」

「暗殺までとは言わないが、奴らは確実に来る」

「つまり警戒しておいて損はないか」

「ところで制服の調査の件はどうなった？」

葵が訊ねると、天城は近くの引き出しから例の物を取り出した。以前、葵が彼女に渡した
制服の断片。

「出所は奏ちゃんの通う学校だつたわ」

「学校？」

「あ、余計な詮索はいいわ。ただあの子の担任が改造人間だつただけ」

『改造人間』なんて単語を聞いたら普通の人間は首を傾げるだろうが、葵は驚くことはなかった。むしろ予想をしていたようだ。

「それで、その制服の断片は研究所と関係していたのか？」

葵の問いに天城は頬杖をついて顔をしかめた。

「さあ。確かに何らかの形で関係はしているんだろうが、その担任自体あまり研究所とは関係ないようにも思えるんだよね。雰囲気というか、研究所に従属しているようではなかった」

「けど、明らかに研究所は関わっているだろ」

「おそらくね」

天城が言葉を返すと、葵は視線を落として黙り込んだ。

「どうした？」

「一体何のためにそんな事件を起こしたんだ？」

「子供たちのためでしょ？」

「違う。そいつの後ろにいる人間だ。研究所から解放された改造人間と、何が惜しくて協力している？」

「……ing」

彼女の言葉に、葵の顔にも緊張が走った。

「担任の女は当たり前のようにEgaと言っていたわ。眞実を知っているのか、研究所から与えられた知識なのか分からなければ、確実なことはEgaを起こそうとしていた」

「……またそれか」

「それ以外の目的はないでしょ。研究所の連中は『運命の開拓能力』を手に入れるこ

としか頭にないんだから」

「全く……奴らも飽きないな。あいつもあいつでいい加減察してくれ」

葵はソファの背にもたれかかり、宙を見上げてうなだれた。

「平凡に日々を過ごしたいな」

「なに？ この仕事が嫌になつたらやめればいいのに」

物珍しそうな視線をよこす天城を一瞥することなく、葵はただただ宙に向かつて言葉を続ける。

「いや、やめない。俺はもう二度と三年前の悲劇を繰り返したくないからな。そう……き

つとあの悲劇は、これからもずっと俺の背中にぴたりくつついているんだ」

「辛いなら忘れてしまえばいいのに」

「……忘れるってことは否定するつてことだ。そんなことしない、俺にはできない。たとえ、その過去に一生振り回されるとしても。俺は全部背負つて前に進むしかない。そうしないと、過去の俺が可哀そうだろ。……まあ、これ以上は俺も重たいものを背負いたくな

いけどな」

思わず天城は口元を緩めた。

「考えは全然違うけど、結論は同じなのか」

「何が？」

なんでもないと苦笑する彼女を、怪訝そうな顔で葵は眺めていた。

「何でこんな会話になつたんだ……あんた老けただろ。年寄りの前で位しかこんな会話しないぞ」

「失礼な。戸籍上、身体上はまだ三十代前半よ」

こつんと葵の頭を叩くと、天城は再び本題へと話を戻した。

「今後あなたはどうするつもり？」

「とりあえず俺は協会の動きを見ながら、当分は普通に学生生活を過ごすつもり。鈴木はリニアがついているから大丈夫だらうけど、問題は……」

「奏ちやんか」

沈黙が部屋に漂う。窓から聞こえる風の音しか聞こえない。

「研究所のもう一つの狙い。巫女信仰。幼児連續誘拐事件の唯一の生存者の九条奏」「ああ……それと」

葵は一呼吸置いて続ける。

「この間耳にしたんだが、あいつがまだ生きていた」

「え？」

「こつちの件も覚悟はしといたほうがいい。また奏がいる時、これは話し合おう

「……」

天城は動搖して何も言葉を紡げなかつた。すると、葵は口の端を上げて煽り立てる。

「どうした、あんたらしくないぜ。心配しなくとも、あんたが傍にいるんだから無敵だろ？」「無敵……か。本当にそうだといいんだがな」

「自分の力を否定するのか？」

「そうじやないけど、私だつて心配はするさ」

「普段通りに過ごしてればいいだろ。奏が外出する時は俺が傍についているし、何よりもいつがまた来るつていうのも確実じやないし」

言い終わるや否や、葵は入口の方を振り返る。誰かが帰ってきたようだ。足音が二つ。

「え？ お前来たのか？」

扉が開いて第一声がこれだ。どうやら青年は葵とこの場所で鉢合わせるとは思っていないかつたようである。

「うん。きつと俺、鈴木よりここに来てる回数多いよ」

「そう……なのか？」

驚いて入口で固まる鈴木。その陰からひよっこりと銀髪の女性が顔を出した。

「あれ、葵ちゃんじやない？ 久しぶりね」

「リニア、元気そうだね」

嬉しそうな顔で手を握つてくるリニアに葵も笑つてゐる。彼女の大きさな行動に葵は慣れていよいよだ。

「ところで、二人とも何の話してたんだ？」

鈴木に向かい合つて座つてゐる葵と天城を見て、不思議そうに首を傾げた。

「いや、大したことは話してないよ」

「……魔女と共に密談。怪しいな」

納得のいかない顔を浮かべる鈴木に対し、葵は楽しげな笑みを返した。

九条奏は小学五年生だ。来年には六年生、小学校生活も残り一年だと奏は思っていた。中学生になれば、今よりもっと成長出来るだろうかと彼女はいつも思っている。
同級生よりは少し大人びた考え。これも周囲の環境のせいだろう。彼女は赤の他人ともいえる天城の元で面倒を見てもらっている。少しでも役に立ちたい。これが奏のちっぽけな願いだつた。しかし、当人は気付いていない。彼女が家事をしているだけでも、充分に天城は助かっているということを。

やつと授業が終わつた。本日残すは国語の授業一つだけだ。学校内でも変わらず口数が少ない彼女。クラスメイトの笑い物にされたり、友人も少ないと思われるだろうが、実際そんなことはなかつた。妙なカリスマ性。一言で言えば、隠れた実力者。これが学校内での奏の姿だ。しかし、学校内の姿を天城や鈴木に知られることは少し恥ずかしいようである。これも彼女の乙女心なのだろう。

休み時間、特にすることもなく奏が机に突つ伏していると、彼女の周囲に数人の女の子が集まってきた。

「奏ちゃん、何してるの？」

「何も」

顔を上げることなく答える奏に、今度は別の女の子が話しかけた。

「最近、奏ちゃん疲れるね」

「別に疲れてないよ」

ぶつきらぼうに答える奏の態度を気にすることなく、少女はある雑誌を取り出した。

「ねえねえ、これ見て。かわいいよね」

思わず顔を上げた奏の視界に、たくさんのファンシーグッズが飛び込んできた。奏の密かな趣味。それは、このようなファンシーグッズを集めることだ。

「これ、私持ってる。お母さんに買つてもらつたやつだ」

「かわいい。これ欲しいな」

わいわいといつの間にか小さな人だからが、奏の周りにはできていた。

すると、何を話しているのか気になつたのか数人の男の子がこちらへと顔を向けてくる。

「うわ、お前らそんなもん見てるのかよ」

「……」

ニヤニヤと笑っている男の子たちに対し、奏は黙つて彼らを見返す。

「……」

「あ……あつち行こうぜ」

無言で見つめられ、居心地が悪くなつたのか、男の子たちはすぐに奏の席から離れていつた。ため息をついて、再び雑誌に視線を戻す奏。すると、周囲にいた女の子たちが一斉に

歓声をあげた。

「かつこいい」

「さすが奏ちゃんだね」

このように小さな争いを治めることができるからなのか、何故か彼女はクラス内で人気があるようだ。

「でも、やっぱり奏ちゃん疲れてるでしょ。そう思わない?」

一人の女の子が隣の子に話しかけた。彼女の声に他の女の子も奏の顔色を窺うように顔を近づけた。

「本当だ、ちよつと元気なさそう」

「うん、私もそう思う」

騒ぎ始める彼女たちを見る事もなく、奏は一言だけ告げる。

「大丈夫、疲れてないから」

「だめ、病院いかなきや」

「そうだよ」

「何か嫌なことあつたなら言つて」

真つすぐな瞳に囲まれて驚いていると、ちょうどいいタイミングで始業のチャイムがなつた。名残惜しそうに、それぞれの席に戻つていく女の子たち。あそこまで心配されると本当に自分は疲れているのかもしれないと思つた。そして考え込んだ末に、一つ思い至った原因があつた。

「家族が増えて賑やかになつたから」

誰に聞かせるでもなく、小さな頬笑みと共に奏は静かに呟いた。

呆然と教卓に座り生徒たちの様子を見守っていた真田は、ふと奏の姿に目を止めた。口数は少ないが眞面目な生徒。委員長より委員長のような影の人気者。それが彼女の奏に対する評価だ。

「では私は何なのだろうか。」

他人のことを考えていると、妙に真田は自身の存在意義に疑問を持ち始めた。彼女は人間ではない。ましてや外見は二十代後半に見えるが、彼女が製造されたのはつい数年前のことだ。彼女の知識は研究所で二十代女性の平均的な考え方を埋め込まれたので備わっているだけである。

研究所の制約を解かれたのち、彼女は自由の身になつた。そして彼女は初めて悩みをもつた。自分はどう生きるべきか。悩んだ末の結果がこの教師という道だ。国籍を取るのも、試験を突破することも簡単だった。しかし彼女は時々思う。

—私がここで教師をしていることは、私の意志ではなく研究所の意志ではないのだろうか

「……いけない、いけない」

彼女は慌てて首を振つて否定する。人間ではないとしても、彼女は只の平凡な新人教師。更に彼女は他人と比べ圧倒的に人間としての経験が少ない。他のクラスの先生に注意をされることが多く、疲れが溜まっているのだろう。真田は椅子にもたれて、そつと目を閉じ、子供たちの会話を聞き入つていた。

『家族が増えて賑やかになつたから』

—家族。

子供たちの会話の中でそんな言葉が聞こえた。

—家族？ 私にとつての家族とは何だろうか。

真田は記憶を辿るが、やはり彼女にとつて家族と呼ぶに値する人間はいないようだ。そもそも遺伝子単位から造られた彼女にとつて血縁などというものはない。
あえて言うなら同じ研究所で造られた存在を家族と呼ぶべきなのか。ふと真田は友人の顔を思い浮かべた。同じ研究所で造られた存在。彼女とは違い、小学生あるいは中学生くら

いの年齢に合わせて造られた少女。同居をしているわけではないが、よく会つて会話をする間柄。真田にとつてその少女は大切な存在だ。彼女は真田と違い、未だに研究所に所属している身であり先日も任務で深手を負つてしまつたらしい。

真田は彼女の身を案じることしかできない。ただ話を聞いて何も言わずに傍にいることしかできないのだ。一週間に一度か二度、学校もしくは真田の家や近所の公園。いつどこかも分からず、突然彼女は真田の前に現れる。

「ノエル」

真田は彼女の名前を呟き、少しの間昔を思い出していた。

初めて会つた日。

それは私たちが目覚めた日。

ノエルは生まれてからずっと私の傍にいた。同じ目的を持つて生まれた存在、すぐに私はちは仲良くなつた。今になつて思うと、もしかしたらあれは研究所によつて埋め込まれたシステムだつたのかもしれない。

私が初めて感情を自覚できたのは研究所を出た後だ。出たといつても、追い出されたのか抜け出したのか、はたまた捨てられたのか自分でもよくわからない。気がついたら、私は外にいた。ただ一人で。

ノエルは依然として研究所に残っていた。彼女は研究所に残つてることに對して何の不満もないようだつた。いや、あらかじめ研究所によつて思考が制限されているせいだらうか。私のように二十代以上に設定されていたなら、彼女にも次第に自我のようなものが生まれてくるのだろうか。そのような事が起きないよう、あえてノエルは十代前半に設定されたのかもしれない。もし彼女が私と同じ様に設定されていたのなら、三年前の事件の結果も何か変わつていたのだろうか。

真田は過去に思いを馳せたまま窓の外を見ていた。

「先生」

「……」

誰かが真田を呼んでいる。

「先生」

「……」

「真田先生」

「え？ どうしたの？ 九条さん」

「始業開始の鐘鳴りました」

真田は考え方をしていたせいで、奏の声も鐘の音も聞こえなかつたようだ。
「十分も過ぎています」

「どうしてもつと早く教えてくれなかつたの？」

すると奏は、淡々と真実を告げる。

「それを望む生徒がここにはいなからです」

「……それもそうね」

研究所に所属しているノエルは尖兵の一人だ。敵を探知するため作られた改造人間。今までもそしてこれからも彼女は研究所に従つていくのだろう。先日のハンス・ブリーゲルとの戦いで重傷を負つた彼女だが、改造人間である彼女の身体は人間のものと違い、傷が癒える速度も速い。おかげでノエルはすぐに任務に復帰できる状態に戻つた。しかしハンス・ブリーゲルの一件以来、彼女の上司は彼女に新たな任務を課さなかつた。待機状態。

それが現在、彼女が置かれている状況だ。

「どうせ私たちはただの捨て駒。」

ノエルは殺風景な自身の部屋を見回した。この部屋で何よりも目立つてゐる自身の服。派手な服だが、もちろんこれは彼女の趣向ではない。上からの支給物。ここにも彼女の意志は存在しないのだ。最低限の生活必需品が置かれた少し広めのワンルーム。彼女の部屋で

はあるが、全て研究所からのものだ。事実、扉の外、このビルは科学者たちが集まる、研究所の臨時本部が置かれている。

「そろそろ行くか」

ノエルは自身の部屋を出て会議室となつている五階を目指す。今日は新しく雇つた人間を迎えるらしく、挨拶も兼ねて彼女は上司に呼び出された。廊下を歩きながら、彼女は今日の予定を振り返り口元を緩める。

「よし、今日は真田ちゃんに会いにいこう。

通常、改造人間には思考・感情共に制限がかかつており、彼らは研究所の指示通りに動く。しかしノエルには思考の制限はあるものの、感情には制限がかけられていなかつた。彼女自身も疑問に思い、過去に上司に訊ねたことがある。

「どうして私の感情には制約がないのですか？」

すると上司は、考える間もなく淡々と答えた。

「その方が能率的だからだ」

それ以上彼女は問うことはなかつた。

「感情があつたとしても所詮は改造人間」

吐き捨てるよう言葉を零したまま、彼女は廊下を進む。

「協会、そして魔女との抗争が本格化すれば、私もいざれ死ぬだろうな

自身の運命は既に受け入れていいノエルだが、一つだけ心配事があつた。友人だ。研究所の一員だつたというだけで危険な状況に巻き込まれる可能性が高い。金色の魔女も注意だが、何より研究所に目をつけられると厄介になる、とノエルは予想している。人手不足に陥っている研究所が真田を見つけたとしたら、彼女は再び研究所に連れてこられる可能性が高いのだ。もちろんノエル自身としては歓迎する。しかし、真田はここに戻ることを望まないとノエルは知つている。

『思考』では、戻らない彼女が不思議でならないが、『感情』では戻らない彼女を受け入れている。

これがノエルの抱える悩みである。

魔法と科学により厳重なセキュリティをされているビル。ノエルはマスターキーを使って容易に会議室の前に辿りついた。中に入ると、そこは過度に広い空間。まだ誰も来ていないようだつたが、

「？」

突然、部屋の中から人の気配を感じた。

「誰だ」

敵意をむき出しにして、ノエルは部屋の奥を見つめる。

「この距離で分かるとは。素晴らしいです、彼が使っているだけありますね」

部屋の奥、外からの明かりが入らない奥まつた所から短髪の男が姿を現した。殺気が籠つた瞳に、ノエルは警戒を解かず相手を注視する。

「答える、お前は誰だ」

すると、男はまるで芝居でもするかのように大仰に手のひらを広げた。

「あまり緊張しなくていい、私は君の味方だ。ケラーの頼みでここまで來ただけだよ」

「味方……？」

確かにここは最前線であり、敵が単身で乗り込んでくる可能性は低い。しかしノエルはどうしても気を許すことはできなかつた。『どうやら味方の顔を忘れてしまつたようだな。まあ仕方ない、私も長い間ここを離れていたからな。私を知つているやつも滅多にいないか』一人で納得していた男は、唐突に顔を上げてノエルを見据えた。

「ところで君は何年目なの？」

「え」

はじめ、ノエルは彼が何の事を話しているのか分からなかつたが、すぐに彼女はその意図を理解した。彼は、『造られて何年間経つているのか』と聞いているのだ。

「……五年」

ノエルが答えると、男は大きな声で笑い始めた。

「五年。五年も前に造られたのか。すごいじゃないか。ここまで技術が発達しているとは思わなかつた。私が内部で研究している間に彼らは腕を上げたな」物珍しそうにノエルの身体を観察した後、男は彼女の身体をまるで機械を確認するかの様に触り始めた。

「触るな！」

ノエルは男の手を思い切り跳ね退けた。

「ほう、改造人間であるが感情に制限がないのか。あの男、私に狂つていると言つておきながら自身も充分狂つっているではないか。何故このように感情を残したのか、全く興味深い」

い

一人でぶつぶつと呟いていた男は、急に何かを閃いたかのように顔を上げた。

「そうか、我々が望む学問の行きつく先、そのためには積極的な姿勢と思考の柔軟性は重要だな。なるほど、そういうことか」

「おい、お前何なんだ？」

ノエルの怒号に、男はあつけらかんと正体を名乗つた。

「私が？ 私は只の研究員だ」

「研究員？ つまり人間か」

「いや、私は改造人間だ」

ノエルは男が何を言っているのか、今度こそ理解できなかつた。

「ああ。いいね。その表情、こんな風に誰かと話すのは久しぶりだ。面白い、とても面白い。しばらく君のような子供たちを見るのが楽しみだ」

「子供？ どういうことだ」

すると、男は先ほどまでの表情と一変し、まるで狂気に満ちた顔でノエルに笑いかけた。
「私は君など知つたことではない。金色の魔女も協会も私には一切関係がないんだ。私は私の目的のためだけにここに入る」

「ちよつと待て。私たちは君を再び覚醒させることが……」

「うるさい黙れ三」

男の声にノエルは一瞬息をのんだ。

「改造人間がベラベラと頭の中の言葉を口にだすな。研究所の最終目的は君などではない。だが議会の決定は絶対でね、私も自身の研究のためになかつたらこんな所までわざわざ出向かないさ」

「……」

ノエルは何も言えず、ただただ目の前の男の言葉を聞き入れていた。そして自身の胸に宿つている感情について、冷静に分析をしていく。

「この感情は何か。不快感。いやそんなものではない。もつと身体の奥まで囚われているこの感情は。」

「これが恐怖か」

男を睨んだまま、ノエルは小さく言葉を口にした。

「そういうえば、君の主人はこの状況を知らないんだって？ 楽しみだなあ、私はあの男が嫌いでね、後でこの事を知つて苦い顔をするのかと思うと楽しくて仕方がない。大体、何故エリをあそこまで欲するのかも分からぬ。あんなに大勢の人間を投入して……そこまで大事なものなのかな？」

笑っていたかと思えば、急に退屈そうな顔に戻り、急に怒り出す。情緒不安定な男を前にノエルの不安は一層増していく。

「私は私のやりたい様に行動する。私の目的は人体実験を通じて、巫女の信仰とetcの関係を明らかにすること。ただそれだけだ」

そして男は獲物を探すかのように窓の外に目をやる。

「まずはあの小学校だな」

男はどこからか巨大な荷物を取り出した。机の上に奇妙な薬品類を並べ、機械を設置し、文字が書かれたたくさんの紙を宙へとばらまいた。どうやら男の視界に既にノエルの存在は映つていないらしい。

「たしかこの近くに幼い巫女がいると聞いたことがあるな。その子供を探し出して、実験してみるか」

「おい」

椅子に座り、研究に没頭し始めた男の手をノエルは勢いよく掴んだ。その子供を彼女は知っている。そしてその子供の先生は彼女の大切な友人だ。

自身の腕が掴まれたことに気付いた男は、ゆっくりとその手の先へと視線を動かした。
「そういえば、研究所から逃げた女がこの地域で教師をしていると聞いたことがあるな」
ノエルの身体に悪寒が走る。

「……それがどうした」

「君、尖兵だからって油断していいのか？ 君の行動は全てこちらに把握されているんだよ。
君は大人しく見物だけしていくてくれ。観客の一人や二人ないと楽しさも減つてしまふか
らね」

男の言葉にノエルは何も言い返すことができなかつた。彼女の頬から冷や汗が落ちる。
次の瞬間、ノエルは無意識に声を出していた。

「だめ」

「はあ？」

男はまるで生ごみを見るかのようにノエルへと振り返つた。

「私たちの目的は君の覚醒であり、そのような実験が目的ではない」

「全ては真田ちゃんのため。友人の日常を壊したくはない。」

その一心でノエルは男を睨み返した。静寂の後、突然男は笑い始めた。初めは鼻で笑つて
いたが、それは徐々に大きくなつていく。部屋中に響き渡る笑い声。
しかし、男の目は一切笑つてなどいなかつた。

最期の授業が終わり、残すは帰りの挨拶だけ。子供たちが帰り支度をする中、奏は夕飯の献立を考えていた。以前に比べて食い扶持が増えた分、食材もすぐになくなってしまい、買い物に行く頻度も多くなっている。今日は鈴木も早く終わると知つてゐるため、奏はもしかしたら彼と一緒に買い物に行けるのではないかと少しだけ期待をしていた。みんなで夕食を食べて、ＴＶを見てゴロゴロする。これが奏が立てた今晚の予定であり、楽しみであつた。

そろそろホームルームのための鐘が鳴るはずである。帰り支度を終えた生徒たちが、自身的席へと戻り始める。

—あれ？

奏は妙な違和感を覚えた。

—何かがおかしい。静かすぎる。学校つてこんなに静かだつたつけ。

奏はよくわからない不安感を胸に抱え、辺りを見回す。

周りの生徒はいつも通りだつた。ほつと安心して奏も帰り支度を続ける。

キーンコーンカーンコーン

帰りの鐘が鳴った。日直が前に出ようとした次の瞬間。誰かが教室の中へ入ってきた。帽子を深く被っていて顔が見えないが、おそらくこの学校の者でないことは確かだ。担任である真田も上手く状況が掴めていないらしい。

「だ、誰ですか？」

彼女の言葉を無視したまま、正体不明の人物は笑つた。とても気味が悪い笑いだつた。
一しまつた。

奏が戦闘態勢を取る間もなく、彼女の意識はここで途絶えた。

再び奏が目を開けると、そこは学校ではなかつた。

周囲にはクラスメイトと真田がいる。奏は瞬時に自分たちは拉致されたのだと理解した。ひとまず何故拉致されたのかは考えず、脱出方法がないか探すことにした奏は自身の前で大きな窓を見つけた。地上からの距離を見る限り、ここから飛び降りることは不可能な高さである。冷静に脱出手段を考える奏。残る手段は外部との連絡だつた。気絶したままの

真田の身体を探り、携帯電話を取り出しが建物自体に何らかの細工がされているのか、通話もメールもできない。外部から遮断された空間。扉の前に残る血痕。机の上に転がる薬瓶。自身の息が荒くなり、鼓動が速くなつていくのを奏は感じた。その時だつた。

「う……」

奏の後ろで、うめき声と共に真田が目を覚ました。

「先生」

「……ここは？」

真田もここが学校でないと分かると、自分たちが何者かに連れ去られたのだと理解した。瞬間、ぱつと扉が開き、男が入つてきた。真田はすぐに奏を自身の後ろに追いやると、落ち着いた声で男に問いかけた。

「……私たちをどうするつもりですか？」

真田の質問に答えることなく、男は静かに笑つた。

「研究所所属、HG39291 真田か？」

その言葉に真田も奏も目を見開いた。

「研究所？ 先生が？」

奏は驚きを隠せず、真田と男を交互に見つめる。

「一度でも研究所に所属した身。やはり最後はここに帰つてくるものだな」
男は嬉しそうに笑いながら、帽子を脱いだ。

「え？」

奏は先ほど以上に心臓が波打つのを強く感じた。

「やあ、久しぶりだね」

彼の瞳に映つていたのは奏だった。

「頭の中で記憶が巻き戻されるような感覚。
あの顔、あの声。

「そう、私は知つていてる。」

「三年ぶりだね。私のこと覚えているかな、お嬢ちゃん。またよろしく頼むよ」

奏の中で何かの糸が切れる音がした。

次の瞬間。

「いやああああああああああああ」

狂気の笑みを向ける男に対し、少女の顔は恐怖に満ちていた。

「んー？」

執務室に響くうなだれた声。天城紫乃は朝から妙な不安感に襲われ、落ち着かずにはいらなかつた。氣のせいだと想い、仕事に戻ろうと思つてもそわそわして集中できない。そんな状態がずっと続いているのだ。

『災いというものは自身がそう思つている時に起きる』

その様なスタンスを取つてゐる天城としては、できるだけ悪い方向には考へないようにしてゐるつもりであつた。

しかし、何故か今日だけは違う。どうしても拭うことのできない不安感に天城は何か重大なことを忘れてゐるのかと何度も予定表を見直すが、何も書いてない。ましてや今日は休日のはずである。ここ数日間は幼稚園の短期休暇が入つており、園児はもちろんのこと先達も休みになつてゐる。

ふと、天城は気晴らしに数日前のことを思い返した。彼女の弟子、リニア・イベリンが食客としてここに暮らすことになつた際、他の先生達は突然現れた見ず知らずの外国人に対し、どのように接すればいいのか分からなかつた。

しかし彼女は持ち前の明るさですぐに他の先生達と打ち解け、子供たちとも一緒にになつて遊んでいたのだ。あの頑固で有名な佐藤先生でさえも、リニアの満面の笑みの前には歯が

立たなかつたようである。

さらに彼女は保護者からも好評価であり、リニアの西歐的な外見から、すぐに臨時のネイティブ・スピーカーの英語教師として受け入れられた。この様にしてこの幼稚園は数週間の内に国際色豊かな、私立幼稚園にも劣らない施設に変わつたのである。

「やっぱりリニアにも教員免許取らせて、ちゃんとした英語教師として売るべきか……」

いかにも本人が嫌がりそうなことを、天城は割と真剣に計画していた。全てはこの妙な悪寒から目をそむけるため。しかし彼女は同時に知つてゐる。自身の悪い予感は、よく当たるという事実を。

「そろそろ奏ちゃんが帰つてくる時間か」

壁にかけられた時計に目をやる。普段ならばもう帰つてもおかしくない時間だが、最近は買い物をして遅くなることが多い。何より彼女に関しては、連絡も無しに遊びに行くような子供ではない。このように考えて気を紛らわせるが、やはり先日の葵の言葉が天城の耳から離れなかつた。

天城はじつとしていられずパソコンをつけると、お気に入りに入っているショッピングサイトをクリックした。彼女の数少ない趣味の一つ。天城は気になつたものをいくつかカゴに入れて、一気に購入した。また余計な出費だと怒る奏の顔が目に浮かび、天城は苦笑いを浮かべる。

——奏ちゃん。

何故か今日に限つて彼女の顔が頭から離れないようだ。
次の瞬間。

ガチャリと扉が開いた。

「あれ、先生何してんの？」

扉を開けて入ってきたのはリニアだつた。

「また余計なもの買つて……奏に怒られるよ？」

「平気、平気」

天城のパソコンをのぞきこみ、呆れたように指摘するリニアの言葉を彼女は平然と受け流した。

「それより奏、まだ帰つてこないの？」

「さあ。その内帰つてくるでしょ」

「その内つて……保護者でしょ、先生」

「保護者だからつて子供の行動を全て把握しているわけではないでしょ」

「まあ、そうだけど」

じつとパソコンから目を逸らさない天城。そんな様子を見て、リニアは再び声をかけた。

「先生、何か気になることでもあるの？」

「いや。別にないけど」

「そう」

「……何故？」

「なんか不安そだなーって」

曖昧な返答をするリニアに対し、天城は素つ氣ない態度で言葉を返した。

「私が何を心配するっていうの」

「それもそだよね、先生に限つてないか」

弟子との他愛無い会話をしても不安感を拭いたかったが、天城はまたしても無意識の内に時計に目をやつてしまっていた。

「こんなにちは……って、二人とも何してるんだ？」

青年、時宮葵が幼稚園の扉を開けると、二人の女性がパソコンから顔を上げた。

「いや何も？」

「ただのお買い物よ」

「買い物……ねえ」

天城の言葉に葵も呆れた表情をする。普段の彼女を知っているが故の反応だろう。

「そういうや鈴木と奏は？」

上着を脱いで一息ついた葵は、世間話でもするかのように二人に問いかけた。

「まだ帰つて来てないよ」
「……帰つて来てない？」

特に気にする様子もなく答えるリニアだが、葵は妙な胸騒ぎを感じた。昨日の自身の言葉が頭の中によぎつたのだ。ちらりと天城の方を見ると、彼女の顔はどこか思いつめたような表情をしていた。

「先生」

彼の呼び掛けに天城は視線だけを寄せた。そして葵は一呼吸置くと、ゆっくりと疑念を口にする。

「鈴木はともかく、いくらなんでも遅くないか？」

天城は何も言わずにただ彼を見つめている。そんな彼女に気圧されながらも葵は続ける。
「……奏ならすぐに帰つてくるだろ。いつもなら買い物を済ませて夕飯を作つている頃だ」

鈴木ほど仲が良いわけではないが、彼も奏のことをそれなりに大事に思つてているのだ。葵の言葉に、ついリニアも顔をそむける。彼女も内心、落ち着いてはいなかつた。窓の外の景色は薄暗くなつて来ている。冬は陽が落ちるのが早い。

「本当に何も……」

「起きてない」

葵の言葉を書き消すかのように天城が答えた。あまりに早い返答に、リニアも困惑の表情を浮かべる。

「先生……？」

明らかに天城は動搖をしていた。しかし、葵も事件が起きているという確信があるわけではなかつた。

「一応、もう少ししたら警察に電話した方がいいと思うけど
「わかってる」

張り詰めた空気が緩みかけた、その時だつた。

机の上の電話がなつた。部屋中に無機質な音が響き渡る。通常、この時間帯に幼稚園にかける者は滅多にいない。更に今日は休園日であり仮に電話をしたとしても出られないことは父兄の方々にも伝えてある。また緊急の場合は天城の携帯に連絡するようによも伝えている一つまり、この電話にかけてくる者はいないはずである。

天城の顔に冷や汗が流れた。息を飲んで、彼女は受話器を手にした。

『……もしもし』

『……を打出さ職……ジジ…分…支持機…』

ノイズがひどくて、聞き取ることができないようだ。

「……何なんだ？」

彼女はしばらく受話器を耳にあてていたが、相変わらずノイズばかりで何も聞こえない。段々と悪戯電話に思えてきた彼女は、受話器を戻そうとしたが、

『よう、久しぶりだな。元気だつたか？ キルヘン』

楽しげな男の声が受話器から聞こえた。いや、今気にするべきはそこではない。声の主は、彼女、天城紫乃の本名を呼んだのだ。

「誰だ」

天城は鋭い声で電話の主に問いかける。すると、受話器から一層弾んだ声が響き渡つた。
『あれー？ わからないかな？ 私だよ、キルヘン。覚えてないのかい？ 残念だなあ。悲しいなあ』

「誰だと聞いている。答える」

ふざけた態度に天城も一層厳しい顔になる。

『……先生つ……』

奥で聞こえた微かな声。彼女の目が大きく見開いた。

そして――

『……先……生……先生……助け……』

受話器の奥から聞こえる声はどんどん大きくなつていった。やがてそれは、女の悲鳴や子供たちの悲鳴。更には、奇妙な機械音にガラスが割れる音までも重なり――、再び男の声に戻つた。

『おつと、ここまでだ。感動的な再開は後でするように。今はパーティータイムだからな――祭りだ、祭りだ』

「何が目的だ」

あくまで冷静な態度を貫こうとする天城だが、明らかに動揺を隠せずにいた。そんな彼女に対し、男の機嫌はひとりでに良くなつていく。
『目的？ 私は私の実験のためにここに来ただけだ。まあケラーに頼まれたつてのもあるけどな――とにかく俺は俺のやりたいことだけをやる』

まるで薬でも入っているかのようだ。男は語る。

『くくく……そしたら偶々見慣れた子供がいたんでな。しかも金色の魔女と一緒に暮らしてゐるらしいじやないか。面白い、これはまた大きな結果が出るに違いない』

「どこにいる」

『ああ、待つててよ。逃げたら会えないからね。それはそれで寂しいんだ。せつかく君の本拠地に来たんだ、もつと驚いてくれ。協会と君が一緒になつて戦う姿が私は見たい』

「どこにいるか答える」

『……もつと驚いて欲しいな。もつと私を楽しませてくれ』

天城の素つ気ない返事を噛みしめるかのように、男はひとり酔いしれる。

『これから二十四時間だ。私がどこにいるのか探し出してみる。大丈夫、簡単だ。捨て置いた改造人間を見つければ、すぐにわかる。それじゃあ、私は久しぶりに素敵な劇をやりたいから失礼するよ。ちなみに監督はもちろん私。最高傑作を約束しよう』

一 ブチツ

彼女の返答を聞くまでもなく、男は電話を切った。

静まり返つた室内。葵もリニアも彼女の顔色と電話口から聞こえる男の異常な声で状況を理解したようだ。天城は受話器を置いたまま、微動だにしなかつた。彼女の胸中には様々な想いが巡つてゐる。よりもよつて、奏を危険な目に合わせてしまつたのだ。

「悪い、遅くなつた」
俺が勢いよく扉を開けて入ると、職員室には目に見えるかのような程、重苦しい空気が漂つていた。いつもなら真っ先に飛びついてくるリニアも黙つて下を向いている。誰も言葉を発することなく、俺とも視線を合わせない。
「何やつてんだ、みんなして。新手の遊びか？」

「鈴木」

「悪いが俺はやらないぞ。奏と買い物に行こうと思つてるんだ」
「そうちやん」

「だから俺は参加しないって……それより奏はどこにいるんだ？」

職員室にはいないようだ。みんなここに集まつてゐるからいると思つたのに。

「奏ちゃんが誘拐されたわ」

奏の部屋に行こうとした瞬間、先生が俺の背中に声をかけた。
誘拐……？

俺は何も言わずに先生の方へ振り返つた。先生は指を組んで、真剣な表情で俺を見据えている。俺の反応を待つてゐるようだつた。
「おい、何の冗談だよ。よくわかんないけど俺を巻き込まないでくれ。もしかして奏を見つけ出せつて遊びか？」

自分でもわかる程、ぎこちない笑顔で俺は先生に訊ねるが、彼女は何も言つてくれない。

リニアも、葵も、依然として俺と目を合わせようとしなかった。

「何か……何か言えよ」

どうせまた三人で示し合わせて俺の反応で楽しんでいるんだろ。俺をからかうのが好きな先生に、リニアと葵が調子に乗って参加して……いつも通りだ。そうだ、こいつらみんな俺で遊んでいるに違いない。

「本当だよ」

やつと葵が声を発した。俺の目をまっすぐ見て。いや、それより。

「本当つて？ 何が本当なんだ？」

葵は再び黙り込んでしまった。

「おい、何が本当なんだ、リニア」

リニアは下を向いたまま何も言わない。仕方なく俺は先生の元まで戻った。すると、彼女はゆっくりと顔を上げて俺に告げた。

「あいつだ。また実験をするために此処に戻ってきたそうだ」

「あいつ……？ まさか」

脳内にある男の顔が浮かんだ。

「そう、あの狂人だ。二十四時間以内に来いと宣戦布告してきた」

彼女の口ぶりは冗談でも何でもない、真実を告げていた。

「……本当に誘拐されたのか」

「ええ」

「ちょっと、そうちやん、どいいの？」

俺の足は自然と扉の方を目指していた。居ても経つてもいられなかつたのだ。
「落ち着きなさい。何も手がかりがないまま、今出て行つても仕方ないわ」

「落ち着けだと? 何かわかるまで待つてろだと?」

「……今の俺に通じるわけないだろ?」

〔鈴木三〕

俺は壁を思いつきり殴ると、葵の制止する声も無視して幼稚園を後にした。じつとしている事なんてできなかつた。そして俺はふと、思う。いくら自分で過去を振り切つたとしても、過去は他人によつて再び張り付いてくるのだと。

本当にもう一、

「うんざりだ……」

人通りの少ない道をノエルは一人歩く。身体には大量の血の跡。本来、人間ならば氣絶していつもおかしくない量だが、さすが改造人間とも言うべきか。彼女は意識を保つたまま、

壁に身を預けながらこの道を歩いていた。

「う……かはつ三

口元を押さえる間もなく、血が飛び出た。せつかくの華やかな服は既に血だらけであり、所々穴も空いている状態だ。

「誰か……」

ノエルは行く当てもないまま、ただ歩き続ける。静まり返った道にぽつぽつと雨が降つてきた。血で汚れた彼女の顔を雨が洗い流していく。次第に雨足は強くなり、ついには本降りへとなつた。雨で視界が霞み、体力も奪われていく。

「ここは……」

見覚えのある公園だった。あのベンチは以前、ノエルが彼に会つた場所である。知らず知らずの内に彼女はこの場所に辿りついていた。そして何故かノエルはベンチの前で立ち止まつた。

「ここなら……何か……彼なら……」

その時だつた。誰かが走つてくる音をノエルは聞いた。

「待つて……」

思わず彼女も音のする方へ走り出そうとしたが、足元がふらついて倒れこんでしまつた。

「くつ……」

傷が開いたのか、再び強烈な痛みがノエルを襲つた。

足音が近づく。傘も持たず、男は雨の中を走つていた。目を凝らすと、それは彼女も見覚えのある顔。

「ああ、あの男は。

「まつて……」

雨音に消されてしまうほど、か細い声だつた。しかし男は立ち止まつた。そして、ノエルとは反対の方向へと走り出す。

「ねえ、まつて……こっちに……おねがい……」

「たすけて……」

もう顔を上げる気力もないのか、彼女は倒れこんだまま必死に願つた。雨が一層激しくなる。自身の体温が下がっていくのをノエルは感じた。

「さむい。さむいよ。だれか。

「おい、大丈夫かい？」

「……あたたかい。

ノエルが目を開けると、そこには先ほどの男の顔があつた。彼はノエルの身体を抱きかかえ、困惑した表情をしたまま彼女の顔を覗き込んでいた。

「どうか、この男はわたしにきづいてくれたのか。

「……て」

「え？」

「たす……けて……」

そして、血と涙と雨に濡れた少女の意識はついに途絶えた。

鈴木が勢いよく外に飛び出した後、部屋に残された三人は揃つてため息をついた。鈴木は三年前の記憶を思い出したに違いない。そう思つた彼らは、互いに顔色をうかがう。

「どうするんだ」

「探しに行く」

葵の顔を見ずに天城は答える。

「先生、まずは探索をしてみて。もしかしたら結界に引っかかるかもしれない」

「そうね」

リニアの提案を天城はすぐに実践した。事実、現在この三人の中でもリニアが一番冷静と言つてもいいだろう。彼女は状況を整理し、今後の計画だけに頭を働かせた。ここで落ち込むことも怒ることも無駄だということを彼女が一番よくわかっているのだ。

それは三年前の誘拐事件で奏を助けたのは他でもない彼女だからだ。あの時の経験が役に立つ、彼女はそう信じているからこそ落ち着いていられるのだ。

しかし、彼女の身体は素直だった。気付かないうちにリニアは手をきつく握り、怒りで震

えていたのだ。

「先生の探索が可能なら、その後動くことにしよう。二十四時間って言つていたから二十四時間以内は何も起きないだろう」

「いや」

葵の言葉を天城はすかさず否定した。

「奴の性格を忘れたのか？二十四時間以内にある程度終わらせて、ちょうど時間になつたらトドメを刺すに違いない」

再び沈黙が落ちる。葵もリニアも返す言葉が見つからなかつた。それはきっと、彼らが天城の言葉を否定も肯定も出来なかつたからである。

俺は雨の中を夢中で走つていた。車も人も通らない道を、行く当てもなく、手がかりすらもなく。

「くそつ……」

ハンス・ブリーゲルが来た時に、いや研究所の名前が出た時にもつと用心すべきだった。こんな事が起きるかもしれないってどこかで予想できたはずだ。

「俺がもつと……しつかりしていれば……」

「……て」

「なんだ？ 非常に小さかつたが、微かに人の声が聞こえた気がする。

俺は思わず立ち止まって辺りを見渡した。どうやら公園の方まで来ていたらしい。
「気のせいいか？」

公園には誰もいない。道にも誰もいない。俺が再び奏を探しに行こうとした瞬間。
「たすけて……！」

よく目を凝らして見ると、公園のベンチの下に血だらけの子供が倒れていた。

「おい、大丈夫か？」
急いで駆け寄り子供を抱き起こうとしたが、俺はその顔に見覚えがあつた。先日の少女。
俺たちに拳銃を向けてきた少女だった。

「……て」

「え？」

「たすけて……！」

そう言い残すと少女は氣絶した。

……助けてと言われても、こいはずリニアを殺そうとしたやつだ。今助けたとしても、再び彼女を狙う可能性もある。大体、敵に助けを乞うつてどういう神経しているんだ……。

「くそつ、俺の馬鹿野郎っ！」

気づくと俺は少女を背負い、来た道を引き返していた。

俺はずぶぬれのまま幼稚園に戻ってきた。部屋の中から三人の声が聞こえる。どうやら俺が出て行つたあと、先生が探索を始めたらしい。正直、今この部屋に入るのは足が重い。もちろん背中に背負つているもののせいもあるが。

一呼吸置き、俺は意を決して扉を開ける。三人の視線が一気に俺と、その後ろの少女に集まつた。

「誰？」

「そうちやん……その子」

葵とリニアの質問に答えず、俺は無言で部屋の奥に行くと布団の上に少女を寝かせた。

「おい、鈴木」

「仕方ないだろ。雨の中、血だらけで……必死な声で助けてくれなんて言われたら」

葵はリニアの反応を見て色々と察したのだろう。彼の表情は更に険しくなっていく。
「だからってどういうつもりだ。そいつは研究所の改造人間なんだろ？ 俺たちを油断させるための罠かもしれない。お前はもう少し、感情を抑えて理的な判断をしろ」

葵は俺の目を真っすぐと見ていた。だが、俺も言われたままで済まない。腹の中から何かが沸き上がりつてくるようだつた。

「じやあお前は、目の前で倒れている血だらけの少女を見捨てろって言いたいのか」

俺も葵を真っすぐと見返した。リニアは不安げに、先生は興味無さそうに俺たちを見ている。そして俺たちが互いを見つめたまま、数分程経った頃。

「くつ……ははは」

突然葵が笑いだした。

「は？」

俺とりニア、ついでに先生も、思わず葵に視線をやつた。

「いや、お前が俺の予想通りキレたのが面白くて。そうだよな、たとえ敵だろうが、誰かが目の前で倒れていたら助ける。お前はそういう奴だよ、鈴木。理性的に立ち回れないもんな」

「葵……よくこんな状況でふざけていられるな」

俺が呆れた顔で葵を責めると、彼は余裕の笑みで俺に笑いかけてきた。

「ふざけてなんかないさ。お前は最高の落し物を拾つてきてくれた」

「最高の落し物……？」

俺は布団に横たわっている少女に振り返った。

「ああ、これで奴の所へ辿りつけるかも知れない」

話を聞くためにはひとまず彼女の傷を直さなくてはいけない。俺が先生の方に向き直ると、彼女は早速何枚か文字が書かれている紙を少女の身体に投げつけた。

これは回復魔法だ。医学的知識を要する、魔法の中でも難しい部類のもの。先生が投げた紙はすぐに光を放ち始め、少女の顔色も徐々に良くなってきた。そして回復魔法の発動時間が終わり、少女の周りに紙束が落ちると、彼女はゆっくりと目を開けた。

「ここは……」

横になつたまま、辺りを見渡す少女。表情からは警戒の色が見える。

「ここは幼稚園だ。とりあえず落ち着いて。傷は大丈夫か？」

「……私をどうするつもりだ？」

少女は鋭い瞳で俺を見つめ返す。そこにはやはり敵意が宿っているようだ。

「君が俺の目の前で倒れていたから。君が泣きながら助けを求めるから。俺が君の手を取つただけだ。敵味方関係なく、俺はさ、目の前で弱つている人を見て見ぬ振りできない性格なんだよ」

俺がそつと、子供をあやす様に少女に笑いかけると、彼女は罰が悪そうに俺から目を反らした。

「……これが罠だと思わなかつたの？」

「罠だつたのか？」

「……」

「まあ、理由をつけるとしたら、今俺に危害を加えたらこちらのボスが黙つていない。わざわざ自殺行為をしに来るようなものだからな」

すると、少女は思いつめたような表情で黙ってしまった。しかしそんな様子に構うことなく、葵は淡々と事実を確認し始める。

「それでお前は何があつたんだ？」

「……」

「何で血だらけで倒れていた」

「……あんな奴が来るとは思わなかつた」

少女は手をきつく握りしめて、ぽつぽつと話し出した。

「部長が新しい人間が来るつていうから……挨拶も兼ねてビルに呼び出されて……でもあの男はすぐに自分の実験がどうのこうのつて。BBSなど私には関係ないつて。それで……近くの小学校で実験するとか言い出して。すごい、すごい怖かつた。そこには私の友人がいるから。きっと、あの男……人体実験をするつもりだ……」

少女の肩が小刻みに震え出し、怯えているのがわかつた。そんな少女の肩に手を置き、何か声をかけようと思ったが、俺は何と言えばいいのか全くわからなかつた。呆然としてただ少女の肩に手を置いていると、最後にと葵が少女の前で問い合わせた。

「そのビルは……お前たちのアジトはどこにある」

一瞬びくりと反応し、顔を上げた少女だつたが、すぐに視線を落とし唇を噛みしめた。俺たちに明かそつか躊躇つているのか、少女はこの部屋にいる人間を一人一人注意深く観察していた。

「やつぱり無理か」

つい俺は口に出してしまつた。

すると、少女はすかさず物凄い勢いで首を横に振り始めた。

「違う＝ そうじやない＝ ただ……私は思考が制限されているから、自由に行動できないの」

再び少女の目から涙が零れていく。

「でも……助けて＝ 私の友達が……私の大事な友達が捕まつたの」

居場所は言えないけど助けてほしい……か。

「先生、なんとかできないのか？」

助けを求めて先生に振り返ると、彼女は大したことなさそうな顔で答えてくれた。

「考え方の制約でしょ？ ジヤあ壊せばいいぢやない」

「いや、そんな簡単そうに言うけど、どうやつて」

「大丈夫、大丈夫」

そういうと先生は横になつたままの少女の隣に座り、少女の身体の至るところに文字を書き始めた。そして何か呪文を呴き、最後に『おしまい』と少女の身体に書くと先生は大きく伸びをした。

「先生、終わつたのか？」

「ああ、字が消えてないから、もう考え方の制約つてのはないよ」

先生の治療に呆気に取られていた少女は、いざとばかりに腕を大きく回して、自身の身体の状態を調べた。そして、

「都市の北部郊外にある六階建てのビル」

先ほどまでの固さはどこにいったのか、少女はスラスラと敵のアジトを述べてくれた。彼

女自身も驚きの顔を浮かべている。俺たちは揃つて頷き合うと、すぐに戦闘の準備を開始した。

「待つてニ 本当に行くつもりなの？相手は研究員。普通の人間や魔法使いとは次元が違う。改造人間の私でさえ歯が立たなかつたのに」

きつと彼女自身の経験談によるアドバイスだつたのだろう、彼女の身体はまた小さく震えていた。

「俺たちは行くよ、行くしかないんだ」

「以前に逃した奴だしな。それに俺たちはそういう奴らと戦つてきた。危険でも何でもない俺の返事に被せるよう、葵もどうと言うこと無さそうに答えた。先生は黙々と準備を続けているし、リニアは……彼女は深刻そうな顔をしていた。

「敵の危険度はともかく。この二十四時間以内に奏たちに危害が加えられないといんだけど。奴の性格を考えると……」

リニアの言葉を誰も否定することはなかつた。頭の中を奏の顔が横切る。

「先生、あの装備も俺にくれ」

すると、すぐに先生は棚の中から重たい鞄を取り出した。山岳用の鞄だが、この中には様々な装備が入つてているのだ。

一方の葵の準備は簡単そうで、中身の確認だけを行つていた。リニアは体中に装備を付け、まさしく戦闘に赴く格好だ。俺も体中に装備をつける。防弾チョッキの上に大量の紙束と

筆記用具、先日も使用したナイフとピアノ線、そして連射可能なボウガンに麻酔銃。以前のままだから油も取れてない。一応肉弾戦にも耐えられるよう、身体の隅々にまで装備を怠らない。

ただ、俺は他の奴らより応用力もない。肉弾戦に優れているわけでもない。あくまでサポート一塔一だ。サポート一塔として行動する。訳もなく戦闘に買つて出ても邪魔なだけだ。だからこれだけの装備をしても、これは全てサポート用なのだ。ボウガンは殺傷用ではなく、バフの役割をする紙をつけて壁や床に撃つため。腰にあるナイフも基本は先日のような使い方をするためだ。

久しぶりの重装備に身体がまだ感覚を取り戻していない。このような格好を再びするとは思つていなかつた。

三年ぶりだ。久しぶりにみんなで動く。まあ何人かはいないが。

俺は無意識の内にため息をついた。窓が空いているせいか、何故か鳥肌が立つてきた。

——俺は緊張をしているのか。

二十四時間経つまでに……一刻も早く奏の元に行かなくては。俺はぐつと拳をきつく握りしめた。これが俺の覚悟の証だ。

——さあ、再びの非日常へ。

「行こう」

みんなの視線が絡み合う。

その時だった。ふと葵が静かに口を開いた。

「先生はここに残つていてくれ」

「何故?」

彼は先生を見たまま、いつものように軽い声で答えた。

「その子供の面倒見なくちや」

ちらりと少女の方を見ると、彼女は不満げな顔で葵から視線を反らしていた。

「それもそうね」

あつさりと了承する先生。その返事に思わずリニアも驚いているようだ。

「え、ちょ……先生、行かないの?」

「だつてこの子を置いていけないじやない」

リニアは何か言いたげだつたが、その言葉を飲み込んだようだつた。すると、そんな会話を聞いていた少女は伏せ目がちな目で呴いた。

「私のことは気にしないで……」

「何もせずに大人しく待つていいるか?」

少女の言葉にすかさず葵が質問する。確かに俺も彼女が葵の言うとおりにするとは思えなかつた。

「けれど……お願い。私にだつて大切な人がいる。私も失いたくない……」
少女の目は真剣に葵を見据えていた。

「……はあ」

彼女に何も返すことなく、ただため息をひとつ洩らした葵は俺の方へと振り返った。
「お前が連れて来ただから、責任とれよ」
そして不貞腐れたような顔をして、葵はリニアを連れて外に出た。

部屋には俺と先生、少女の三人だけが残つた。少女はじつと俺の顔を見ていて。あまりの視線に耐えられず、俺は隣の先生を見た。

「責任ついても……どうすればいいんだよ」

「あなたの好きなようにしなさい」

面倒くさそうな顔で、先生は突き放すように答えた。それを聞いてか、少女は一步前に出て俺へと顔を近づける。

「足は引つ張らない。私は改造人間だから人間と比べて頑丈。研究所の内部も知つていて。少女は瞳に涙を浮かべながら、必死に自分をアピールしてきました。

「……」

「お願ひします」

「……」

「私を連れていって」

「……」

「お願ひ三
「……はあ」

駄目だ、俺の負けだ。ここまで必死な子を無視することは俺にはできなかつた。

「危険になつたらすぐに逃げるよ」

「ぱつと明かりが灯つたかのようには、少女の顔色が良くなつていく気がした。

「わかつた……ありがとう」

少女を連れて、俺も外へ向かう。

「ちよつと待ちなさい」

椅子に座つたままの先生が俺たちの背中に声をかけた。何故か厳しい顔をしている。

「……なんだよ、先生」

「言いたいことがあるわ」

「なんだ？ やっぱりこの子が行くのは反対なのか？」

いつになく真剣な顔をする先生に俺は少し気圧されていた。

「……悪いが、もう決めたことだ。俺は好きなようにしただけ」

言い終わる前に何かが俺の上に被せられた。

「布？」

手に取つてみると、それは派手な色をした服だつた。

「そんな格好で敵陣乗り込んでも興覚めよ」

言われて俺は少女を見た。

「あ」

彼女は先ほどの治療の際、リニアが患者服に着替えさせたままだつたのだ。

鈴木と少女が出た後、最後の一人となつた天城紫乃は誰もいなくなつた職員室を眺めた。しばらくこの場所を眺めたまま物思いに耽つていた彼女は、ついに外出着に手を掛ける。普段着のジーンズではなく、非常にかつちりとしたスーツ。上から下まで真っ黒な服装に着替えた彼女は、やつと外へと向かつた。

「私も行くとするか」

そして彼女は扉に手を掛ける。彼女にとつて三年ぶりの『外出』だ。

『Mr.modification』と呼ばれる男は改造人間だが、その前に彼はひとりの研究員である。研究対象は巫俗の信仰に代表されるetc系列の魔法だ。彼にとつてingなどどうでもいい

ことである。彼は自身の研究のために様々な実験をしてきた。

改造人間を動員し、多くの人間を動員し、幾年の歳月を得て至つたのが、自身の研究に最も見合う存在は『子供』という事実だった。いや、事実と言うには些か確証はない。これは彼の迷信のようなものだつた。

このようにして研究を続けていた彼は、三年前ついに目的が達成すると思われた矢先、金色の魔女率いる集団に研究を阻止されたのだ。その悲劇から三年が経つた。再び彼はこの地にやつてきたのだ。それまで彼は研究所内部で行き過ぎた危険思考を持つてゐるとして実質幽閉状態だつたが、自身を改造人間にしてくれた同僚、ケラーから研究所が『君のため再侵攻する』という情報を得た。彼の助け舟のおかげで、男は再び外に出ることができたのだ。

外の景色を眺めていた男は、ふとガラスに映つた自身の姿を凝視した。ヘラヘラと気味の悪い顔が映つている。しかしそんな自分の姿が男は嫌ではなかつた。ふと、視界の端に目をやる。そこには自身の顔のほかに、この部屋の様子が映つていた。血まみれの扉に、部屋中に散らばつた紙切れ、謎の機械が妙な音を立てて動いていた。そして机の上には奇妙な薬剤と、先ほどまで男が使用していた電話がおかれている。その机の横にはたくさんの子供と体中から出血している一人の女性が倒れていた。彼女、真田は生徒たちを守ろうと必死に男へ立ち向かつていた。しかしくら改造人間で彼女、真田は生徒たちを守ろうと必死に男へ立ち向かつていた。しかしくら改造人間で体が丈夫といえども、彼女も生物。体に溜まつていく疲労感が彼女の動きを徐々に鈍くしていた。

「実に素敵な教師像だな」

「うつ……」

男は再び立ち上がるうとする真田の膝を蹴った。彼女の体は殆ど力が入っていなかつたのか、あつと言う間にバランスを崩して、前に倒れこんでしまつた。

「正直驚いたよ、研究所の制約を解かれた改造人間にここまで自我が形成されているとは。我々は本当に人間を作つた、そうだ、我々が作つていたのは兵器なんかではない。人間だつたよ」

そういうと男は彼女を押しのけて、奥の子供の元へ行こうとした。

「逃げなさい!」

真田は、一人意識を残して怯えている少女、奏に向かつて叫ぶ。そして彼女は最後まで男の足にしがみ付いて少女を守ろうとしたが、遂に男の拳銃により足を撃たれて気を失つてしまつた。

目の前で真田が倒れても、奏はこの場から動くことはできなかつた。

彼女はずつと思つていた。

「なぜ今自分がこのようなどころにいるのか。二度と目にすることのないと思つていた男が自身の目の前に立つてゐる。あの男は、お母様もお父様もみんな殺した男だ。何で? 何でここにいるの? 先生もリニアも聰太もみんなもうこんな事は起きないつて言つたのに。」

「一どうして? 何で?」

奏は声を上げずにはいられなかつた。誰も答えをくれない。ただその声に反応するよう男の口角が更に上がつた。

「さあ、前みたいに楽しく遊ぼう。あの時はまだ遊び足りなかつただろ？これを腕と足につけて横になつていいだけでいいんだ。痛みは気にしなくていい、殺しはしないよ。君は死んではいけないんだ、私の研究のために。そう、君は最後まで私と一緒にいなければいけない。私と一緒に研究し続けなければいけない」

そしてまた一步、男は奏に近づく。

「い……いやだ……お母様」

「大丈夫だよ、怖くないから。楽しく遊ぼう」

奏は後ろに下がることもできず、ただ首を横に振り続けた。少女の瞳には涙が溜まつていく。

「さあ」

「お母様……こわいよ、お母様……」

「それはもう聞いたから飽きたよ。もつと他にないか？三年ぶりに帰つてきたのに……そんなでは駄目だ。もつと大きな反応をしてくれ、そうじやないとより大きなetcの能力が発揮されないだろう」

勝手に文句を垂れた男は奏の体を掴みあげると、慣れた手つきで彼女の手と足に装置を取

り付けた。

「本当に私は今も昔も運がいいな。ちょうど巫女の子供が必要な時に手に入るなんて
もはや奏は抵抗すら出来なかつた。ご機嫌な様子で男は準備を続ける。
『残りの子供はどうしようか……前みたいに生贊にでもするか』

そして男は、まるで無邪気な子供のように部屋中に紙束を散らしていく。

「さあ、楽しい楽しい劇の始まりだつ!」

以前、自身の父親であり師でもあるハンス・ブリーゲルに言われたことがある。
『ムードメーカーは何が起こつても冷静でいなければいけない』

これは、雰囲気を作る人間ならば、最も状況に適した態度を取つていなければいけないと
いうことだろう。天性のムードメーカーと自負している自分にとつて根幹にもあたる言葉
だ。三年前の誘拐事件でも同じ信念をもつて動いた。そして結果的に奏を救出することが
できた。

——今度こそ倒してやる……!——

私はきつくなを握りしめて、幼稚園を後にした。

体が重い。完全武装して歩いている中、ずつとこの言葉が頭の中をぐるぐるしている。よくも以前の俺はこんな重たい装備に体がついていったもんだ。

俺たちはリニアを先頭に黙々とアジトへの道を行く。雑談もない。本当に昔に戻ってきた気分だ。

「そういえば」

ふと、俺の後ろを歩いていた葵が口を開いた。

「君の背後にはいるのは誰だ」

少女の顔を見ることなく葵は淡々と尋ねる。

「それは言えない」

「おい、俺たちは協力しているんだ」

「アジトは教えた。私も友人が捕まつてなければ、あなたたちに協力してない」

「つまり、友人が捕まつていなければお前らは一生アジトがわからなかつたんだぞつてことか。可愛くない子供だ」

ただでさえ張り詰めた空氣だというのに、葵と少女に挟まれている俺は余計に気が滅入る。リニアは何も言わない。先生は行かなきや行けない所があるらしく、俺たちとは別行動だ。

仕方なく俺が仲裁に入ろうと思つた瞬間、

「……今回のことにはありがとう」

少女がぽつりと零した。

「ありがたく思つていいけど……本当に話すことはできない。この協力関係が終わつたら、

私は再び研究所に戻るつもりだ」

神妙な顔の少女にかまわず、葵は平然と言葉を返した。

「こんな裏切り行為みたいなことして研究所に帰つたら、どんな仕打ちが待つているだろ
うな」

「……けど、私にはそこしか帰る場所がない」

消え入るように答えた少女に葵はもう何も言わなかつた。

「あのさ」

重たい空氣に耐えられず、ついに俺は口をはさんでしまつた。

「なに」

特に質問もなく声をかけてしまつた手前、何を言えばいいんだ：

「あ、えつと……名前はなんていうんだ？」

すると彼女は驚いた表情をしたまま、しばらく顔を伏せていた。
うん……まあ、これも禁止事項だろうな。

「ノエル」

「え？」

「私の名前は、ノエル」

様々な機械を動かしながら男は鼻歌を歌っていた。目の前で少女が苦しんでいようと関係ない。むしろ楽しげな様子で彼は記録を取り続けている。大切な研究のためだ。

男が奥の機械を動かそうと思つた瞬間、机の上の電話が鳴った。

「はいはい、もしもし」

上機嫌な声で男は受話器を手にした。

『Mr. Modification か？ 私だよ、久しぶりだね』

声の主はノエルの上司、部長と呼ばれている男だつた。

「これはこれは、誰かと思ひきや私の尊敬致します旦那様ではございませんか：いかがなさいましたか？」

芝居がかつた受け答えをすると、電話の男は豪快に噴きだした。

『いや、色々と気になつてな。君は夢中になると周りが見えなくなるから、何か事を起こす前に連絡してくれつてケラーから一言預かつてきたんだ』

「ああ、なるほど。確かに私はingなど気にせず自身の研究に没頭していますよ。あんなもの議会の人間が欲しがつてゐるだけだ。あなたもそこまで欲しいとは思つていないのでしょう？あなたの目的は金色の魔女のはず」

『さあ、どうでしょう』

電話の男は適当にはぐらかすが、彼にとつてはどうでもいいことのようだ。男はすぐに自身のことを話し始めた。

「この場所に来た瞬間、すぐに思い出した。ここは以前の場所だとね。すぐに私は行動を開始しましたよ、一クラス分の子供を連れてきたら、なんと運のいいこと目標物がそこに混じっていたのです」

『目標物?』

「ええ、目標物です! 以前私が研究していた巫女の信仰と etc の作用。その時の子供がなんと! そこに混じっていたのです! ああ、これは運命なのだと意思いました。神は私に実験をしろと言っているようにしか思えなかつた」

男は一人で熱く語つた後、ふと思い出したかのように続けた。

「そうだ、そういうえばあなたの部下、尖兵の。必死に私の邪魔ばかりするので勝手に処理しどきました。まああなたには取るに足りないことでしようけど」

『ノエルが拒否をしたのか』

「ええ、あ、そういうればあなたの勝手に感情制限を解いたようでしたけど、あれは不法では? それと改造人間をもう一人手に入れたら、研究所の方に後で送りますね。人手不足なんでしょう?」

一方的に話す男はやつと口を閉じた。電話の男は少し考えるような間を開けると彼にゆつくりと訊ねた。

『一つ聞きたいんだが、その混じっていた子供というのは以前私が狙っていた巫女の子供

か?』

『そう、その子供です。まさかまた会えるとは思わなかつた』
再び興奮した様子で話しだす男を電話の男は一蹴した。

『馬鹿野郎』

『え?』

電話口から聞こえてくる冷たい声に、彼もびくりと眉を上げた。

『お前は失敗した。もう二度と会うことはないな』

『どういうことだ』

『健闘は祈つている』

そして電話は切れた。

突然の出来事に男の思考は追いつかなかつた。やがて唇をきつく噛み絞めると、男は物凄い勢いで受話器を投げ捨てた。

『ふさげるな! 何が失敗だ、あの野郎!』

少女の方へと向き直る。彼女はもう悲鳴を上げる力もなく、ぼんやりとした目で虚空を見つめていた。涙の跡も乾いている。彼女の身体は、気絶する寸前で機械が調節をされていくため、意識を失うことすら許されないままだ。

そんな少女の様子に満足したのか、男の顔はすぐに狂氣の笑顔へと変わった。
『まだ終わらない、私の劇はまだ終わらない!』

ついに到着した。

どこか不穏な空気が漂うビル、外壁を見るからにとても頑丈そうな造りをしている。そして入口はたつたひとつ。典型的なビルの扉だ。一階はロビーのようで、エレベーターや階段以外には何も置いていないとノエルは言っていた。

「さてと」

先頭を歩いていたリニアが腕を組む。

「どうやつて入るのだな」

葵の言葉に彼女も頷く。それが一番の問題だった。堂々と窓を突き破つていくわけにもいかず、文字を書いて強制的に開けるとしても罠が敷いてあるかもしれない。何より警報センサーにでも引っ掛けられ厄介なことになる。

「ここは派手に正面突破ね」

「いや、それはちょっと待て」

すぐにでも飛びだそうとするリニアを抑え、俺はノエルへと振り返った。

「入口つてここしかないのか？」

「え、うん」

ノエルは一瞬驚いたが、すぐに答えてくれた。そして懐から何かを取り出す。

「これ」

「……もしかして、カードキーか？」

「うん」

俺たちが頭を悩ます必要なんてなかつたのだ。

「ここは五階建ての建物。きっとあいつは五階にいる」

「別の階にはなにがあるんだ？」

「知らない。私はいつもエレベーターを使って一気に上がるから。きっと何らかのセキュリティがされているのかも知れない」

しばらく扉の前で作業をしていたノエルが俺たちに振り返つた。どうやら中へ入る準備が整つたらしい。

「パーティーは四人、塔のてっぺんには魔王と囚われのお姫様……私の職業は何かしら？」
RPG風な答えを求めているのか、こいつは。

「お前は武闘家だろ」

「……」

与えられた職業が気に入らないのか、リニアは怪訝な顔を浮かべる。

「鈴木」

彼女に何かフォローを入れようと思つた瞬間、葵が俺の腕を掴んだ。

「ど、どうした？」

「話がある」

「こんな時になんだ？」

ノエルのおかげで簡単に侵入できた俺たちは早速周囲を見渡した。人気もなく、辺りは真っ暗だ。

「明るくするか」

俺は右腕に差していたペンを取り出し、床とそれぞれの靴に文字を書いた。すると、俺たちの周囲だけがほんのりと明るくなつた。

その時だつた。ぱつと中央に照明が集まつた。それはまるで演劇を見ているかのように。

「—— Ladies And Gentlemen!!」

奴がいた。三年前と変わらず、演劇の主人公のように誇張されたジエスチャーで笑い出す。

「やあ!! パーティーの始まりだ!!」

奴が両腕を大きく広げると、今度は歓声と音楽が流れ始めた。俺たちまで演劇俳優にでもなつた氣分だ。

「ははは!! 一人足りないがまあいい、始めようか。実況演劇を!!」

そしてスポットライトが消え、再び俺たちの周りだけ小さな明かりが照らしている状態に戻った。

「やつぱり幻か」

葵は下唇を噛みしめ、一気に警戒態勢へと入った。先ほどの歓声が聞こえる。

いや、これは歓声というには少し違う、うめき声の様なものが近づいてくるようだ。

相変わらず部屋の電気は付いておらず、俺たちの周囲にしか明るさはない。いつどこから何が飛び出すかもわからない状況で、俺たちは戦闘の準備をした。ふと、目の前の暗闇の中で何かが揺らいだ気がした。

「何だ……何かが飛んだ……」

「上だ!」

「くそつ!」

俺が叫ぶと、すぐに葵がそれに向かつて攻撃した。

葵の攻撃!、圧縮された空気の弾丸を受けたそれは、ごとく俺たちの足元に落ちてきた。

人だ。俺は慎重にその人間の顔を表に向けた。

「改造人間……」

ノエルが呟く。

そう、これはおそらく思考も感情も失い、生物としての存在価値も失つた改造人間。つまり失敗した改造人間たちだ。

「鈴木、お前も敵に集中しろ!」

俺たちが調べている間、ずっと葵はうめき声が聞こえる方に向かって空気弾を撃つていた。手で空気を掴み圧縮するのに一秒、発射するために一秒。照準を合わせる暇もなく撃ち続けていた。リニアも近づいてくる改造人間たちと肉弾戦を繰り広げている。

「数が多いな……」

葵の空気弾が当たつているはずだが、一向に暗闇から改造人間の姿が窺える。

—研究所の連中、いつのまにこんな大量に造つたんだ。

ふと、ノエルが俺の服の裾を引っ張つた。

「あの……私も何か……」

「今、武器も持つてないだろ。じつとしていてくれ」

正直この状況では邪魔だつた。自分の他に彼女の様子も見なければいけない。まあ、俺が断れなかつたのがいけないのだが。

ノエルを中心に、俺たちは互いに背中合わせの状態で円を作り、暗闇に目を光らせた。二人ともそれなりの戦闘経験があり、重装備の俺も充分持ちこたえられる。

しかし、相手は失敗作といえども改造人間。倒れても、倒れても敵は起き上がってくる。

「これどうするよ」

「結構ピンチだねー」

葵とリニアは軽くいうが、実際かなり厳しい状態だ。何より数が半端ない。

「なあ、リニア。体力まだあるか?」

「まだまだ有り余ってるけど?」

俺はつい口角が上がってしまう。

「じやあ肉弾戦でどれだけ倒せる?」

「どうだか。私、大勢との戦いには慣れてないから。もちろん、倒せることには倒せるだらうけど」

すっと俺は懐からナイフを取り出した。

「俺がサポートしてやる」

「じやあ私は、安心してサポートに集中してもらえるようにする」

そしてリニアと葵は俺たちの円から一步前に出た。

俺は手にしていたナイフを足元に刺す。事前に文字を刻んでおいた。

『半径十メートル以内の味方は反応速度が上がる』

纏まりのない文章だが、自分でもそれなりに考えた。少しでも効果が出てくれればいいのだが。

ナイフから徐々に青い光が漏れだしてきた。

「よし!」

顔を上げると、攻撃をしていた葵の右から黒い影の様なものが見えた。

「葵、右だ！」
通常なら避けることの難しいタイミングだったが、葵は俺の声に素早く反応した。そしてすぐに空気弾で応戦する。先ほどより動きが早くなっているようだ。

一方のリニアは完全に姿を捉えてから攻撃をしていた。闇雲に襲いかかってくる敵を右足でなぎ倒し、すかさず別の相手の懷に左ストレートを入れる。おそらく骨までいつているだろう。彼女は休むことなく戦い続ける。ただでさえ動きが早いリニアは、バフのおかげで更にスピードが上がっているようだ。

しかし、いくら攻撃を加えても、しばらく経つと敵は起き上がりてくる。

「くつ…このままじゃ」
いつまで経つても上に行けない……俺たちの最終目標は五階だ。こんな所で手間を取らてる暇はない＝

〔鈴木三〕

「え？」

葵の声に俺ははたと我に戻った。気付くと、俺の目の前で敵が大きく腕を振り上げていた。
「あ、やばっ。

と思つた瞬間、一瞬にして敵の姿が横に流れて行つた。葵の空氣弾だ。

「ぼうつとするなよ……危ねえな」

息を切らした葵がいた。少しでも遅れていたら、俺の身体が飛ばされていただろう。葵のおかげで命拾いしたようだ。

「ごめん、そうちやん! 大丈夫?」

「ああ、平気だ」

どうやらいくら反応速度を上げた二人でもこの数は捌き切れないようである。

俺も『止まれ』と書いた紙を投げつけるが、持つて三秒。その内ビリビリと音を立てて破けてしまう。ワイヤーを使つて敵の足を潰しても、奴らは這うようにして迫つてくる。

どうすればいいんだ。動きを止めても意味がない。ちらりと見ると、二人とも息が上がつて来ていた。

「だめだ、このままじや自滅する」

「先に行け!」

突然、部屋中に葵の声が響いた。

「ばつ……お前一人で相手できるわけないだろ!」

「上に上がる階段、どこだかわかるか?」

俺の声を無視して葵はノエルに問い合わせた。彼女はぎこちなく奥の方を指さす。

「あそこ……エレベーターの隣にあるはず」

「リニアニ二人をつれて行ってくれ?」

彼女は何も言わずに不安そうな顔で葵を見つめていた。

「リニアニ」

「……わかった」

リニアの瞳に決意が籠つた気がした。

そして、

「行くよ、そうちやん?」

「でも葵が……」

「奏が待ってる?」

俺はリニアに返す言葉が見つけられなかつた。

「鈴木、お姫様を救い出すのはお前の仕事だ」

葵の笑顔を見届けると、俺は彼に背を向けた。

「葵……早く来いよ?」

「すぐに行つてやる」

そして俺とノエルは、リニアを先頭に階段の方へと向かつた。邪魔をしてくる敵をリニアが倒しながら、俺たちは走り続ける。

階段までくると、俺は最後に後ろを振り返った。暗闇のせいで徐々に葵の姿が霞んでいく。

「畜生：こんな時だけ格好つけやがって」

三人が去つた後。ゾンビのような呻き声をあげる敵を前に、葵は大きく肩を回した。

「やれやれ：まさかこんな役回りになるなんてね」

そしてため息を零すと、彼は足を前後に開いて腰を据えた。

「さてと……やりますか」

葵は先ほど以上に空気を集め。

何回も何回も手で搔き集めるようにして——、葵は一気にそれを撃ち放つた。

一階から物凄い轟音が聞こえ、つい足を止めてしまつた。

「葵ちゃんなら大丈夫よ、そうちやん。何もなかつたような顔して帰つてくるつて

「別に心配してるわけじや……」

そう言うとりニアは小さく笑い、再び階段を登りはじめた。この螺旋形の階段は侵入者のためなのか、二階までだと言うのに異常に長かつた。

「ふう……やつと着いたか」

二階だ。一階と同じような造りになっていたが、ほんの少し明かりが灯っていた。そして奥には三階に続いているであろう階段が見える。

「……こは誰もいないのか」

「そうみたいね」

リニアは一步前に出て隅々にまで目をやり、何も異常がないとわかると安堵のため息をついた。

その瞬間。

一ボンツ

「え!? なにこれ!?

一ボンツ

人の声に反応しているのか、リニアが声を出した瞬間、彼女の目の前で爆発が起こった。小さいが明らかに致命傷を負う攻撃だ。

魔法を使つて姿を隠していたのか……

しかし、人の声に反応するのは厄介だ。呼吸の量によつては声と間違われる可能性もある。

何より意志疎通ができないとなると不便だ。そもそも爆発の原因が定かでない以上、下手に動けない。体温に反応するのか、それとも酸素量か……？

リニアも状況を理解しているのか、難しそうな顔で俺に頷き返した。このまま何もないわけにはいかない。上へ進む階段は見えているんだ。あそこにさえ辿りつければ……ふと、妙案が浮かんだ。ここから階段まではおよそ二十メートル位だ。俺は腰に下げていたワイヤーを取り出し、鎌に括りつけた。そして天井に向かつてボウガンで撃つてみる。爆発は起きなかつた。

やはりそうだ。相手は部屋の内部に神経を使つていて。内部と言うよりは床だらうか。初めに俺たちが会話をした時は爆発が起きなかつた。きつとあれは部屋の外部にいたからだ。リニアがため息をついた途端に爆発したのは、彼女が部屋に一步踏み入れていたからだろう。

俺は天井から垂れているワイヤーを引つ張つてみた。この頑丈さなら三人は大丈夫だらう。リニアたちも俺の意図を理解したのか、二人はすぐに俺の身体に掴まつた。

俺は勢いよく身体を反らして飛んだ。
そして、俺たちは階段になだれ込むように辿りついた。

—シユウン

ワイヤーを回収したその瞬間。

—ボンツー

「え？」

爆発が起こった。

幸いワイヤーが戻りかけていたため、傷はつかなかつたが爆発の条件が違つていたようだ。
「音に反応していたのか……」

俺は階段を登りながら、小さく結果を呟いた。

三階。二階の例もあるため、俺は初めに落ちていた石を部屋の中に投げ入れた。小さく音が響き渡るが爆発は起きないようだ。次にリニアが慎重に声を出す。それでも爆発は起きなかつた。

「ここは大丈夫そうね」

「そうだな」

三階の様子はこれまでと違っていた。いかにもビルらしい配置。小さな廊下と扉がある。

「本当にビルみたいだな」

「この建物は元々多用途に使われていた。けど、こんな設計になつてているなんて…」

ノエルは少々驚いた顔をしていたが、すぐに疲れた表情を見せた。

先ほどから何も言わず、黙つて後をついてきた彼女。事実、一番混乱しているのは彼女だろう。一応研究所側の人間でありながら、俺たちに協力をしている身だ。葵の言うとおり、この戦いが終わつてから何が待つているのか分からぬ。

「だめだ、今は戦いに集中しないと。」

俺は服の中を確認した。残っている紙は約三百枚。A4 の紙を適当に切つて書いてあるものだ。

「そうちやん」

「うわっ三」

進もうとした瞬間、前を歩いていたリニアが遮るように手を出した。

「な、何だよ」

リニアは何も答えず、ただ前を見据えている。奥に人影が一つ見えた。

「今度は私の番ね」

そう言うと、リニアは人影に向かつて一直線に飛び出した。

「馬鹿つ、無鉄砲すぎるだろ!」

リニアは懐から紙を取り出し、相手に向かつて勢いよく投げつけた。おそらく火と稻妻の紙だ。大きな爆発が起き、一瞬、三階が眩しくらいに明るくなつた。

女だ。人影の正体は女のようだつた。

火花が散つた後、俺は腰につけていたナイフに手をかけた。相手は中々の実力らしく、リニアと拮抗している。

「今サボートしてやるからな!」

俺はリニアの足元に向かつてナイフを投げる。ナイフから青色の光が漏れだし、彼女の足元に円が誕生した。どうやら敵は魔術師ではないらしい。相手は魔法を一切使用せず、あくまで肉弾戦のみで戦つていた。つまり敵は研究員ではなく改造人間か。

「そ……んな」

ふと隣を見ると、ノエルが目を見開いて固まつていた。

「どうかしたか?」

その時だつた。

リニアが間合いを取ろうと後退した瞬間、女は閃光弾を宙に放つた。

「くそ! 目が!」

急いでノエルを引き寄せ、目を覆うが間に合わなかつた。

「うつ」

リニアのうめき声が聞こえた——ということは、次の攻撃はこっちか

俺はコートから麻酔銃を取り出し、ぼやけた視界の中、女に照準を合わせる。案の定、俺の攻撃は外れた。代わりに女は拳銃をこちらへと向けてきた。正直、ノエルを抱えたまま避けられるかどうか自信はなかつた。だが、頭の中で判断する前一本能が危険を察知したのか、俺が思つていた以上の早さで左に避けることができた。

「大丈夫か?」

ノエルに問いかけるも、彼女は依然として唇を震わせて女を見ていた。

——こうなつたら俺が守るしかなさそうだな。

「おい! そこのナイフ、こっちにくれ」

そう言うと、リニアは素早くナイフに向かつて走り、俺の近くに投げた。その隙を狙つて

か、敵は彼女に向かつて大きく腕を振り上げた。

「よつと」

リニアは余裕の笑みと共にそれを片手で受け流す。そして彼女はその勢いのまま相手に向かつて回し蹴りを喰ました。すぐに後ろに身を引いたおかげで女は頬をかすつただけのようだ。

しかし、ここからリニアの攻撃が優勢になつていく。1、2、3とテンポよく小刻みに身

体を揺らし、彼女は敵に向かって拳を繰り出していた。相手も彼女の攻撃を躱しているが、徐々に動きが鈍くなっているようだ。

——今しかない！

俺は先ほどのナイフの上に違う文章を重ねた。既に一度使われたナイフでも、違う文章を書けばまた使えるようになるのだ。

「三十秒だけしか持たない！」あとはなんとかしてくれ三

俺はリニアの足元に向けて、再びナイフを投げた。

青い光が地面に漂う。

彼女の動きが早くなつた。相手もそれについていこうと必死のようだ。風を切るように繰り出されるリニアの蹴りを正確に躱していくが、やはり体力が落ちてきたのか、動きが鈍くなつてているように思つた。その時、敵が懐から何か光るものを取り出すのが見えた。女が取り出したのは俺と同じような短剣だつた。相手も魔法使いかと警戒した瞬間、女はそれを武器として使用してきた。

「うそでしょ！」

おそらくリニアも魔法を使用すると思っていたのだろう、反応が遅れてしまつた。

「リニア！」

彼女は俺に答えることはなかつた。

腹部から溢れ出る血を左手で押さえ、冷や汗を浮かべながら彼女は敵を見据えて笑つていた。

すぐに俺はボウガンを取り出し、サポートをしようと構えたが、

「だめ!」

ノエルが切迫した表情で目の前に立ちふさがつた。

「どいてくれ! 早くしないとリニアが!」

「さつきの拳銃……私のものだつた!」

「え?」

「あの敵はきつと……」

ノエルは女に向かつて大きな声で叫んだ。

「真田ちゃん! もうやめて!」

小さな身体を震わせて、ノエルは声を絞り出す。

「真田ちゃんは……もう研究所と関わりがないはずなのに。私が、戦闘要員が減つたら?」

「どういうことだ!」

「きつと戦闘用に再調整されたんだと思う……思考と感情、全てが制御されたんだ」

今にも泣き出しそうな顔でノエルは真田という女を見ていた。

「だから以前より強くなっているのね」

過去に彼女との戦闘経験があるのか、リニアは冗談を言うように笑つた。しかし、顔には焦りの色が見える。戦闘経験を積んでいるからこそ、相手の力量が多少なりともわかるの

だらう。

「先に行つて」

「え？」

「葵ちゃんが言つてたでしょ。お姫様を助け出るのはそうちやんの仕事つてね」

リニアは腹部を抱えたまま、俺に笑いかけた。

「そんな状態のお前を残していくわけないだろ」

俺は両手で紙を握りサボート体制をとつた。

「早く行つて!」

リニアの怒号が響き渡る。

「私なら平気。私はあの子みたいに勝手に死なないから。それより、このままだと…また大切な人を失うことになる」

「…ロミ」

つい口にしてしまつた。

すると彼女は恥ずかしそうな笑顔で俺に振り向く。

「懐かしい名前。覚えていてくれたんだ、ありがと」

そして彼女は厳しい顔に戻ると、再び戦闘態勢を取つた。

「ひとまずその、真田つて人を氣絶させる。先生の所に持つて行つたら何とかしてくれること思うし。この銀髪の魔法使い、リニア・イベリンがすぐに倒して後を追つかけるからね待つてて!」

堂々と大口を叩く彼女はもう俺に振り返らない。

信じている証拠か……全くどいつもこいつも、するい奴だ。

「今のお前の状態じや、チャンスは一度だけ。ここを突破するには俺がワイヤーで相手の動きを止めるから、手伝ってくれ」

〔了解三〕

一呼吸置くと、俺は前に飛び出た。同じタイミングで相手も襲いかかってくる。しかし、リニアが相手の進行方向に立ちふさがり動きを止めた。瞬間、俺は真田の手首にめがけてワイヤーを飛ばした。そしてきつく締めあげる。拳銃が彼女の掌から落ちた。俺はすかさずそれを拾い上げると、ノエルに向かつて投げる。上手いこと受けとめたノエルは、拳銃を見つめたまま動かなかつた。

〔ノエルニ 早くこつちに来い三〕

俺の声を無視したまま、彼女は顔を上げない。何かを考えているようだが、今は時間がない。リニアの牽制もそろそろ限界が近そうだつた。

〔ノエル三〕

顔を伏せていたノエルは意を決したように顔をあげた。

〔真田ちゃんは強いよ〕

〔あら、私だって強いけど〕

彼女の軽口にリニアは当然のように受け答える。良く見るとノエルの顔は自信に満ちてい

268.psd

るかのようだつた。

「一人じや大変そだから助けてあげる」

「さつきまで泣きべそ搔いていたお子ちやまが？」

「友達の面倒を見るのは当たり前」

「……それもそうね」

一瞬で結託をしたらしい。

「じゃあ、そういうことだから」

「お世話になりました」

状況がよく掴めないまま二人から別れの言葉を告げられてしまつた。正直、安堵したような氣もするが何もできない自分が悔しくもある。

「そうちやん、早く行きなさい」

リニアの声を背に、俺は階段に向かつて走り出した。

—あと二階。

四階には罠も敵もいなかつた。明かりも付いており、真つすぐ階段に向かつて歩くだけの

ようだが、着いた瞬間どこからか奴の声が聞こえてきた。

『すごい』本当にすごいよ』まるで映画でも見てる気分だつた。仲間を残して一人進む君の姿。これは録画でもしとけばよかつたな。勿体ない。君、本当に俳優を目指して見るのはどうだい？大スターになれると思うよ』

『うるさい』

『邪険にしないでくれよ。こういう演出も必要だろ？観客がいないとこちらのモチベーションも上がらないじゃないか。それに君も本当は嬉しいんだ。仲間たちが君のために犠牲になつていく様を見て君は』

『黙れ』

途中途中で戻がないか周囲を見回しながら、俺は四階を進んでいく。

『大丈夫、四階には何もないよ。君との対話を設けたかつたからね。君は案外せつかちな性格だから、五階に着いたら私に突進してくるだろ？だからこうやって』

『狂つてる』

奴は話を遮られたことが気に入らないのか、俺の言葉が気に入らないのか、少し間を開けると再び話しだした。

『ああ、そうさ。私は狂つてている。狂つてなければ、こんなことしないだろ。私はね、協会が大ッ嫌いなんだ。いつもコソコソとしていて。でも君たちは違う。奴らのように部屋に籠つているのとは正反対だ』君たちに悪戯をすると想像以上の反応をしてくれる』
『そう、それはまるで』

「五分だ」

『ん?』

俺はどこに向かつて言うのでもなく呟いた。

「五分だけ待つてろ」

五階の扉の前には血痕が滲んでいた。あまりの気持ち悪さに胃の中から何かが出そうだったが、辛うじて嘔吐を我慢して俺は扉を開けた。視界に飛び込んできたのは、奏だつた。変な機械に縛り付けられたまま彼女はそこにいた。そしてその隣には奴がいる。俺は奴の顔を見ると、また吐き気がしてきた。

「やあ、来てくれて嬉しいよ」

男は俺に笑いかけると、すぐに隣に目を移した。

「これなんだが：あまり反応見せなくてね。君が何か話しかけてみてくれないか？」
奏の顔は恐怖と涙を浮かべていた。意識は朦朧としているのだろう。俺が彼女に近づいても視線すら動かなかつた。

「ああ、大丈夫。この子は私にとつても大事だから」

「お前……それ以上、口動かしたら殺すぞ」

「本当なんだ？ その……良く言うじやないか、愛情は大きくなればなるほど愛憎に変わるもの。そういう感じだ」

俺はついに怒りを抑えきれず、彼に向かってボウガンを放つた。予想通り、男は避けるとまた俺に笑いかけてくる。仕方なく俺は奏に声をかけることにした。機械を外して彼女の身体を起こすが、顔色からしてだいぶ弱っているようだ。

「奏？」

「……」

「おい、しつかりしろ! 奏!」

「え……? あ……あ……」

「俺が誰だかわかるか!?

奏の目は焦点が合つておらず、ずっと虚空を見つめていた。

「……母さま」

「え?」

「お母様……助けてください、怖い。怖いです。誰もいない。お母様……友人もみんな死

んでいきます」

「奏? お前……まさか記憶が」

「嫌……もうこんなのは嫌だ」

「奏! しつかりしろ!」

「嫌だ! もうこんなのは嫌!」

奏は耳を塞ぎ、涙を流しながら頭を抱えていた。

何も認めない。全てを否定する。本当に彼女は嫌なんだ。

「……落ち着け」

「母様：助けて。誰も来ないの。父様も母様も、誰も、誰も来ない。こんなに痛いのに誰も助けてくれない」

奏は依然として肩を震わせて現実を拒否し続いている。

「泣かないで」

「嫌……こんなの嫌……」

「奏」

俺が奏の背中を擦つてゐる間、男はずつとニヤニヤとしながらこの状況を見守つていた。腸が煮えくり返るほど腹立たしい。今すぐにでも奴の顔面を殴りたい。

しかし、

「一生このままでいるのか？」

「助けて……母様……」

俺は目を閉じて、大きく息を吸い込んだ。

「奏……泣くな」

瞬間、奏の涙が止まり彼女は俺を見上げた。

「そうだ、これが現実だ。三年前もこんな風に拉致されて死ぬところだつた。お前の母さんと父さんはあの時からもういない。もう戻つてこない。これが現実だ。」

少女の瞳に光が宿つていくのを俺は感じた。

「奏、過去から逃げるな。囚われるな、受け入れる。大丈夫だ、俺が守つてやる。もう一度とこんな目には合わせない。約束する。だから奏、逃げるな」
俺は奏の震えを止めるかのように、強く、強く抱きしめた。

「ほら、みんなで夕飯食べに帰ろう」

「……聰太」

奏が俺の名前を呼んで、胸元をきつく握るのがわかつた。

「そう、それだけで充分だつた。

「よし、奏。奏は奏らしく行動すればいい。お前ならあんな奴、一瞬で倒せるぞ」

彼女は俺の胸元から剥がれると、じつと俺の顔を見つめてきた。
少し目元が赤いが、いつも通りの奏の顔だ。大丈夫だ、早く終わらせよう。このうんざりとした状況を。

「さあ……行くぞ」

「……うん三」

熱のこもつた声で奏が答えた。

俺は男へと向き直った。依然として彼は楽しそうな表情を浮かべている。

—正直、俺は子供だと誘拐だとか知ったことじやない。そんなの適当に誰かが解決してくれればいい。俺はただ、過去に縛られて情けない顔している奏が見てられないだけだ……

「おい、お前。パーティーだとか言つてたな? ああ、そうだ。パーティーだな。三年前のリベンジ祭りだ。あの時は曖昧な形になつたが、今回は綺麗さっぱり終わりにしようじやねえか?」

すると、男はそれに答えるように大きな声で笑い出した。

「いいね! パーティー! そう、パーティーだ! 私も中途半端は大嫌いだ。一緒に楽しもうじやないか!」

一さて、リベンジマッチといくか?

「一つ聞きたいことがあるんだが」

「何だ」

俺は奏を安全そうな奥にやると、男の目をまっすぐと見つめた。ここは敵のアジトの中心地。相手がいつ攻撃してくるかもわからない。最大限の警戒をして、俺は奴の言葉を待つた。

「君は以前、狂った生活は嫌だと言つていなかつたか？ 何で君は今ここにいる？」
「……」

男は攻撃もせず、俺の返事を黙つて待つてているようだ。おそらく今、奴は自身の陣地での状況を余裕で楽しんでいるのだろう。俺はいつでも戦闘に入れるよう、ボウガンに手を当てたまま、ゆっくりと口を開いた。

「俺も一つ聞きたい。正直、今のお前は不利な状況だ。お前の策は、俺がここに辿りついで以上全て失敗している。お前を倒せば俺たちの勝ちだ。だが俺がここに来るまでに時間はあつたはず。何でそこにいる子供たちに危害を加えていない？」

男は何も言わず俺をじっと見ていて。

「今のお前は何かおかしい。三年前なら、こんな芝居染みた劇なんてせず、とつととやることをやる奴だつた。あの時リニアにボコボコにされて、頭のネジでも飛んだのか？」

「リニア・イベリン……そうか、なるほど」

彼女の名前に反応した男は、小さく笑うと勢いよく後方に退いた。戦闘の開始だ。

奴は机の上にあつた大量の紙切れを宙に放つた。どうやら何も文字は書かれていないと

だの紙きれのようだ。

俺は邪魔くさい紙きれの隙間から、男に向けてボウガンを放つ。

「くそつ」

予想通り、俺の放つた矢は男の身体の横を通り抜けて行つた。すぐに俺は反対側に手を回し、麻酔銃を取り出す。しかし、男の方が早かつた。

奴は俺が後続打を撃つ前に、近くに置いていたガラス瓶を投げた。中には奇妙な色の液体が入つてゐる。俺が麻酔銃を撃つると、彼がガラス瓶に向けて紙を放つたのは同じタイミングだつた。銃弾は割れたガラス瓶から漏れた液体により、急速に勢いを失いその場で落とした。

だが、休む暇もなく戦闘は続く。

俺の攻撃が止むと、今度は男の方が先手をとつた。服の中から一丁の拳銃を取り出し、男は俺に向けて乱射し始めた。すぐに俺も防御へと移る。ペンを取り出し、床に文字を書きなぐる。

『ここには何も来ない』

奴の弾丸は勢いよく弧を描いて、俺から逸れて行つた。

—しまつた—後ろには奏たちが……—

すぐに俺は後ろを振り返つたが、どうやら弾丸は天井近くの方へといつたようだ。俺が安堵の息をつくと、男は一旦拳銃を収め、再び喋りはじめた。

「そう、三年だ。三年前から私の研究は一つに統一された」「研究所のメンバーじゃなかったら、お前は世界的有名人になっていたのにな。まあ極悪犯罪者としてだが」

男の独り言に付き合う気も失せ、俺は挑発をするが、奴は気にすることもなく続けた。
「君は魔法の起源が何か知っているか？ 何故我々は文字を用いた魔法を使うのか。何故我々は表音、表意文字を用いて魔法を具現化するのか」

一瞬だけ見せた男の姿は、まるである命題に囚われて苦悩する教授のようだつた。

「何故 etc というものが分類されているのか。何故金色の魔女は etc を認めないのか。知つているかい？ etc という名前はね、金色の魔女が魔法を大成してしばらく経つてから出来た名前なんだ。単に【その他】っていう意味でね。彼女は自分が確立したもの以外は魔法と認定しなかつたんだ!!」

「そんな講義、俺は興味ない。第一、お前は先生の何を知つているんだ…」

「そうだ、私はあの女ではない。だから私は etc を研究し続けている。etc のまだ見ぬ可能性を私は知りたい!!」

途端に男の顔に狂気が戻つた。

「etc とは一体何なのか？ 何故あの女は文字を使用する魔法だけを確立したんだ？ 学問と何だ!? 研究とは？ 何故あの女は etc を差別した!!」

奴は絶叫しながら拳銃を乱射し始めた。銃弾に何か薬品を混ぜているのか、落ちて行く薬莢が奇妙な音を立てて弾け飛ぶ。

「何故私はあの女じやないに何故、金色の魔女ではないんだ?」

俺は急いで防御に戻るため、文字を書き始めた。

「いいかげんにしろ!」

俺の声を無視したまま、男は癪癩を起こした子供のように近くにある薬品を投げた。すかさず俺も予め書き溜めておいた紙を取り出し、それに向かつて投げる。

大きな爆発音とガラスが割れる音が響く。

数歩後ろに抜けた俺は、その勢いのままボウガンに紙を貼りつけて男の方へ放った。直撃はしない。ただ爆発だけを起こし、徐々に奴の行動範囲を狭めていく作戦だ。

「今だ!」

爆発音と共に周囲の壁が揺れ、粉塵が立ちこむ。

俺の反応が遅れた。

奴は霞んだ視界の中いち早く動き、俺の背後へと迫っていた。

「くそつ!」

振り向き様に奴の拳が俺のみぞおちへと入り、続けて俺の身体を奴は足で蹴りあげた。

「うつ!」

思わず咳が零れる。

男は袖についた埃を叩くと不気味な笑みを浮かべて俺を見下ろしていた。

—何がおかしいんだ、この野郎=

俺は座り込んだ姿勢のまま、床にナイフを刺した。青い光が滲みだす。

久しぶりに自分にバフをかけた。身体の反応速度を上げ、相手から距離を取る。

バフの効果範囲は直径およそ十メートル。このビルの内部は直線距離で四十メートル超。俺はもう一度後方に下がりワイナーを引っ張った。ワイナーに巻かれていたナイフは再び俺の手元に戻り、すぐに俺は文字を書きなおした。そして同様に床に刺してバフをかける。これで合計二十メートル。行動範囲を増やした。

本来、魔法使いは遠距離より近距離の方が遙かに有利だ。理由は簡単。標的が近ければ近いほど命中率が上がるからだ。そのため彼らは拳銃や兵器を導入し、遠距離戦闘のための対策を重ねた。だが俺は接近戦には向いてない。できるだけ距離を稼がなければいけない。男も俺の行動を予測したのかすぐに接近を開始した。

—もう認めるか。確かに奴は俺より遙かに強いな。

俺は服の中からある物を取り出した。御幣だ。入口で葵に渡された物である。バフの力を借りた俺は、物凄い早さで奏の足元へ投げた。
「媒介体だ 文字も入つてる」

俺が言い終わるや否や、奏はすぐにそれを拾い上げた。奏も俺と同じサポートーだ。

だが俺の様に多くの道具と魔法を利用すると違ひ、彼女は何もいらない。etc の能力だ。巫女である奏は神技を起こせる存在である。

奏が御幣を受け取つたのと同じタイミングで、俺は奴に向かつてワイヤーを投げ、身体を縛り上げた。chaser の遺産。お前らが造つたあいつの遺産だ。

しかし、体中をワイヤーで縛られているはずの男は、なおも俺に接近してきた。そして奴は左手に持つていた薬品を宙に投げた。

「熱つ！」

酸性系の薬なのか、液体がかかつた部分の服は溶けていた。重装備でなかつたら大変な事になつていただろう。俺は更に後ろに下がり、文字を書きなおしてナイフを床に刺す。

そして足止めを食らつてゐる男に向け、今度はボウガンを飛ばした。

『止まれ』という紙をつけて。

やつと奴の動きが止まつたことを確認し、俺は奏へと振り返つた。

—始まる。

近年、etc に対する認識が変わつてきた頃。協会と研究所は巫女の【神があり】も一種のetc と分類した。彼らの神との遭遇、それに伴う神通力と予知能力等の研究は数多く行われた。しかし巫女自体の数が希少なため研究に進展は望めなかつた。

その巫女である奏。

彼女は美しい円を描き、優雅に踊る。俺たちには聞き取ることができない詠唱を唱えながら。

すると御幣が赤く光り出してきた。

この魔法により、俺の反応スピードは更に上がり、持続時間も長くなる。

「お前がどういう理由で研究を始めたのかは知らないが」

男は身体が止まつたまま、瞳だけをこちらに向けていた。

「奏は……巫女の力はお前ら etc 連中に比べて、そこまで大したものじやない。文章の力を増幅させる程度だ。けど、それはもしかしたら魔法使いには不可能なことかもしれないな。魔法は文章自体の効力が弱いから持続時間が短い。そう、一つの文章を書く時、始まりと終わりではインクの濃さが安定しないんだ。けど奏の神がかりはどんな文章だろうと持続時間を延ばせる」

「何が言いたい？」

男の顔には狂気が戻っていた。いや、この顔は今までとは違う。怒りを含んだ顔だ。

「奏の効果でお前はしばらく動けない」

俺はボウガンの照準を男の頭に合わせた。

「終わりだ、Mr.Modification」

「Mr.Modification……」

奴は静かに自身の名を呟いた。発音しにくい名前。変異を意味する名前。

すると突然、男は大きな声で笑い出した。と思いや、すぐに彼は笑いをやめた。
「……お前、本当に魔法が文字だけで構成されていると思つていてるのか？」

「どういうことだ」

「確かに俺はゲームオーバーかもしれない。では、ラスボスを倒した君に御褒美としてある事を教えてあげよう。『本当に文字だけで魔法が構成されているのか』。俺はずつと疑問に思つていた。もしかしたら金色の魔女は我々にとんでもない嘘をついているのではないかとね。不思議だと思わないか？ 魔法とは別に etc という能力があることを。だから研究所は etc を研究している」

男はぶつぶつと言葉を続ける。

「何故私が巫女に執着していたのか。それは先ほど君が言つた通りだ。巫女の神がかりは装備も文字も必要としない、純粹な現象維持能力。『文章自体を維持する能力』。なあ、君は何故魔女があの巫女を連れていると思う？」

「それは」

俺が続きを言う前に奴は口を開いた。

「答えは簡単だ。研究する価値があるからだ」 君には理解が及ばないかも知れないが、現象維持能力というのはとんでもない事だ。書いた文字を維持する。これは『文字を書く』という事自体を否定することと同じだと思わないか？ ただでさえ巫女が少ないというのに、幼い子供が etc を身につける。君はあるの子供の価値がわかつていらないんだ」

「男は呆れたようにため息を零すと、俺の顔を見つめたまま続ける。
「お前……鈴木聰太だつたか？ 君もいつかわかる。いや、気づく。何故いつもこんな事に

巻き込まれてしまうのか。君も知りたいと思つたことがあるだろう

「……」

「これだけは覚えておけ。金色の魔女は良い奴ではない。あの女は一つの都市、一つの村を無慈悲に焼き払うような魔女だ。協会があの魔女と手を組んだのも、勝ち目がないとわかっているからだ」

「……れ」

「君も利用されているだけだ。魔女の目的のためには。一人静かに暮らしていた君が、突然こんな事件に相次いで巻き込まれるわけないだろ?」

「……黙れ」

「君も僕もあの子供、みんな魔女の掌の上で踊らされているんだ。三年前の事件も全部、彼女は結末を知っていたんじゃないのか?」

「黙れ三

俺はついにボウガンの引き金を引いた。

しかし、いつのまにか目の前で捕えていたはずの男の姿がなかつた。

『予想通りだ。こんな策によくかかるね、やはり君は感情的な人間だ』
『どこからか奴の声が聞こえる。』

『果たして俺はどこにいるのだろうね』

姿が見えないまま、部屋中に男の笑い声が響いていた。

「先生、改造人間って何なの？それって人間じやないの？進化論とか創造論まで遡つて考
えるべきかな」

「人間つていうのは気付いたらそこにいたものよ。そしてその人間が、改造人間を作る
先生はとても簡単に返すが、私には理解し難かった。

「うーむ」

「大したことないわ、リニア。納得できないなら自分の考えを信じとけばいいんじやな
い？」

そう言つて先生は私に背を向けたけど、最後に付け加えるかのように話してくれた。

「もしかしたら思考と感情を制限されている改造人間は、我々より優れた存在なのかもし
れないわね。まあその分、長くは生きられないだらうけど」

「え？」

「理由は簡単よ。いくら耐久性のある身体でも酷使し続けたらやがては朽ちる。彼らは限
界を、自身を守る術を知らないまま、動かなくなるまで動き続けるのよ」

遠い昔。私が先生に魔法を習い始めた頃の記憶だ。

三階。リニアとノエル、そして真田が激戦を繰り広げている場所だ。

「これ……本当に内臓出てるんじやない？」

腹部から流れ出る血を押さえ、リニアは真田と相対する。彼女の身体もそろそろ限界が近づいていた。

「あの時はよく分からなかつたけど……こういうことか」

端的に実力だけではリニアの方が有利なはずだが、長期戦となると真田とりニアの実力は同等。いや、体力的に勝つていて改造成人間の方がリニアの何倍にも有利である。

「ねえ、そろそろ終わりにしない？」

リニアは真田に向かつて呼びかけた。しかし、彼女は眉一つ動かさず、戦闘態勢を続ける。

『ただ侵入者を排除する』

真田の頭の中に組み込まれていてる思考はこれだけのようだ。

「……やっぱり駄目か」

リニアはため息を零して別の作戦を立てることにした。総合的に見て、このままでは勝利が厳しいと彼女はわかつていて。かといって遠距離攻撃を仕掛けることにリニアは慣れていない。彼女の戦闘にはサポート一歩がかなり重要な役割を果たすのだ。後ろにいる仲間からの支援を受けて前に出る。これが彼女の戦闘スタイルだからだ。しかし、現在の状況ではかなり望みが薄い。後ろにいる少女がどのように役立つかもわからないのだ。

「倒すとは言つたけど……どうすればいいと思う？」

リニアが後ろに控えているノエルに振り返ると、彼女は拳銃を持ったままでつと考えてい

た。

友人の状況を。確実にこのまま戦闘が続ければ真田は死んでしまう。

——そんなことには絶対させない……!』

「まだ戦える?』

ノエルの言葉にリニアは思わずニヤついてしまった。
「お願いされたらできなくもないけど?』

おどけた調子で答える彼女に、ノエルもつい笑みが零れる。そして真剣な顔に戻ると、彼女は懐からいくつかの弾丸を取り出した。これは彼女の拳銃専用の弾丸だ。
「私が腕と足を狙つて動きを止める。あなたは注意を引きつけといて』

「了解つ』

リニアは一步前に出た。薄暗い明りの中、真田が足音も立てずに近づいてくる。どのタイミングで前に出てくるかも分からず、リニアは戦闘に集中した。

だが、それでも彼女は後ろの少女へと言わずにはいれなかつた。

「絶対に前には出ないで。ここであなたが死んだとしても、彼女は助からない。研究所の人間に用済みとして殺されるだけよ。そしてあなたに死なれたら私たちのパーティーも全滅。だから無駄死にはしないでよ?』

「そんなこと分かつてている』

「そう?』

少女と軽口を叩き合っていた瞬間、真田が勢いよく前に出てきた。すぐにリニアは頭を下げ、彼女の右手から繰り出されたナイフを避けた。鋭利な刃先が空気を切る。間髪入れることなく、再び刃先がリニアへと迫つた。後味の良い音が彼女の耳先に聞こえた。

「……つぶな=負傷したまま武器を持っている相手と素手で戦う時点で不利なのに、その相手が改造人間とか……冗談じやないわよ!」

リニアは腹部に手を当てながら真田の攻撃を躱す。

「あれ? 何か聞こえる。雨音?」

ふと、彼女の脳内に雨音が流れた。

もちろん戦闘中、しかも厚い壁に覆われたビルの中まで雨の音が聞こえるわけがない。

「あ、これ……私そろそろやばいかも。」

自身の限界を弁えている彼女は、早急に戦闘を終わらせなければならないと確信した。

今度はリニアが先手を取つた。震んできた視界の中、彼女は真田の右肩に向かつて勢いよく足を振り上げた。見事に骨まで命中した感触が伝わる。

しかし、彼女は肩の痛みなど気にする様子を微塵も見せず、すぐにリニアへとナイフを向けた。

「やばっ」

すかさず後方に抜けたりニア。致命傷にはならなかつたが、左腕を激痛が襲つた。生暖かい感触に彼女は悲鳴を上げたくなつたが、もうその体力もないのか、彼女は片膝をついたまま動くことができなかつた。

ナイフから大量の血を落としながら、真田がゆっくりとリニアに近づいてくる。

——駄目だ、このままじゃ全員死ぬ

リニアの瞳に再び闘志が宿つた。そんな彼女を真田は無機質な目で見降ろしている。そして、真田は跪いたりニアに向けて、ナイフを一直線に振りかざした。リニアは根性とでも言うべきか、途切れそうになる意識の中、全力で身体を壁に向かつて飛ばした。真田のナイフは何も捉えることはなかつた。

この時、リニアはふと、ある違和感を覚えた。

ナイフを振りかざす瞬間、腕を上げた瞬間、真田の腕の動きが僅かにぎこちなかつたのだ。この隙があつたからこそ、リニアは避けられたのだが。

「やつぱりさつきの蹴りで肩が潰れていくようね」

リニアは最後の戦略を立てた。

——関節を狙う。

真田が、ぐらりと首を回してリニアへ向かつて走り出した。

「少しさは、疲れてくれないかな?」

今度は左肩を狙うため、リニアは思いきり足に力を込める。

真田がナイフを振りおろすより早く、リニアの蹴りが真田の左肩へと入った。衝撃で彼女の手からナイフが零れ落ちる。すかさず右手でナイフを奪い取ろうと思つたりニアだつたが、

「うつ……あ……」

先ほどの鈴木の攻撃によつて血だらけになつた右手で、真田はリニアの左手をきつく掴んだ。

傷口には触れていないが、周辺を触るだけでも充分に激痛が走るほどの切り傷をリニアは負つている。ナイフより先に、彼女は真田の右手を振りほどこうと思つたが一、真田は見逃さなかつた。

そしてゆつくりと、真田が落としたナイフを手にした直後、リニアは二度目の蹴りを彼女の肩に叩きこんだ。

——ここで切られたら終わりだ――

突如、一発の銃声が鳴り響いた。

そして真田の身体が倒れる。

リニアの視界に映るのは拳銃を構えたノエルの姿だった。

「とりあえず片足……」

ノエルの弾丸には文字が刻まれている。それは相手がわずかでも触れれば反応する魔法。

彼女の弾丸に触れてしまつたものは、しばらく身体が動かなくなってしまうのだ。

危機一髪のところで仲間の援護射撃。思わずリニアの口角が上がる。

その時だつた。

ドンツツ二

「!?」

上の階からとてつもない爆発音が聞こえてきた。と思いきや、続けて二度目三度目の爆発音。その余波でほこりが舞い散り、視界は更に霞んだ。リニアは足を負傷し、動きが落ちた真田を警戒したまま、紙を二枚取り出す。

『光よ』と書いて、それを近くに張り付けた。

すぐに部屋は明るくなり、リニアは静かに真田の顔を見据えた。

薄暗い中ではよく見えなかつたが、彼女の身体はそこら中から血が溢れ出ており、肉が見え隠れしていた。

そしてー、

—彼女は泣いていた。

真田の顔から流れているのは、紛れもなく『涙』だつた。

「これが洗脳……」

リニアは呟く。

「すぐに樂にしてあげるわ」

彼女の耳元で囁いた瞬間、すぐに真田の攻撃が再開した。拳銃で撃たれた足とは反対の足で真田はリニアの顔面を狙う。彼女は身体を後ろに反らして、一撃を避けた。そして、その勢いで、リニアは真田の額に向かつて自身の額をぶつけた。鈍い音がする。互いに額から血が流れ、動きが止まつた。

「今だ三

リニアの合図と同時に、ノエルが引き金を引いた。

カン、カン、カン。

薬莢が落ちる音が聞こえる。

ノエルの放つた弾丸が真田の両腕と足に命中した。命中したと言つても、彼女は真田が重傷にならないようギリギリの所に当てたのだが。しかし、それで充分だつた。

真田は床に倒れた。

三発もの弾丸を食らつた彼女は、魔法の効果と傷の深さで再び起き上ることは不可能なようだ。

血だらけの真田をリニアは、どこか憐れみを含んだ瞳で静かに見下ろしていた。

「真田ちゃん」

決着がついたと分かつた途端、ノエルはすぐに真田の元へと走つてきた。そして死んではいない事を確認すると、彼女は泣きながら真田の身体を抱きしめる。

「やれやれ……色々と考えて戦うのがこんなに大変だとは思わなかつたわ」やつと終わつたと安堵したりニアも、急に身体の力が抜けて床に倒れた。

「ひどい格好だな」

すると突然、リニアの頭上で声がした。
「あらあら、葵ちゃん。生きてたの？」

彼女のジョークに若干機嫌を損ねた葵だったが、すぐに元の表情へと戻った。

「こんな所で死ぬわけないだろ。俺はただ全体攻撃の方が得意だから、お前らが邪魔だつただけだ」

そう言う葵を見て、ついリニアは心の中で笑ってしまった。

「全く……素直になれないんだから。」

「それにしては随分遅刻したのね？」

まだまだからかい足りない彼女は、ニコニコしながら葵を見上げた。対して葵は真面目な顔をする。

「地下があつたからそつちを調べていた」

「何があつたの？」

「制作途中の改造人間たち。おそらく倉庫だ」

「そんな……」

ふと、彼らの会話を聞いていたノエルが身体を震わせながら葵に詰め寄った。

「そんなはずない……」

「でも俺は実際に見た。奴が連れてきたのかは知らないけど」

平然と答える葵。

リニアは身体を起こすと、葵へと向き直った。

「さつきの爆発音聞こえた？」

「ああ。意外と苦労してるかもね」

天井を見上げて答える葵の顔には、少しも不安そうな表情が読み取れない。

「そうちやんが勝つって信じてるみたいね？」

「負けるはずないだろ」

互いに笑みを交わすと、二人は揃って階段の方を見つめた。

「様子ぐらいは見に行つてやるか」

「そうね」

「その身体でいけるのか？」

葵がリニアに手を貸そうとした瞬間、彼女はいつものよう胸を張つて答える。

「銀髪の魔法士、リニア・イベリンがこの程度の怪我で動けなくなるか弱い乙女だって言いたいの？」

「……ああ。言いたくないね」

軽い冗談を交わし合い、彼らは上へ続く階段へと向かつた。

目の前には誰もいない。辺りを見渡しても、奴の姿を捉える事ができない。しかし、部屋中には奴の声が響いている。

『私が何も考えていないと思つたのか？』

『さあ、私を探してみろ』

自信満々な奴の声が耳の中で木霊する。
俺が大きな反応を見せないので気に食わないのか、男は退屈そうにため息を零した。

瞬間。

「ぐつ……」

何かが俺の身体に当たった。いや、これは殴られた感触だ。

『姑息な奴だな……姿を隠して攻撃するなんて……』

すると、再び大きな笑い声が響いた。

『おいおい、悪役に向かつて姑息な奴だつて当たり前じやないか! まだ私は姑息ではない。これは私なりの戦い方だ。姑息だというならー、

—子供たちを人質に取るさ』

男は一瞬、間を開けると気味の悪そうな声で続けた。

そして再び鈍い痛みが俺を襲う。今度はお腹を殴られたようだ。

『ほら、もう一度うめき声を上げてくれ! 君が苦痛の末に本性をむき出しにするのが見た
いんだ!』

「はつ……男が苦しんでいる姿の何がいいんだか……」

俺は当てもなくボウガンを放つた。空しく壁に当たるだけだ。

『どこに撃っているんだね?』

「ぐ……うあつ……」

今度は連続で殴られた感触があつた。俺が思わずうめき声を上げると、男は更に嬉しそうに声を上げた。

『そうだ、まさにそれだ!』

すると突然、机の上の薬瓶が俺に向かつて飛んできた。俺は急いで紙を床に貼りつけ防御をしようとしたが、

『それは禁止だよ』

「な?」

掌に持っていた紙がビリビリと破けていった。

『防御は反則』

「う……あああああああ……」

防御する術なく、俺は思い切り薬瓶を浴びてしまつた。

——そつ、硫酸か?

頭への直撃は避けたものの、何重にも重ねてきていた服はついにボロボロになつてしまい、

顔にかかつた部分はとてもヒリヒリする。

『ははは三 見るも無残な格好だな三』

そして再び拳がみぞおちへと入る。

瞬間、俺はなんとなく勘で空中を殴つてみた。

一ボスツ

何も見えないが、明らかに感触があつた。男の笑い声も止まつた。
どうやら俺の拳は、奇跡手にも奴の身体に命中したようだ。

『……無駄に運がある奴め。そう、これは偶々ニ 偶然だニ 調子に乗るなよニ』

突然の攻撃に、奴も動揺を隠せずにいるようだ。

しかし、今の出来事で俺の仮定は確信へと変わつた。俺は奏を近くに呼ぶと、後ろでサポートを頼んだ。そして姿の見えない相手に向かつて、何もない空間に向かつて、話しかける。

「……正直、半信半疑だつた」

奴は何も言わず、俺の言葉の続きを待つているようだつた。

「お前が何の目的でこんなことをしたのかは分からぬが……不自然な点が二つある。初めに、研究のために戻ってきたのならこんなパフォーマンスなんてしないはずだ。必要な

い。時間の無駄だ。そして二つ目。俺たちを殺すつもりなら、わざわざ危険を冒してまでアジトに招く必要がない」

俺は一息おくと、静かに結論を述べた。

「つまり、お前も駒の一つにすぎないってことだ」

『どういうことだ』

『思考の制約。お前も改造人間だ。誰かがお前の行動を指示しているってことだ』
『思考の制約？ この俺が？ この身体が？ 笑わせるな！ 俺は改造人間である前に一人の人間だ！』

肩に大きな痛みが走った。また殴られたようだ。俺は精一杯、苦痛を表に出さないようにして会話を続ける。

『もちろんこれは仮定だ。でもこの結論以外考えられない。お前は利用された。協会と俺たち魔女の一派を脅すために。研究所はまだ動いているつてことを伝えるために。おそらく巫女に対する執着の部分は研究所も気に留めなかつたから、そこは調整されなかつたんだ。まあ研究所もお前がこんな大事を起こすとは思わなかつたのか不思議だけど』
『何が言いたい……』

男の声は明らかに上ずつていた。俺は肩を押さえたまま、じつと目の前の何もない空間を睨みつける。

『三年前、お前が俺たちの包囲網から抜け出せたのは……お前の etc のおかげだ』

奴が息をのみこむ音が聞こえた。

俺は、思わず自身の声に余裕が出てくるのを感じていた。

「じゃあその etc はどんな能力か。俺の友達は三年前からずっと研究をしていた。そう、あいつはお前の能力に気付いたんだ。そしてあいつはこう呼んだ」

俺はボウガンをすばやく構えると、扉に向かつて躊躇なく放つた。ポンッという音と共に奴の姿が現れた。今まで見たことがないような焦りを浮かべた顔。俺は思いつきり、奴の顔に向かつて右手を振り上げた。

〔一〕〔空間催眠〕

男は攻撃を避ける余裕もなかつたのか、俺の拳は見事に奴の顔に命中した。

〔二〕〔から形勢逆転だ〕

〔一〕〔話がある〕
このビルに入る前、葵は俺の腕を引っ張ると神妙な顔で告げた。

「――【空間催眠】？」
「ああ。もし戦闘中、奴が姿を消した時、身体に何か感触を感じることがあつたなら、奴はこの能力を持つてていると思つて間違いない」

そう、おそらく葵の予想は合つていた。

「お前の能力はとても複雑だ。【etc】。その他つて言葉が本当にお似合いだな」

「くつ……」

「おつと。最後まで聞け、馬鹿」

動き出そうとする男に向かつて、俺はボウガンを撃つ。綺麗に奴の腕に命中した。男の表情が徐々に固くなつていくのがわかる。

「お前の能力の条件、それは【密閉された空間】だ。だからお前は、このビルに俺たちを呼んだ。相手は手触りを感じても嘘か本當か分からない。お前はこの空間で最強だつた。しかし、お前は一つ失敗を犯した。魔法のような能力を魔法使いに見せても無駄だつたんだ」

男は腕に刺さつた矢を引きぬくと、空間に溶け込むように再び姿を消した。

『ああ、そうだ。空間催眠。それこそが私の能力だ。私もetc系列の能力を所持していたからこの研究を始めた。だが、おかしくないか？私も魔法のような能力を持つていて。しかし私の能力はetc【その他】になつてしまふんだ!!』

いくつもの薬品が俺に向かって飛んできた。また紙を使って防ぐ。いや、今回は違う。後ろにいた奏は、俺が何かを言う前に儀式を行った。ポケットに入れていた紙が光を放ち、俺は難なく薬品の攻撃を防いだ。男の声は聞こえないが、この部屋にいるのはわかっている。

「お前を殺したい気持ちは山々だがそれはしない。代わりにその能力を放棄しろ」

俺は空間を睨みつけたまま、最後の忠告をした。

『放棄？ そんなことするわけないだろ』この密閉された空間にいる限り、私は無敵だ』現にお前は私の姿を捉えることはできない』

「そうだな……ここが密閉された空間ならな』

窓の外に何かを伝つて下りる人影が映る。

俺は急いで奏を庇うように抱きよせた。

——ガチャン

奴の姿が現れると同時に、ガラスを突き破つて誰かが部屋の中に入ってきた。
「ごめん。ちょっと遅れちゃったね」
リニアだ。

大量に出血したまま、彼女は何てことないような笑顔で俺たちに振り返った。

「お前、その傷……大けがじやないか?」

「へーき、へーき。根性で何とかなるつて」

そして息つく暇もないまま、リニアは奴に向かつて叫んだ。

「三年ぶりね相変わらず醜い奴。さつきとその顔、ボコッボコにしてやるわ!」

——ドンツ

窓とは反対、ドアの方からも大きな爆発音が聞こえた。
これはおそらく空気弾の音に違いない。

「お前が主人公なのは確かだ。けど、これは残念ながらD級ホラー映画だった。監督と主人公は死亡。やがて視聴者の記憶からは薄れて行く安物の映画」
扉の向こうには葵が立っていた。

「チエックメイトだ」

そう言つて葵は奴に向かつて空気弾を撃つた。男の顔が苦痛で歪む。

「……何故貴様らはDに疑問を抱かない。それは魔女が創り出した虚構に過ぎないと何故わからない。正しい規則などない!我々研究所はたつた一つの真実を研究し続けているんだ。それなのになぜ貴様らは理解しようとしない?」
必死の形相で叫ぶ男に、リニアはゆっくりと近づいた。

「あんたらは人を殺すのがとても楽しそうだ。学問？ 研究？ そんなものただの言い訳、命乞いにしか聞こえない」

真っ赤に染まつた右手で、彼女は男の顔面を勢いよく殴つた。

壁にぶつかり頃垂れる男。

「くくく……」

沈黙に包まれていた部屋に、突然笑い声が響いた。
割れた窓ガラスから入る風のせいか妙に寒気がする。

「こいつ、何がおかしいんだ。

「くくく…ははは…そうだな…学問も研究もすべて言い訳だつた…我々はすべて楽しんで行つていた…そうか、ケラーが言つて『眞実を知れ』とはこういうことか…私は利用されていたのか…」

男は手で顔を抑え、ひとり、狂つたように笑い続けた。

そして急に押し黙ると、奏の方を鋭い顔で睨みつける。

「神社の子供には高い確率で…が生まれる。神がかり。神が入るという意味だ。本当に神というものはいるのか。私はその答えが知りたかった」
俺は黙つていてることができず、ついに男に向かつて怒鳴つた。

「お前が言つてることは全て言い訳だ。お前はこの行動が面白くて犯した。三年前の誘

掲事件からずっと変わらない、お前は今ここで殺されても当然の存在だ

男は俯いたまま顔を上げない。

「……最後に言い残すことはあるか？」

葵は奴に照準を合わせたまま間いかけた。男は顔を上げずに小さく咳き始める。
「カミュはいつもぶらついていた。自殺と反抗の中で。光と闇の中を歩きながら、魂と肉体の間を。価値と存在の間を彷徨した男。『存在は本質より先にある』。私はこの言葉がとても素敵に感じた。本質は外にある概念や価値に基づいて規定されたことにはすぎない。存在そのものが持っているものではない。我々は存在するから、ここにいる。本質なんてものは後付けにしかすぎない。私は本当に彼の哲学が好きだ」
「遺言はそれで全部か？」

「ああ」

「？」

「最後の言葉がアルベール・カミュか。笑わせるな」

「知っているか？『我々は人生に何か意味があると信じている。そのためには理性をもつたと言われている』。私は、この理論が大嫌いだ
「お前は人間性を望んでいるのか？」
「まさか。そんなものはいらない」

—なんだ？

「俺は……絶望しか待つていないと知りながら、何度も何度も岩を運ぶ存在が人間の眞の姿だと思つてゐる」

「ほう。その部分を知つてゐるのか」

「ああ、だいぶ前に友人が聞かせてくれた。それじやあ……ここまでだ。御苦労だつたな」「虚無に囚われ自己を忘れる。それが人間の本性とは……これだから私は哲学なんてものは嫌いなんだ」

—俺はこの会話を聞いた覚えがある？

妙な既視感に捉われ口を閉じていると、やつと男が顔を上げた。

「おい、お前。鈴木聰太」

「……何だ」

「金色の魔女には氣を付ける。あの女は普通じやない」

—普通じやない？そんなのとつくに知つてゐる。

そう答へようとした瞬間、奴が何かを上に向けて投げた。

「しまつ…」

葵とリニアのあせる声が聞こえたと同時に、辺りは光に包まれた。

一閃光弾かニ

目の前で男が何かゴソゴソとしている音が聞こえるが、目がやられて見ることができない。どうやら鞄の中から何かを取り出しているようだ。

「私がこんなところで消えてたまるかニ馬鹿め、確かに今回は私の負けを認めよう。だが次があることを覚悟しておけニ」

眩しさから解放され目を開けると、男の姿は俺たちの前から消えていた。

「くそつニ」

一また取り逃がしたニ

俺は壁を殴つて、窓の方に目をやつた。

ここは五階。改造人間の奴なら、最悪ここから飛び降りたとしても死にはしないだろう。リニアも悔しそうな表情をしている。

しかし、葵だけは違った。どこか余裕の顔だ。

「鈴木……たぶん大丈夫だ。奴はもう二度と現れない」

「何でそう言い切れる?」

「そうだな……」

続きをいうことなく、葵はそつと目を閉じて静かに笑った。奏の方に振り替えると、彼女の周りにいた子供たちも姿を消していた。おそらく彼らは奴の創り出した幻だったのだろう。

「やっと、終わったのか。」

俺は窓の方に近づいた。足元でガラスの破片が割れる音がする。
今は何故かそれが気持ちいい。

「はあ……はあ……」

傷だらけの体を抑え、男は足を引きずりながら道を行く。

「くそ、ケラーの奴め、何も教えずに私を派遣するとは……おかげでこの有様だ、絶対に許さん!」

彼の瞳には憎しみの色が宿っている。

「ひとまず生き延びることはできたな。ははは……研究所に戻つてもう一度初めからやり直しだ!」

口元についた血を拭い、男は先を急ぐ。

しかし、そんな男の目の前に誰かが立ち塞がつた。

「こんにちは」

「な……!?」

男の顔から一気に血の気が引いていく音がした。彼の目の前には満面の笑みを浮かべた天城、金色の魔女が立っていたのだ。

「私の子が随分とお世話になつたみたいね」

「そ、それがどうした! お前も何か企んでいるのだろう、あの小娘を使つて!!」

「いやね、そんなことないわよ」

あくまでも冷静さを取り繕うとする男だつたが、天城の余裕の表情に彼はうまく言葉を紡げなかつた。

「私はもう、あなたたちが何か起こしても関わらないつもりでいたけど」

ふと、笑顔を見せていた魔女の目つきが変わつた。

「あなたたちは絶対に手を出してはいけないものに、そう、あの子に手を出してしまつた」空気が冷たいものに変わつたのを察し、男は後方に退路を見つけようと試みる。

しかしー、

「ああ、逃げちやだめよ。まだ話は終わつていない。そこに立ちなさい」

彼女の言葉と共に、男の体はまるで石になつたかのように動けなくなつた。
「あなたの声はよく聞こえていたわ。なぜ文字を利用した魔法のみを体系化されたのかつて」

「来るな!」

徐々に距離を狭めてくる彼女に、男は必死に叫んだ。魔女は男の叫びを気にすることなく続ける。

「それは簡単。一番弱いからよ。あなたが etc と呼んでいるものを私は殆ど知つていて。けど文字を利用した魔法が『一番弱い』とわかつたから、私はそれを学問、体系化したのよ」

「なんだと?」

男は驚いた顔で女を見ていた。

「まあ、説明はこんなところね」

女は再び笑顔へと戻り、軽い調子で男に問いかける。

「ところで私のもう一つのニックネームを『存じ?』
天城紫乃のもう一つのニックネーム。

【金色の魔女】、【マエストロ】、そしてー、

「……【黒死病の女】」

311.psd

男がそう呟くと、彼女の笑顔が変わった。依然として笑顔であることには違いないが、そこには人間味が一切感じられない。まるで狂気に満ちた顔だった。

「大正解。私の能力は、自ら作ったウイルスを相手に撒くことができるの。だから、私の周りにいる人間は伝染病に罹ってしまう。いや、感染させられるのよ」

「来るな！」

女は一旦落ち着いた顔に戻るも、歩みを止めるることはなかつた。

「けど、これはあまりにも危険な能力。だから私はetcのような、危険度の高い魔法をなくして文字を利用した魔法のみを体系化した」

男のすぐ目の前に女の顔が映る。彼女は再び冷たい笑顔を浮かべていた。

「最後にもう一つだけ教えてあげる」

「……なんだ」

「元々、魔法の根源は文字ではない」

魔女は、すっと瞳を細めた。

「一音声だよ」

瞬間、大きな破裂音と共に男の頭が消えた。

そして、彼の体は首から下を残して、地面へと倒れた。

【Mr.modification】と呼ばれた男。多くの子供を恐怖に震えさせた連続誘拐犯の最後は至極あつけなかつた。

「あらら、道が汚れちやつたわね」

魔女は何事もなかつたかのようく咳く。

「『綺麗になりなさい』」

すると道路からは男の体も血も消え、いつも通りの地面が顔を見せた。

元通りに戻つたことで彼女の機嫌も直つたのか、天城は鼻歌を歌いながら鈴木たちのいるビルへと入つていつた。彼らはうまく連携を取り合い、ついでに奏のトラウマも取り除くことに成功したようである。

「やっぱ私は表にでるよりこっちの方がいいわね」

天城はため息を一つついて冬の空を眺めた。

「……こんなこと、これが最後だといいけど」

——研究所の本格的な介入に教会も動くだらう。戦闘が起きる可能性は極めて高い。

「まあ、どうにかなるか」

いつも通り、そこまで深くは考えずに彼女は過ごす。

これが天城紫乃のスタイルだ。

翌日。体中があちこち疼いたが、俺はどうやらマシな方のようだ。リニアはもちろん、葵

もノエルもそれなりに怪我を負つており起き上ることは難しそうに思える。先生の伝手による医者のおかげでだいぶ回復したが未だに体が重たい。疲労が抜けていないのは確かだつた。

「はあ……」

昨日のことを思い出す。最後の場面、葵と奴の会話。あれは以前、俺が夢で見た会話とそつくりそのままだつた。妙なもやもや感を抱えたまま、再び俺は布団の中で目を閉じるのであつた。

「いつ……たい」

リニア・イベリンの朝は悲鳴が始まつた。骨折等の傷は回復したようだが、痛みはかなり残つていた。目覚めたと同時に苦痛に襲われ、彼女は思わず声を漏らしてしまつた。今回の出来事、彼女にとつて悔しい結果に終わつた。何より彼女は自身の未熟さを痛感したのだ。

「一もつと強くなないと」

時宮葵の朝は普段と変わらない。ただ寝ている場所が自身の家ではなく、幼稚園という点

が違うだけだ。彼の体にも未だに苦痛が残っている。だが、彼の性格上表に出すことにはなさそうだ。一階での改造人間たちとの鬭い、事実、葵はそこまで苦労することはなかつた。自身の怪我が一番軽いとさえ彼は思つてゐる。

「ふう……」

葵は思わずため息を漏らした。今回の事件、研究所の狙いが全く読めない。葵は様々な仮説を思い浮かべ消してゆく。そして再び布団の中で目を閉じた。三年前と似たような事件に、葵は複雑な心境でいたのだ。

ノエルの朝は涙で始まつた。目を開けると、彼女の隣には友人の姿があつたのだ。先日の戦いの末、彼女の友人は無事に洗脳から解放された。そして怪我も治りかけていることに、ノエルは涙を流さずにはいられなかつた。

「本当に……よかつた」

真田の無事を確認すると、ノエルは天井を見上げてため息をこぼす。彼女は自身の今後を思つた。研究所への裏切りとも取れる行為を行つてしまつたノエル。

「部長はきっと呆れているだろう。

そう思うとノエルは悲しくなつた。誰かに見捨てられるのが嫌だつたのだ。それでも彼女

は研究所に帰るしかない。それ以外の選択肢が思い浮かばなかつた。たとえ二度と友人に会えなくなるとしても。

真田の朝は友人の顔が始まつた。目を開けると、天井、そして友人の顔があつた。

彼女は昨日の記憶を思い出す。学校にいた彼女は、突然入つてきた男に捕まり……その後の記憶が非常に曖昧となつていた。ふと、真田は自身の体にたくさんの傷跡が残つているのを見て、何か大変な事件があつたに違ひないと不安でいっぱいになつた。何より彼女は生徒たちの安否が心配でならなかつたのだ。

「大丈夫だよ」

彼女の頭の上から声がした。ノエルだ。包帯を取りに行こうとしていた彼女は、そう言つて真田を安心させた。彼女の笑顔に真田も安堵していたが、まだ危惧すべき問題は残つている。

一研究所に居場所が割れてしまつた。連れ戻される可能性は低いが、何も起こらない可能性も低い。また自分の生徒が危険になるかもしれない。

真田は不安で胸が押しつぶされそうになつたまま、じつと天井を見上げていた。

奏の朝はいつも通りだつた。目を覚ますといつも通りの自分の部屋。
ふと、昨日の出来事が彼女の頭をよぎつた。

『一泣くな』

いつも優しい鈴木が初めて彼女を叱つた。普通なら怖くて泣き出してしまふところだつたが、奏は違つた。彼女が感じたのは、鈴木が本当に自身のことを思つてくれているということ。それがとても嬉しくて彼女は泣いてしまつた。

その時の事を思い出して自然と笑みをこぼす奏だつたが、すぐに恥ずかしさが込み上げてきだ。あらゆる醜態を見せつけたあげく、鈴木の腕の中で泣いてしまつた。奏は羞恥に耐え切れず、布団の中でじたばたと転がり始めた。そして、ひとしきり暴れると、ため息をついて枕に顔をうずめた。

今回の事件で、彼女は自分が周囲の人間にどれだけ大切にされているのかを実感したのだ。

「私はお世話になつてゐるんじやなかつた。

「私たちは家族みたいなものだつたんだ。

そう思うと、奏は顔を上げて小さく微笑んだ。

「静かね……」

昨日の騒動がまるで嘘だつたかのような穏やかな日常の中、天城はぼんやりと窓の外を眺めていた。今日も幼稚園は休園日。休みが明けるのは明日であり、天城は一日中部屋の中で考え事をしていた。

別の部屋で寝ている研究所の子供。彼女はもう研究所に戻ることは不可能に近いと天城は思っている。そして、天城は彼女を見捨てることはできないとも思っていた。

だが、きっと彼女がこんなことを言うと協会はもちろんのこと、周りの連中も驚きの表情を見せるだろう。彼らには極悪非道な人間と思われている天城は、その事が少し悲しくも感じていた。

「ま、この感情は天城紫乃のものだろうけど

彼女は大きく伸びをして微笑む。

「あれ？ 私が天城紫乃だつけ？」

他人が聞いたら奇妙に思う発言を残して、彼女は静かに目を閉じた。今晚の夕食には、全員起き上がりつくるだろう。今まで以上に騒がしい夕食になることは間違いかつた。

全

—また家族が増えるのか。

「もつと稼がなきやなー。いつそのこと第三次著作権問題でも起こしてみようかしら」
協会が聞いたら身震いでも起こしそうな事を楽ししそうに咳く魔女。
そして天城は、窓を開けて大きく息を吸う。冷たい空気が彼女の鼻をくすぐった。

—先の事なんか考えない。ただ日々を懸命に生きる。

心の中でそう咳き、彼女は白い息を吐いた。

「……かうすつかり冬だつたな」

そう咳いた彼女の吐息は、冬の寒空の下に消えていった。

- Track.3 A Bad Dream End. -

320.psd